

茨城県 笠間市

# 寺崎台地遺跡

太平洋観光開発(株)の事務所兼共同住宅建設に伴う  
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

笠間市寺崎台地遺跡発掘調査会

平成 4 年 3 月

題字 河村正夫（笠間市教育委員会教育次長）

## 序 文



私たちの郷土等間市は、数多い文化遺産に恵まれ。先人より幾世代にもわたり受継がれて来ておりますが、地域開発など押し寄せる近代化の波とともに、貴重な文化遺産も失なわれていったものも少なくあります。

このたびの寺崎台地遺跡発掘調査も、太平洋観光開発株式会社による宅地造成に伴い、教育委員会はその遺跡の重要性を考え、「寺崎台地遺跡発掘調査会」を発足し、建築主・地権者の協力を戴き当市では初めてでもある集落調査を、平成2年12月から平成3年6月にかけて2回にわたり、第一次調査、第二次調査として調査を行い寺崎台地遺跡の調査報告書ができました。

今回の調査結果については、縄文時代後期から歴史時代（9世紀後半から10世紀）にかけて構築された住居跡、井戸遺構などが発見され、遺物としては縄文土器・土師器・須恵器・石器類等が多数出土し往時をしのばせるものがあります。

この調査により文化財に対する認識が一層深まり郷土を愛する心を培ううえで貴重な資料になることと思われます。

最後に今回発掘調査及び整理にあたり太平洋観光開発株式会社の御協力に深く感謝申しあげると共に、茨城県教育庁文化課・水戸教育事務所の御指導、さらには発掘調査から報告書作成にあたられた主任調査員の千種重樹先生をはじめ調査員の方々、又、作業に従事された方々、そして関係各位の御協力に心から感謝申しあげます。

平成4年3月

寺崎台地遺跡発掘調査会会长 原田敏夫

## 例　　言

- 1 本書は、茨城県笠間市寺崎台地遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、太平洋観光開発株式会社の事務所兼共同住宅建設に伴うものである。
- 3 発掘調査は、笠間市寺崎台地遺跡発掘調査会（原田敏夫会長）の委嘱により、千種重樹を团长とし、水谷 正、小堤静江、高橋陽子、飯島栄子の協力を受けて実施した。
- 4 発掘調査の面積は、A 地区約 2,900 m<sup>2</sup>, B 地区約 400 m<sup>2</sup>である。
- 5 発掘調査は二度にわたって実施し、A 地区は平成 2 年 12 月 14 日から 12 月 26 日まで 21 日間、B 地区は平成 3 年 5 月 20 から 6 月 3 日まで 13 日間行った。
- 6 遺物と図面の整理作業、原稿の執筆は、調査終了後より平成 4 年 1 月 30 日まで行った。
- 7 本書に収録した写真は、千種重樹が撮影したものである。
- 8 整理作業は、主として下記の分担で行った。  
千種 重樹（遺構図作成、土器・石器・鉄製品実測図、トレース、拓影図、写真図版、本文執筆、レイアウト）  
飯島 栄子（遺物の水洗い、注記、接合資料の抽出、土器接合）  
田村みどり（遺構図および土器実測図のトレース、記号・番号の貼付）
- 9 出土遺物は、笠間市教育委員会が一括保管している。

## 実測図凡例

- 1 出土遺物の種類は次の記号で区別した。  
●縦文土器 ●土師器 ○須恵器 ▲自然石 △石器 ■鐵滓 □鉄製品
- 2 接合資料は、出土地点番号（遺物番号と同一）、表裏関係（表△・裏▽・立ち▷）、床上レベル（計測単位cm）の順で記載した。
- 3 遺物実測図で、土師器のうち網点を施した部分は内面黒色処理を意味し、還元焰で焼成した須恵器は断面を墨で塗りつぶして区別した。また、石器実測図の断面にも網点を利用した。

# 笠間市寺崎台地遺跡

## 目 次

序

笠間市寺崎台地遺跡発掘調査会会長 原田 敏夫

例 言

本文目次

挿図目次

図版目次

第一章 緒 言 ..... 1

第二章 遺跡の位置と自然環境 ..... 2

第三章 遺跡周辺の考古学的環境 ..... 4

第四章 発掘調査区と調査方法 ..... 7

第五章 遺構の分布状況 ..... 9

[A 地区の遺構と遺物]

第六章 円形周溝状遺構の調査 ..... 13

1 円形周溝状遺構 ..... 13

第七章 歴史時代住居址の調査 ..... 16

1 第一号住居址 ..... 16

2 第二号住居址 ..... 21

3 第三号住居址 ..... 24

4 第四号住居址 ..... 27

5 第五号住居址 ..... 31

6 第六号住居址 ..... 35

7 第七号住居址 ..... 38

第八章 土壌群の調査 ..... 42

1 第二号土壌 ..... 42

2 第三号土壌 ..... 47

3 第四号土壌 ..... 47

4 第五号土壌 ..... 49

5 第六号土壌 ..... 50

第九章 その他の遺構の調査 ..... 52

1 粘土坑 ..... 52

2 井戸状遺構	53
(B 地区の遺構と遺物)	
第一〇章 確認調査（試掘）の概要	57
1 第1トレンチの確認調査	57
2 第2トレンチの確認調査	57
3 第3トレンチの確認調査	58
第一章 御文時代住居址の調査	61
1 第二号住居址	61
第二章 歴史時代住居址の調査	65
1 第一号住居址	65
2 第三号住居址	69
第三章 まとめ	80
笠間市寺崎台地遺跡発掘調査会役員	81
発掘作業従事者・整理報告書作成従事者	81

## 挿図目次

第一図	遺跡位置図・周辺地形図（○印 寺崎台地遺跡）	3
第二図	発掘調査区域図	8
第三図	A 地区遺構分布図	11～12
第四図	円形周溝状遺構実測図	13
第五図	円形周溝状遺構周溝部断面図	14
第六図	円形周溝状遺構出土土器実測図・拓影図	15
第七図	第一号住居址実測図・遺物出土状態図	17～18
第八図	第一号住居址出土土器実測図・拓影図	20
第九図	第二号住居址実測図・遺物出土状態図	21
第一〇図	第二号住居址炉址実測図	22
一一図	第二号住居址出土土器実測図	23
一二図	第三号住居址実測図・遺物出土状態図・接合関係図	25
一三図	第三号住居址出土土器実測図・拓影図	26
一四図	第四号住居址実測図・遺物出土状態図・接合関係図	28
一五図	第四号住居址出土土器・土製品実測図	29
一六図	第五号住居址実測図・遺物出土状態図	33～34
一七図	第五号住居址出土土器実測図・拓影図	35
一八図	第六号住居址実測図・遺物出土状態図	36
一九図	第六号住居址出土土器実測図	37
二〇図	第七号住居址実測図・遺物出土状態図	39
二一図	第七号住居址カマド実測図	40
二二図	第七号住居址出土土器実測図	41
二三図	第二号（左）、第三号（右）土壤実測図	43
二四図	第二号土壤出土土器実測図（一）	44
二五図	第二号土壤出土土器実測図（二）	45
二六図	第二号土壤出土土器実測図（三）	46
二七図	第三号（上段）、第四号（下段）土壤出土土器実測図・拓影図	48
二八図	第四号（左）、第五号（右）土壤実測図・遺物出土状態図	49
二九図	第六号土壤実測図・遺物出土状態図	50
三〇図	第五号（左上）、第六号土壤出土土器実測図・拓影図	51

第三一図	粘土坑実測図	52
第三二図	井戸状遺構実測図	54
第三三図	井戸状遺構出土土器、石器実測図	55
第三四図	B地区トレンチ土層断面図	58
第三五図	B地区トレンチ配置図・遺構分布図	59～60
第三六図	第二号住居址実測図・遺物出土状態図	62
第三七図	第二号住居址出土土器実測図・拓影図	63～64
第三八図	第一号住居址実測図・遺物出土状態図	62
第三九図	第一号住居址出土土器実測図・拓影図	68
第四〇図	第三号住居址実測図・遺物出土状態図	71～72
第四一図	第三号住居址カマド実測図	73
第四二図	第三号住居址出土土器実測図（一）	74
第四三図	第三号住居址出土土器実測図（二）	75
第四四図	A地区確認面出土土器実測図	76
第四五図	A地区、B地区出土石器実測図	77～78
第四六図	A地区、B地区出土石器、鉄製品実測図	79

## 付 表 目 次

表 1	第一号住居址ピット一覧表	16
表 2	床面硬度分類表	32
表 3	B地区溝状遺構実測値	58

## 図版目次

### A 地区

- 図版第一 遺跡の現状と東南方向に佐白山を望む  
遺跡より眺めた南西の景観
- 図版第二 遺構検出作業風景〈第一号住居址、円形周溝状遺構付近〉  
遺構プラン検出後の状況〈西側より〉
- 図版第三 円形周溝状遺構プラン確認の状況〈西側より〉  
円形周溝状遺構発掘後の状況〈西側より〉
- 図版第四 円形周溝状遺構周溝 A-B セクション土層断面〈南側より〉  
円形周溝状遺構周溝 C-D セクション土層断面〈南側より〉
- 図版第五 円形周溝状遺構周溝 E-F セクション上層断面〈西側より〉  
円形周溝状遺構周溝 G-H セクション土層断面〈西側より〉
- 図版第六 発掘調査風景〈第五号住居址〉  
発掘調査後の遺跡の全景〈西側より〉
- 図版第七 発掘調査風景〈第一号住居址付近〉  
第一号住居址遺物出土状態〈西側より〉
- 図版第八 第二号住居址遺物出土状態〈東側より〉  
第三号住居址遺物出土状態〈東側より〉
- 図版第九 第四号住居址遺物出土状態〈南側より〉  
第五号住居址遺物出土状態〈西側より〉
- 図版第一〇 第六号住居址遺物出土状態〈西側より〉  
第七号住居址遺物出土状態〈東側より〉
- 図版一一 第一号土壤遺物出土状態〈東側より〉  
第二号土壤遺物出土状態〈北側より〉
- 図版一二 第二号土壤遺物出土状態〈南側より〉  
第三号土壤遺物出土状態〈西側より〉
- 図版一三 第二号（上）、第三号（下）土壤全景〈南側より〉  
第四号（右）、第五号（左）土壤全景〈北側より〉
- 図版一四 第六号土壤遺物出土状態〈南側より〉  
粘土坑全景〈南側より〉
- 図版一五 粘土坑全景〈東側より〉

井戸状遺構全景〈南側より〉

- 図版第一六 第一号住居址出土土器・石器
- 図版第一七 第三号（上）、第四号（下）住居址出土土器
- 図版第一八 第五号（上）、第六号（中）、第七号（下）住居址出土土器
- 図版第一九 第二号土壙出土土器
- 図版第二〇 第二号（上）、第三号（下）土壙出土土器
- 図版第二一 第四号土壙（上）、井戸状遺構（中）、確認面（下）出土土器
- 図版第二二 円形周溝状遺構出土土器
- 図版第二三 井戸状遺構（上二段）、第二号住居址（下）出土石器・炉石
- 図版第二四 鉄製品（上段）、土偶（下段）

B 地 区

- 図版第二五 寺崎台地遺跡B地区の現状〈南東側より〉
- 第1トレンチの試掘状況〈西側より〉
- 図版第二六 第2トレンチの試掘状況〈東側より〉
- 第2トレンチの全景〈西側より〉
- 図版第二七 第3トレンチの試掘状況〈西側より〉
- 第3トレンチの全景〈西側より〉
- 図版第二八 第一号住居址遺物出土状態〈南側より〉
- 第一号住居址遺物出土状態〈南側より〉
- 図版第二九 第一号住居址遺物（墨書き土器）出土状態〈南側より〉
- 第一号住居址全景〈南側より〉
- 図版第三〇 第二号住居址発掘調査風景〈西側より〉
- 第二号住居址遺物出土状態〈南側より〉
- 図版第三一 第二号住居址遺物出土状態〈南側より〉
- 第二号住居址遺物出土状態〈北側より〉
- 図版第三二 第二号住居址遺物出土状態〈南側より〉
- 第二号住居址遺物出土状態〈南側より〉
- 図版第三三 第三号住居址発掘調査風景〈西側より〉
- 第三号住居址遺物出土状態〈南側より〉
- 図版第三四 第三号住居址遺物出土状態〈東側より〉
- 第三号住居址遺物出土状態〈西側より〉

- 図版第三五 第三号住居址カマド断面〈南側より〉  
第三号住居址全景〈南側より〉
- 図版第三六 第一号（上）、第二号（下）住居址出土土器
- 図版第三七 第二号住居址出土土器
- 図版第三八 第二号（上）、第三号（下）住居址出土土器
- 図版第三九 第三号住居址出土土器
- 図版第四〇 A・B両地区出土石器

# 第一章 緒 言

笠間市は茨城県の西部中央に位置し、1955年（昭和30）、笠間町・南山内村・北山内村・大池田村が合併して笠間町となり、1958年（昭和33）、稲田町を編入して市制を施行した。

京都の伏見稻荷、佐賀の祐徳稻荷とともに日本三大稻荷に数えられる笠間稻荷神社を中心に発展した門前町であるが、13～16世紀には、佐白山頂に城を構えた笠間氏に支配され、その城下町ともなった。江戸時代には、笠間藩主牧野氏によって城下町としての完成をみたのみならず、水戸一結城一小山を結ぶ街道筋の宿場としてもぎわった。

この門前町・城下町・宿場町という3つの性格を今日に至るまで混在させたまま、笠間は盆地の中心としての多様な機能を果たしている。

稲田のみかけ石として知られる石材の採掘・加工はわが国有数の規模を誇り、市の代表的産業となっている。また、伝統産業として笠間藩の保護・育成のもとに完成した笠間焼があり、最近国の伝統工芸に指定され、益々その発展が期待されている。

市域の中央以北は、佐白山・三峯山・仏頂山・国見山を中心にして笠間県立自然公園に指定され、南部には吾闘山と愛宕山を中心とする吾國愛宕県立自然公園があり、観光資源に恵まれている。

笠間稻荷神社をはじめ稲田神社・楞嚴寺・西念寺・正福寺など由緒ある社寺も数多い。

笠間市は利根川の上流域に位置するため、埋蔵文化財包蔵地も数多く、縄文時代の馬廻り遺跡、縄文・古墳時代の桂町遺跡・愛宕山遺跡、弥生時代の弁天遺跡などが知られている。

笠間市と友部町に事業所を有する太平洋観光開発株式会社茨城支社（本社・東京都港区虎ノ門1-22-13）は、恵まれた自然環境と豊かな芸術性、そして城下町・門前町として栄えた歴史、さらに焼物の産地として伝統のある笠間市を選び、寺崎字峯崎の地に事務所兼社員の共同住宅を建設することになった。

しかし、建設予定地は、周知の寺崎台地遺跡のエリアに該当するため、その取扱いについて市教育委員会、開発側、水戸教育事務所の三者で協議を重ねた結果、次善の策として記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。

このため発掘調査会（原田敏夫会長）を結成し、規約・会計規定・事業計画・予算などの審議を経て、第一次（A地区）発掘調査を平成2年12月14日から12月26日までの21日間、第二次（B地区）発掘調査を平成3年5月20日から6月3日までの13日間にわたって行った。

発掘調査は、千種重樹（茨城県埋蔵文化財指導員）を担当者とし、第一次調査には補佐員に水谷正、小堤静江、高橋陽子を、第二次調査には水谷正、飯島栄子を加え、作業員として栃木県真岡市に所在する菅谷緑建株式会社の従業員18名の協力を受け、後述するような遺構を多数調査することができた。

## 第二章 遺跡の位置と自然環境

寺崎台地遺跡は笠間市寺崎字峯崎 170 外に所在する。

笠間市は県西中央部に位置し、北は西茨城郡七会村・東茨城郡常北町、東は水戸市・東茨城郡内原町・西茨城郡友部町、南は西茨城郡岩間町・新治郡八郷町、西は西茨城郡岩瀬町・栃木県芳賀郡茂木町に接する。

八溝山地・鶏足山塊の南端にあたり、市域の周辺は山岳丘陵地帯で、中央に笠間盆地を形成している。北は国見山、東は朝房山、西は仏頂山、南は吾国山・難台山など八溝山系の山地によって周囲を囲まれ、盆地の中央に佐白山が独立してそびえる。

この笠間盆地は、水戸市の西方約 20 km に位置し、標高 300 ~ 400 m の前記の山々に開まれ、市域を横切って東流する稻田川が、東部を南流する渕沼川に、市のはば中央で合流する。

盆地内の地質は渕沼川が形成した新しい第四紀の砂礫から成っているが、周囲の山々は古生代の粘板岩やチャート、第三紀の花崗岩など古いものから成り立っている。

笠間は、奈良時代の創建と伝えられる笠間稻荷神社を中心に発展した門前町であるが、『常陸国風土記』新治郡の条に「郡より、以東五十里、笠間村あり、越え通ふ道路を、葦穂山と称ふ。古老人曰く、古、山賊あり、名を油置壳命と称ふ。今、社の中に岩屋あり、俗の歌に曰く、言畜けば 小泊瀬山の石城にも 率て籠らなむ な恋ひそ我妹」と見える。

「葦穂山」については、万葉集卷十四に「筑波嶺に 背に見ゆる安之保山 あしかるとがも さね見えなくに」とあるように、この山は筑波山の北背に接続している標高 628 m の足尾山のことであろう。新治・真壁の両郡界にそびえている。

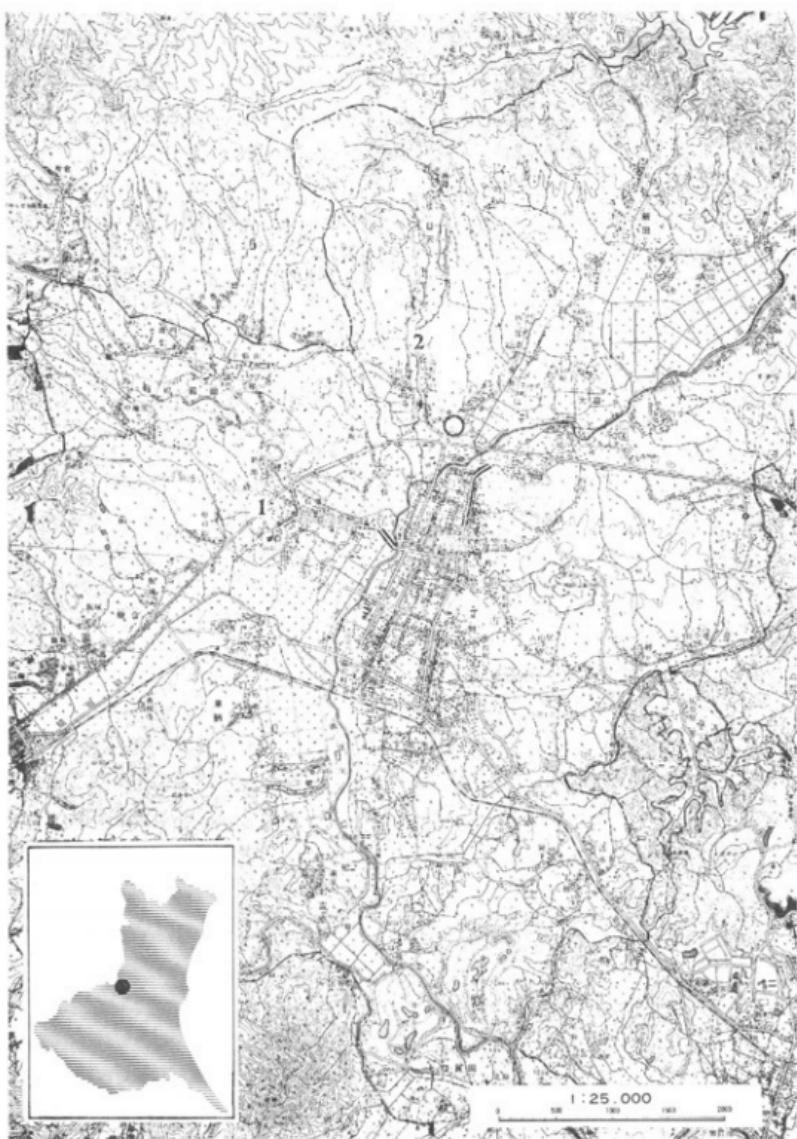
古くはこの山と加波山とを合わせて仏頂山に至るまでの峰の総称であったともいわれている。

この説に対して吉田東伍氏は「笠間より往来には、蒲山の北辺を通ふべきに、葦穂山を通路の由かけるは疑ふべし」といっているが、新治郡衙から東へ 50 里笠間村へ「越え通ふ道路」は、現在の協和町古郡から真壁町に出て、一本杉峠を越えて大塚を通り、吾国山と難台山の間を抜け、笠間へ通じていたものといわれる。いずれにしても古くから人間の往来があり、特に栃木県方面との交流があったことは疑う余地のないところである。

現在は市域のほぼ中央部を東西に走る断層線を利用して、南部を JR 水戸線、北部を国道 50 号線が東西に走り、西部を国道 355 号が南北に貫いている。また、4 本の県道が笠間を起点としている。

本遺跡の所在する寺崎台地は、おおむね市の中央部で笠間盆地の北部にあたる。南縁を渕沼川が西流し、中央部を日沢が南流して渕沼川に注いでいる。南部を国道 50 号が東西に通過する。

遺跡付近および笠間市の自然環境は以上のように概観できると思う。



1 石井台遺跡 2 寺崎台古墳群  
第一図 遺跡位置図・周辺地形図 (○印 寺崎台地遺跡)

### 第三章 遺跡周辺の考古学的環境

昭和 62 年版茨城県教育委員会発行の『茨城県遺跡地名表』に掲載されている笠間市内の遺跡は 49 を数える。この中には数は少ないが、一部湮滅や過去に学術発掘調査が行われた遺跡も含まれている。

寺崎台地遺跡については、昭和 37 年度の『遺跡台帳』に「前方を田圃に囲まれた高台で、寺崎小学校の裏の畠地より縄文式土器が無数に出土する。なお、須恵器や石器も出土している」と記載されているのに対し、昭和 57 年の現況調査報告では「原野と工場敷地でほとんど破壊され、都市計画道路建設のための測量中」とその変貌ぶりを記録し、縄文時代の集落跡であると結んでいる。

本遺跡の周辺は、寺崎台古墳群をはじめ遺跡の多いところとして注目されているが、前記 49 の遺跡の種別内訳をみると、包蔵地 20、古墳 4、古墳群 15、窯跡群 1、寺院跡 1、城館跡 8 となつておる、いうまでもなく考古学的環境を形成している。

これらの遺跡のうち主要な遺跡を抽出して概観すると、下記のように説明できると思う。

駒切原遺跡 池野辺 657 外

池野辺 657 番地一帯の畠地が駒切原遺跡とよばれる集落跡で、縄文土器や石器が出土したところといわれている。しかし、台地が削られて耕地整理が行われ、地形が大きく変化したようである。現在表土からの出土品はなく、南面台地の畠が遺跡の一部として残っている。

三本松遺跡 北吉原字尚塚原 382

北に潤沼川、南の吾国山に挟まれた台地で、旧南中学校の校庭を含む一帯である。運動場拡張の折に住居址が発見され、縄文土器が出土した。

弁天遺跡 笠間字川東 1051 外

現在は県立笠間高校の敷地になっているが、校舎建築中に弥生時代の住居址が発見された。

石斧・弥生式土器が出土した。一部湮滅の遺跡である。

柱町遺跡 笠間字柱町 2891 権現峯 2890

佐白山の南麓、南と北側は田圃の台地状の山地に所在し、弥生式土器の破片が散在している。

台地一帯は弥生時代の集落跡と考えられる。

南吉原遺跡 下市毛 1300 外

以前は「笠間高校農場遺跡」と呼称したように、農場と芸術村一帯を含めた地域を包蔵地と見做してよいと思う。弥生式土器の散布がみられ、台地の下を南東に流れる潤沼川低地の米作りと関連した弥生時代集落跡の存在が考えられる。

荒谷古墳群 上加賀田字荒谷 1641 外

宍戸に至る県道の両側に、直径 10 m、高さ 1 m ほどの円墳と、直径 10 m、高さ 2.5 m の円墳 2 基が所在し、一方の円墳の中に石塔がみられる。この両者は県道によって切断されたものかどうかは不明である。50 m ほど離れた南側の畠には縄文・弥生式土器が散在している。

中郷古墳群 来栖字中郷 1930 外

JR 水戸線等間一種田間の来栖のカーブの南側、標高 65 m ほどの竹林混りの森林内に点在する古墳群で、東西 100 m、南北 200 m ほどの狭い範囲に 4 基の古墳がある。

直径 15 m、高さ 1.5 m の円墳 2 基、直径 10 m、高さ 1.5 m の円墳 2 基、南寄りの山林中にある直径 10 m の円墳には盗掘痕がある。

飯岡古墳群 稲田字飯合 162 他

笠間市街から国道 50 号を西に進み、飯岡へ上る旧道に入るとその北側に熊野神社が鎮座する。その裏山一帯の南にのびる標高 60 m ほどの台地に古墳が点在している。分布の範囲は 2 ha 余りの広さで、古墳群は円墳 12 基から形成されており、その規模は直径 10 m、高さ 1.5 m ～ 直径 8 m、高さ 1 m の小形円墳である。古墳からの出土品はないが、南側の畠地から縄文・弥生式土器・須恵器などの破片が出土している。おそらく古墳時代終末期の築造であろう。

香山堂古墳群 箱田字土当原 829

国道 50 号バイパス建設に伴う発掘調査が行われた「石井台遺跡」から、箱田土当原へぬける山道を約 400 m ほど行った右側の山地一帯が香山堂古墳群の所在地である。

途中の左側に高乾院と墓地があり、この付近一帯から縄文・弥生式土器・土師器が出土する。

東西約 270 m、南北約 300 m の山地内に、円墳 5 基からなり、山裾にある 4 基は直径 5 ～ 8 m、高さ 1.2 m ほどの小形円墳であるが、山頂にある円墳は直径 30 m、高さ 3 m の大円墳で、寺崎台古墳群の「大塚」(6 号墳) に並ぐ規模であろう。

墳頂部に盗掘らしい痕跡がみられ墳形が崩れている。周溝が 3 ～ 4 m 程認められる。

四所神社古墳群 箱田字宮後 1708

前方後円墳 1 基と円墳 3 基から形成されている。箱田小学校前方の台地に四所神社が鎮座し、その境内に直径 11 m、高さ 3 m と、直径 12 m、高さ 50 cm の円墳がある。

昭和 28 年に発掘調査が行われ石室が露出している。人物腕・動物首(ハト)の埴輪をはじめ、土師器環形土器・須恵器蓋形土器・皿形土器などが出土した。

神社の左側には前方後円墳がみられる。全長 28 m、後円部の高さ 4 m で、墳頂に小祠がある。規模としては小さいが、笠間市内唯一の前方後円墳である。

寺崎台古墳群 寺崎字高野 135 外

笠間市街の北部を通過する国道 50 号バイパスの北側、国見山(301.7 m)から南にのびる舌状の山地に所在する。市立保育所・寺崎台地遺跡・日立工機の脇を通って石寺にぬける山道に沿っ

て点在する古墳群である。山道の左側にある1号墳から動物愛護指導センター構内の方墳まで1kmほどの範囲である。1号墳は山道の左側山中にあり、大山祇神の小祠が祀られている。墳頂部に盗掘痕があり墳形がやや崩れてる。4号墳は通称一本松の雑木の中にある小円墳である。

6号墳は、動物センターの構内南端にある直径30m、高さ4mの方墳で「大塚」とよばれ、笠間市内では最大の方墳であろう。最近、動物センターの文化財保護に対する格別の厚志によってこの6号墳が復元整備され、説明板も設置して現状保存されている。

石井台遺跡 石井字新地台1444外

昭和46年、国道50号バイパス建設工事に伴い、国士館大学文学部考古学研究室が発掘調査を実施した。10～11世紀頃の堅穴住居址27軒、11世紀後半頃の掘立柱建物跡7軒が検出された。

土師器・須恵器・カワラケ・灰釉陶器をはじめ、刀子・鎌などの鉄製品、鋤鍤車などが出土した。土師器・須恵器の壺形土器の中には墨書き器がみられ、「三和田」4個をはじめ「中火殿」5個、「中」9個のほか「尺方」「麻呂」「真」などがある。

笠間市の考古学的環境は人略以上のように説明できると思うが、このほど筑波大学に依頼して綿密な遺跡分布再調査が行われた。仄聞くところによるとかなりの新発見があったということであるから、古代史および考古学的事象には事欠かない地域であるといえよう。

## 第四章 発掘調査区と調査方法

今回の調査は、太平洋観光開発株式会社茨城支店の事務所兼共同住宅建設工事に伴う発掘調査である。対象となる調査の区域は、笠間市教育委員会と開発側関係者ならびに調査担当者との間で協議した結果に基づき、遺構が完全に破壊消滅してしまう範囲（A 地区）と、そうでない部分（B 地区）について、次のように対処することとした。

### ① A 地区

工事で完全に破壊されることが確定している。したがって、その範囲（2946 m<sup>2</sup>）は、当然のことながら全面発掘をしなければならない区域である。しかし、区域外に遺構が跨って発見された場合は、この部分を拡張することなく、区域内の範囲にとどめることとする。

A 地区については、耕作土（表土）を前面削除した後に、一単位 5 × 5 m の方眼を組んで発掘区を設定した。原点は南西隅に置き、西から東に横軸をとりアラビア数字（算用数字）を表示し、南から北の縦軸にアルファベット記号を用いた。

### ② B 地区

大部分が盛土となって保存されるので、3707 m<sup>2</sup>の範囲のうち、平坦部についてトレンチ法による遺構存否の確認調査を実施することにした。確認面積は約 400 m<sup>2</sup>である。

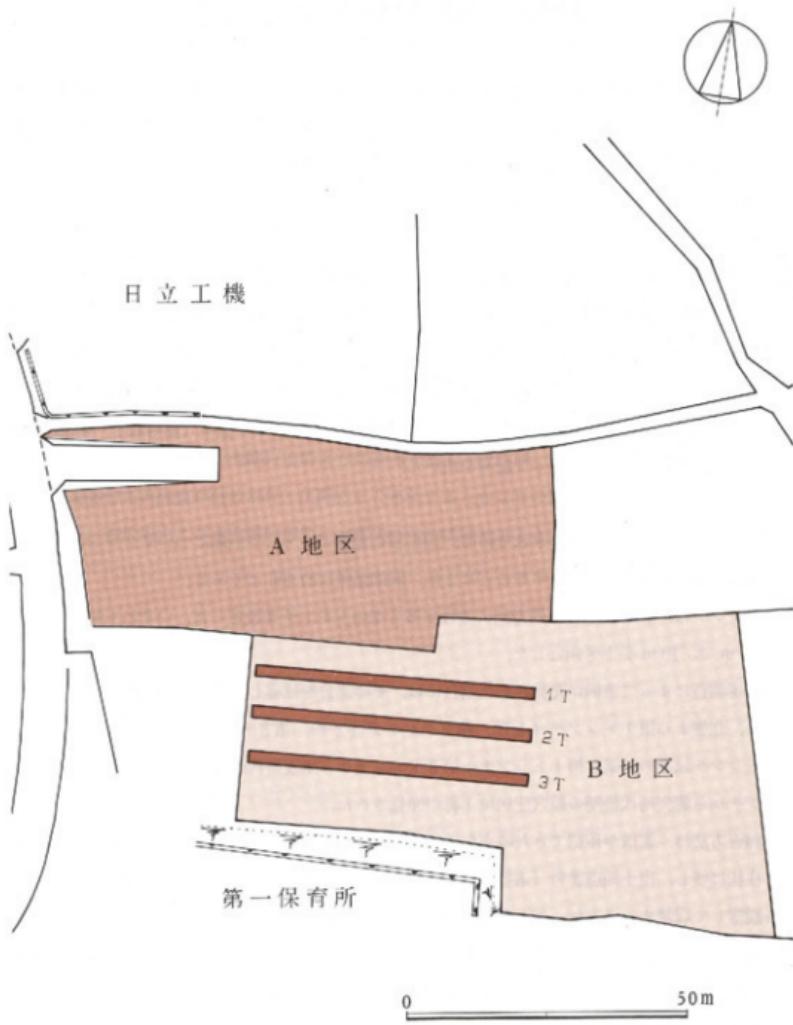
トレンチは、6 m 間隔で東西方向に並行する 3 本のトレンチを設定した。いずれも幅 2 m、長さ 50 m で、10 m を 1 区画とした。

確認調査によって遺構が発見された場合には、その部分を拡幅して遺構の全容を調査することとし、北側より第 1 トレンチ（1T）、第 2 トレンチ（2T）、第 3 トレンチ（3T）とした。

トレンチ試掘の結果、第 1 トレンチと第 3 トレンチから平安時代の竪穴住居址各 1 軒、第 2 トレンチから绳文時代後期の竪穴住居址 1 軒が発見された。

調査方法は、遺構が確認できた時点から記録することにつとめた。すべての遺物を原位置のまま柱状に残し、出土地点番号（遺物番号と同一）・表裏関係・レベルを記録し、合せてその状態を観察して収納することは、個々の遺物を研究上の基礎資料として活用する際に重要な意味もつことになる。したがって、従来から終始一貫堅持してきた基本方針である“原位置”論的調査法を、今回も可能な限り採用実践することにした。

柱穴については、構築・廃絶の行程、埋没土の性状と層序などについて信憑性の高い資料を獲得するために、大洗鉢釜方式による半截発掘を行う予定であったが、口数延伸の関係で実施できなかった。



第二図 発掘調査区域図

## 第五章 遺構の分布状況

本遺構は、第三章で述べたとおり、遺跡台帳（調査カード）には縄文時代の集落跡であると記述されている。発掘調査に先立って行った現地踏査の折に表探した遺物は、すべて土師器と須恵器の破片で、縄文土器は見当たらなかった。

したがって、縄文時代の集落跡らしいという予備知識に反して、土器破片の散布状況からは、縄文時代の遺構は存在しないのではないかと予想された。

しかし、発掘を開始してみると、縄文時代後期の遺構も出現したのである。

発掘区域内の検出遺構は下記のように分けられる。

### A 地区

① 縄文時代後期円形周溝状遺構	1基
② 歴史時代堅穴住居址	7軒
③ 歴史時代土塙	9基
④ 井戸状遺構	1基
⑤ 粘土貯蔵坑	1基
⑥ 溝状遺構（時期不明）	1条
⑦ 掘立柱建物跡と思われるピット群	

### B 地区

① 縄文時代後期堅穴住居址	1軒
② 歴史時代堅穴住居址	2軒
③ 溝状遺構（時期不明）	4条

縄文時代の遺構は、円形周溝遺構、堅穴住居址ともに後期の掘之内式期に属するように思われる。縄文時代の遺構はこの2例だけで、これ以外はすべて歴史時代の遺構であり、複合遺跡であることが判明した。弥生式土器は認められなかった。

今回の発掘調査区は、遺跡全体からみればその一端にすぎないと思われる所以、A・B両地区の遺構分布状況から全体を推することは困難であるが、遺跡全体の遺構分布状況の片鱗は第三図から窺うことができる。

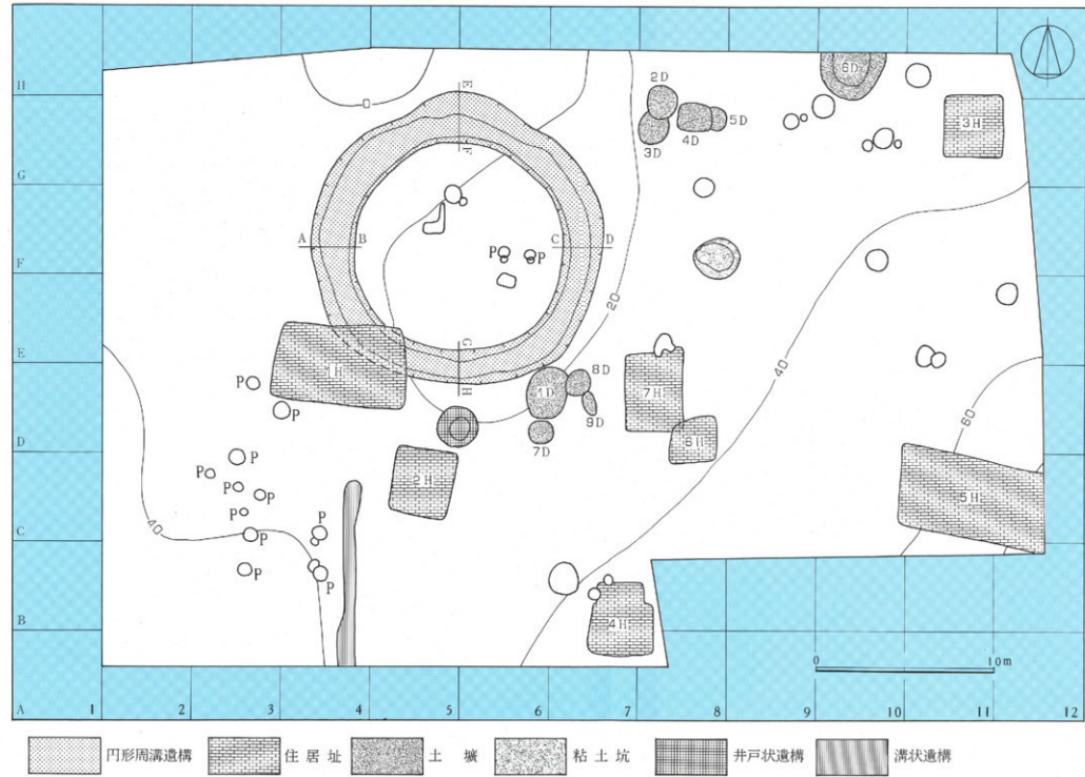
未発掘の部分には、こうした種類の遺構が多数埋没し、大きな集落を構成しているように思われる。

昭和46年、国道50号バイパスの建設に伴って発掘調査が行われた石井台遺跡（平安時代住居址29軒、掘立式建物跡7棟）の出土遺物に類似した遺物も多く、両者の関連性を究明するうえでも有効な資料となり得るであろう。

残念なのは、掘立柱建物跡と思われるピット群の調査が、時間の関係でできなかったことである。昭和46年に発掘調査が行われた前述の石井台遺跡からも7棟の掘立式建物跡が検出されているので、その関連性を探るうえで何らかの資料になり得たかもしれない。

本遺跡の場合、ピット群付近の表土からも確認面からも遺物が出土しないので、構築年代は不明であり、高床式なのか有床平地式なのかも不明であるが、おそらく住居址群と同時期かあるいは若干新らしくなるように思われる。

笠間地方の古代史を究明する手がかりとして、興味のある問題を内包していただけに、残念であった。



第三図 A 地区遺構分布図

## A 地区の遺構と遺物

## 第六章 円形周溝状遺構の調査

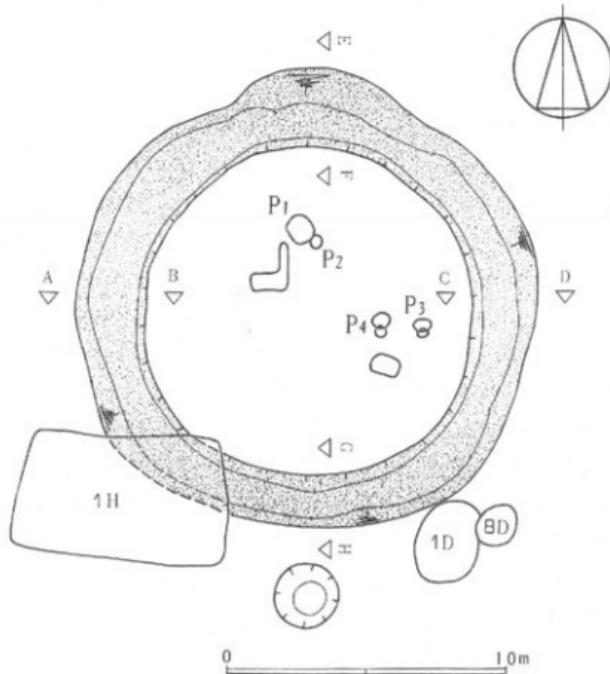
### 1 円形周溝状遺構（第四・五・六図、図版第三・四・五・二二）

本遺構は、A 地区中央部の西寄りの北側境界に近い位置から検出された。南西側に第一号住居址が周溝の一部を破壊して構築されている。確認した平面形状は、東一西 16.4 m, 南一北 16.3 m を計測し、北側の外周がわずかに張り出すものの、ほぼ正円形に近い形状を呈する。

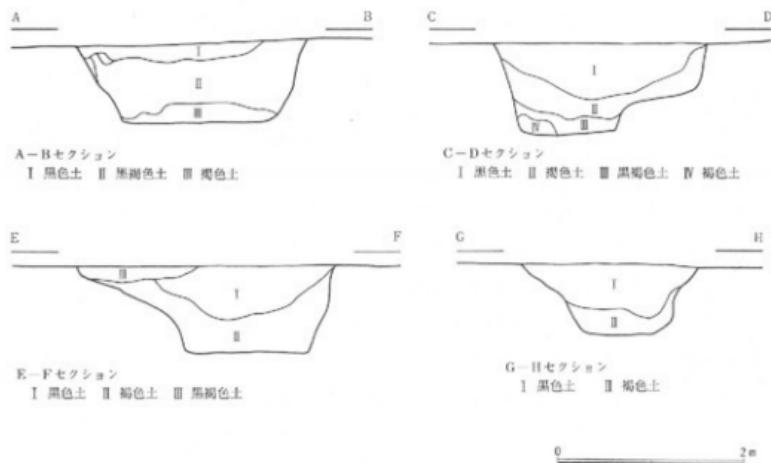
周溝の掘り込みは箱形に近い「U」形で、溝は完全に一周している。

周溝の上部幅を各セクションで観察すると、A-B (西) 2.5 m, C-D (東) 2.3 m, E-F (北) 2.8 m, G-H (南) 1.9 m, 底面の幅は A-B 1.5 m, C-D 1.0 m, E-F 1.3 m, G-H 70 cm, 深さは A-B 85 cm, C-D 1.0 m, E-F 93 cm, G-H 78 cm を測る。

底面はおおむね平坦で、円形体部側の立ちあがりが外周部側より急である。



第四図 円形周溝状遺構実測図



第五図 円形周溝状遺構周溝部断面図

周溝内の埋没土は各セクションともほぼ共通しており、下層から黒褐色土、褐色土、黒色土の順に堆積している。

黒色土の層はかたくしまっており、殆んど異物の混入は認められない。褐色土の層はロームがベースで、黒色土と鹿沼ブロックを混入する。黒褐色土の層にも鹿沼ブロックが混在する。

周溝内に遺構は発見されなかったが、円形体部には6個のピットが存在する。 $P_3$ と $P_4$ は円形体部の東端部に1.5mの間隔で東西方向に並列して掘られており、開口部直径は60cm、北側へ45°の傾斜角で深さは90~105cmを測る。 $P_3$ 、 $P_4$ 以外のピットの深さは12~21cmの浅いものである。

主体部は確認できなかった。祭祀的な遺構のように思われる。

#### 出土遺物の概要（第六図）

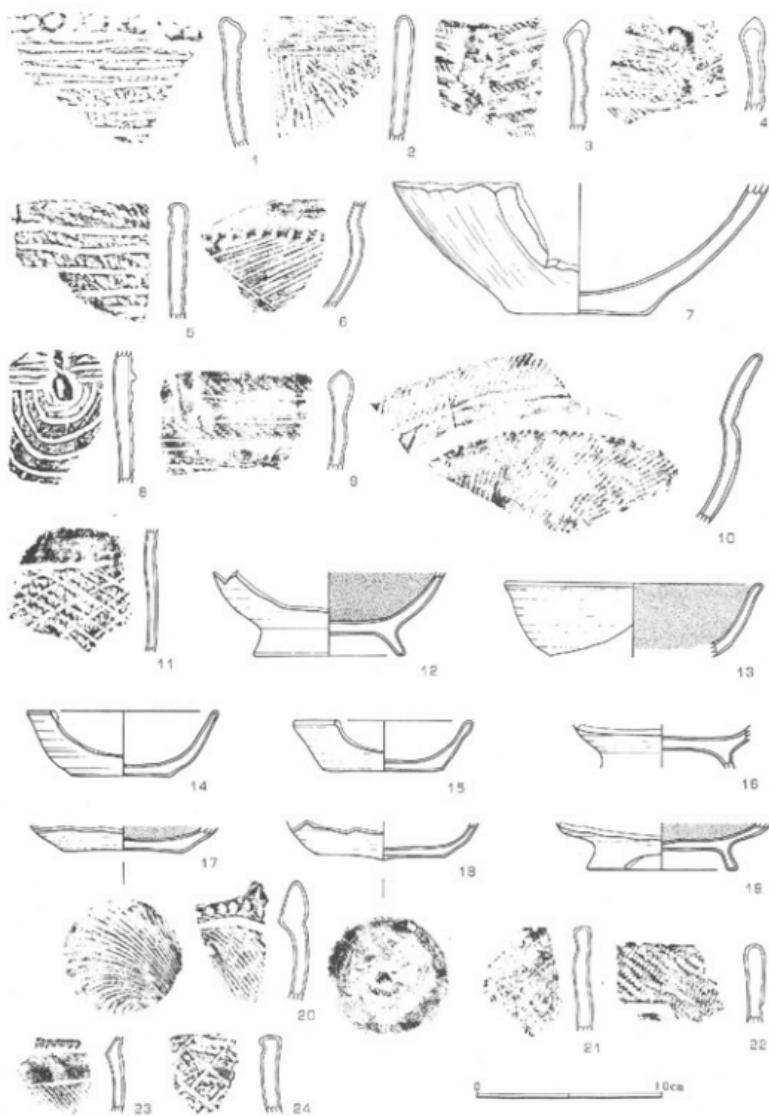
主体となる遺物は縄文土器である。出土土器の器種は大部分が深鉢形土器である。

斜行縄文を押捺したもの、縄文地の上に直線・曲線・渦巻文などを描いたもの、紐線文を貼付したものなどは後期縄之内式のI式に比定されると思われる。

無文の口縁部に隆起帯を付したものの、紐線文と磨消縄文帶に特徴づけられるもの、幾何学的な磨消縄文の仲間はII式に比定されるであろう。

土師器では壺形土器、高台付壺形土器がみられる。

壺形土器と高台付壺形土器には、体部をやや内湾させながら立ち上がり、口縁部を僅かに外反させる器形がみられる。内面を笠磨きした後に黒色処理を施した例もある。



第六圖 円形周溝状造構山土土器実測図・拓影図

## 第七章 歴史時代住居址の調査

### 1 第一号住居址（第七・八図、図版第七・一六）

遺存状態 円形周溝状遺構の南西部周溝の一部を破壊して構築されているが、竪穴自体は破壊も搅乱も受けておらず、保存の良い住居址である。

規模 東壁（X-Z）4.5 m、西壁（W-Y）4.4 m、南壁（Y-Z）7.3 m、北壁のW-X間は7.2 mの辺長を測り、東西方向に長い隅丸長方形を呈し、面積は約32 m<sup>2</sup>である。

周壁は斜めに掘り込まれているが、特にWコーナー付近の掘り込みは傾斜がゆるやかである。北壁中央部から東側と、東壁の中央部は、円形周溝状遺構の周溝部埋没土を壁面に利用している。壁高は東壁35 cm、西壁37 cm、南壁35 cm、北壁50 cmである。壁面は、周溝部を除いて崩落は認められず比較的堅固である。竪穴壁面下の周溝は存在しない。

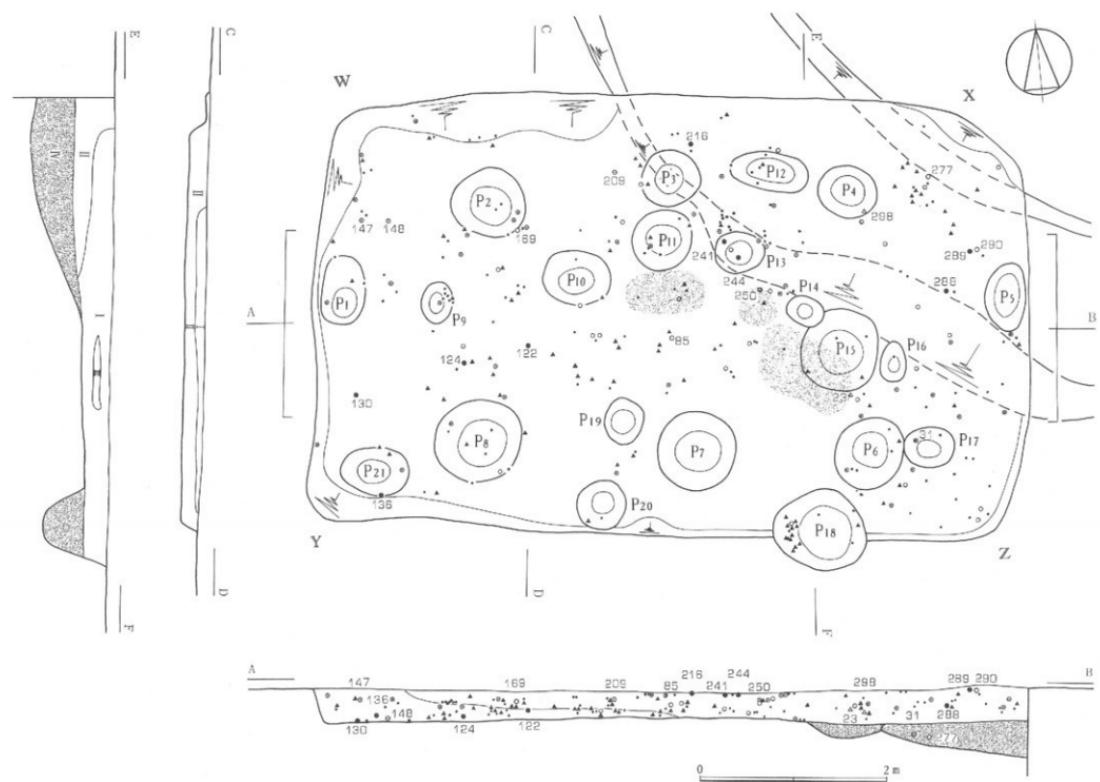
床面 細かい凹凸は認められるがおおむね平坦である。特にかたく踏み固めたと思われるような痕跡は認められず、床面硬度は全面2に相当する。円形周溝部の上の床面にも貼床は認められない。

中央部付近の床面上には85×45 cm、42×40 cmの範囲で、2か所に焼土層が存在する。前者の層の厚さは10～12 cm、後者は6～8 cmである。

ピット 確認できたピットは21個である。このうち主柱穴と考えられるのはP<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>8</sub>、P<sub>9</sub>の6個と、P<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>の2個の合計8個であろう。P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は位置関係、規模などから総合判断して、本址の主柱穴と見做してよいだろう。これらは下表のようにまとめることができる。

表 1 ピット一覧表（計測単位 cm）

番号	長径	短径	深さ	底径	開口部形状	番号	長径	短径	深さ	底径	開口部形状
P <sub>1</sub>	70	46	68	30	楕円形	P <sub>12</sub>	85	40	30	25	長楕円形
P <sub>2</sub>	80	75	72	45	ほぼ円形	P <sub>13</sub>	50	45	60	25	不整円形
P <sub>3</sub>	62	60	60	30	円形	P <sub>14</sub>	37	29	64	16	楕円形
P <sub>4</sub>	65	55	30	35	ほぼ円形	P <sub>15</sub>	90	80	35	43	円形
P <sub>5</sub>	70	45	33	45	楕円形	P <sub>16</sub>	42	25	58	11	楕円形
P <sub>6</sub>	80	70	72	37	"	P <sub>17</sub>	52	41	37	18	"
P <sub>7</sub>	83	83	68	43	円形	P <sub>18</sub>	98	85	43	55	"
P <sub>8</sub>	90	86	69	48	"	P <sub>19</sub>	50	41	40	23	"
P <sub>9</sub>	43	33	30	15	楕円形	P <sub>20</sub>	53	53	29	23	円形
P <sub>10</sub>	70	55	47	25	"	P <sub>21</sub>	68	52	3	24	楕円形
P <sub>11</sub>	68	63	44	30	円形						



第七圖 第一號住居址實測圖・遺物出土狀態圖

**埋没土** 壓穴内の埋没土は2層に区分することができる。この識別は極めて明瞭である。この層序区分を第七図の土層断面図によって観察すると、各セクションとも共通しており、Iは黒色土でかたくしまっており、IIは暗褐色土でローム粒子を混入している。

E-FセクションのIIIは焼土層で、埋没土の中間層に介在し、層の厚さは6~8cmである。

A-BセクションのIIIおよびE-FセクションのIVは褐色土で、両者は円形周溝状遺構の周溝部埋没土である。

**遺物の出土状態** 出土遺物の総数は301個である。内訳は縄文土器43個、土師器140個、須恵器33個、石器2個、自然石83個である。完形品ではなく、土師器にはほぼ完形品が3個認められるだけで、これ以外はすべて破片である。

土器破片216個の表裏関係は、表106個(49%)、裏100個(46%)、立ち10個(5%)という比率になる。

ドットで記録した平面分布を観察すると、全体に平均して散在しており、特に変った傾向は指摘できない。この状態をA-Bセクションを中心に両側1mの範囲を断面図に投影すると、垂直分布のあり方は、レベル的には床直の遺物が少なく、壓穴の中層から上層に多くなる。

接合資料は抽出できなかった。

**遺物の概要** 本址の主体となる土器は土師器と須恵器で、縄文土器は埋め戻しの際に紛れこんだものであろう。

土師器には環形土器、高台付環形土器、カワラケ形土器、須恵器には甕形土器、環形土器などの器種が認められる。量的には土師器環形土器の破片が多い。

土師器 130、136、288は高台付環形土器で、一部破損のほぼ完形品である。

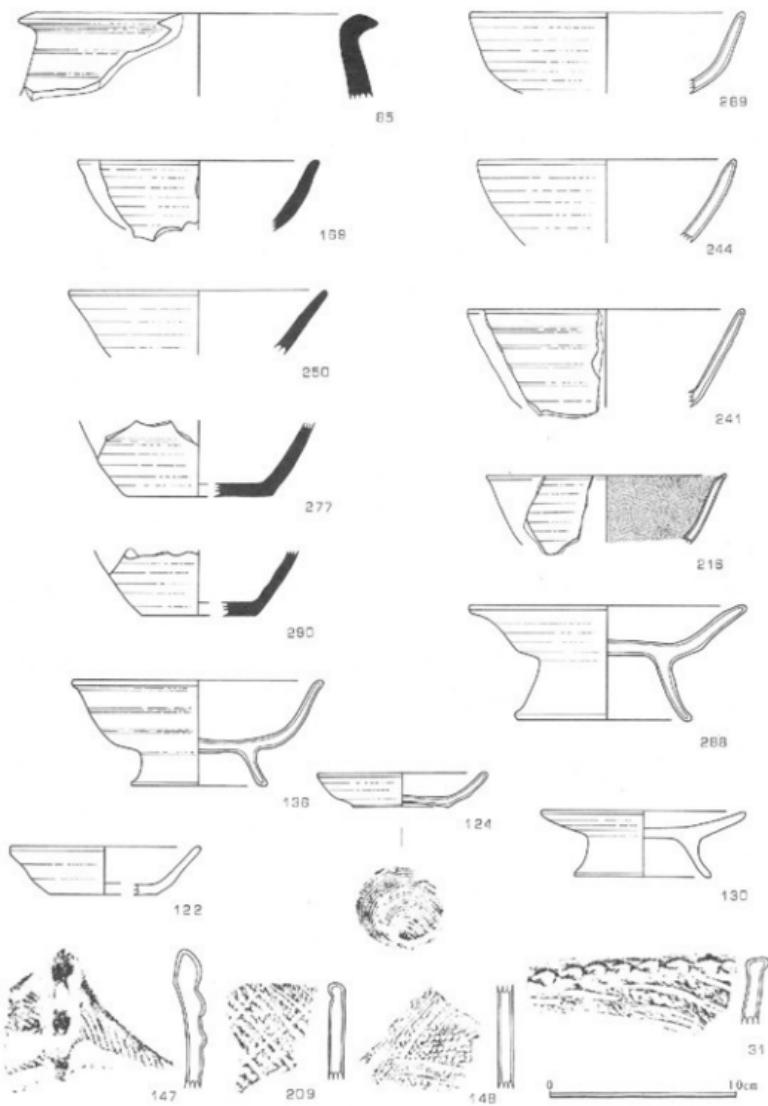
環形土器は、口縁部が内湾するものと外反するもの、黒色処理を施すものがあり、すべてロクロ成形である。高台付環形土器も同様の手法が認められる。124のカワラケ形土器の底部は回転糸切りの手法を用いている。

須恵器 85の甕形土器は、口縁部をくの字に外反させ、おそらく長胴の器形であろう。

169、250、277、290は環形土器であろうと思われる。

**石器** 第四六図23は凹石の破損品で、a面に2個のくぼみが存在する。298は打製石斧である。

**時期** 本土器群は、9世紀第4四半期から10世紀の第1四半期のころであろう。



第八図 第一号住居址出土土器実測図・拓影図

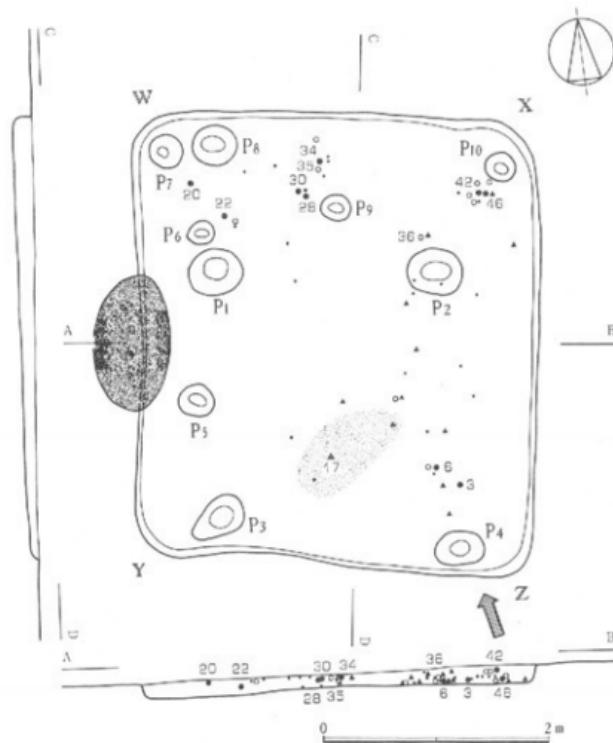
## 2 第二号住居址（第九・一〇・一一図、図版第四六）

遺存状態 C列第5グリットより検出され、南側へゆるく傾斜する緩斜面に構築されており、本址の北東側に隣接して井戸状遺構が存在する。西壁（W-Y）の中央部に  $120 \times 70$  cm、深さが 30 cm の攪乱がある。

規模 東壁（X-Z）4.0 m、西壁（W-Y）3.9 m、南壁（Y-Z）3.5 m、北壁の W-X 間は 3.5 m を測り、隅丸方形を呈した面積約  $14 \text{ m}^2$  の竪穴住居址である。

残存周壁は若干斜めに掘り込まれているが、緩斜面に位置するためか壁高は全体に浅く、東壁 15 cm、西壁 13 cm、南壁 7 cm、北壁 16 cm である。壁面の崩落は認められない。

床面 おおむね平坦であるが、特に固く踏みかためた状態は窺えず、床面硬度は 2 度である。



第九図 第二号住居址実測図・遺物出土状態図

**ピット** 床面から 10 個のピットを検出したが、 $P_1 \sim P_4$  が配置に多少の問題はあるものの、規模の共通性から考えて主柱穴としての役割を果たしたものと考えられる。 $P_1 \sim P_4$  の直径は 40 ~ 50 cm、深さは  $P_1 = 62$  cm、 $P_2 = 68$  cm、 $P_3 = 65$  cm、 $P_4 = 59$  cm である。 $P_5$  と  $P_{10}$  は、前者の深さ 20 cm、後者の深さ 24 cm であるが、これは補助的な柱穴と考えられないこともない。

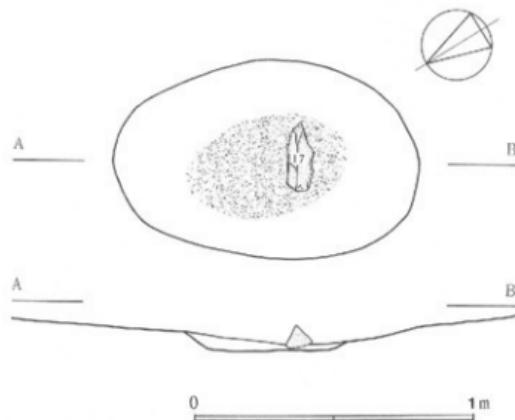
**炉 址** 住居址の中央部南寄りに位置する、南北 110 cm、東西 70 cm、最深部は 12 cm である。

焼土層はレンガ状にかたく堆積しており、南北 55 cm、東西 37 cm の範囲におよぶ。層の厚さは 6 cm で炭化物も混在している。焼土層の下のロームも火熱を受けて非常にかたくなっている。使用頻度の高かったが、あることを窺わせる。火床部の南端には炉石（長径 24 cm、短径 8 cm）が置かれていた。本址は長時間にわたって使用した地床炉であろう。

**埋没土** 土層は全体に微量のローム粒子やブロックを混入した軟らかい土砂である。壁外の土砂が流入したような層相は観察できない。

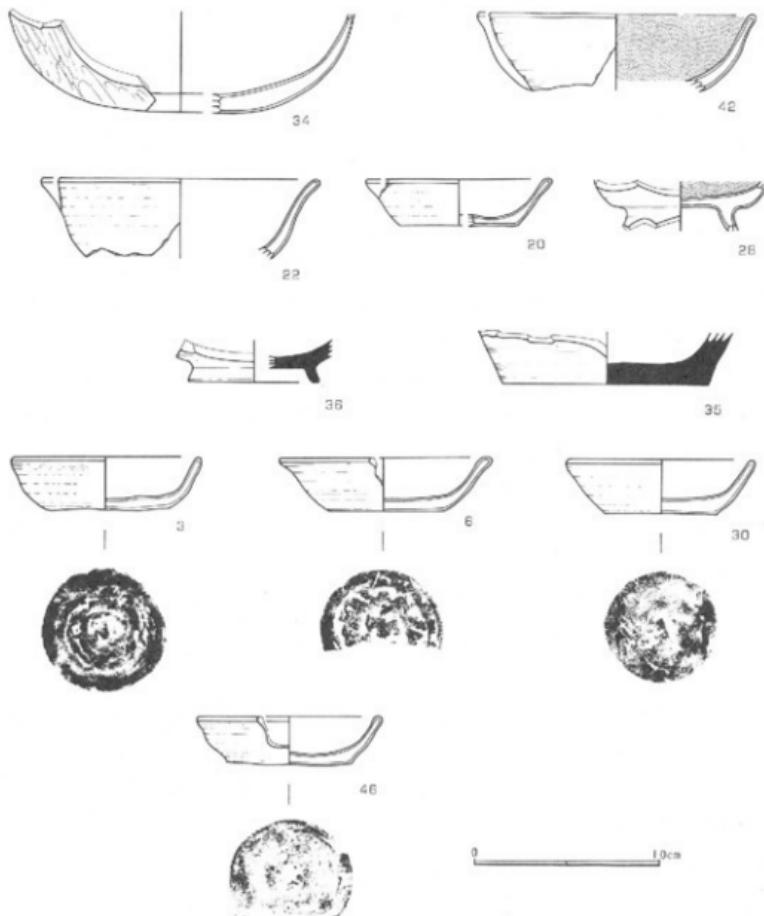
**遺物の出土状態** 本址の遺物総数は 53 個である。内訳は土師器 32 個、須恵器 10 個、炉石 1 個、自然石 10 個である。ドットで記録した遺物の分布には一つの傾向を指摘することができる。それは Z コーナーから W・X コーナーに向かって扇形状に展開していることである。このことは、南東隅の Z コーナーを遺物投棄の場所として、一括廃棄の方向性と同時性を如実に物語るものである。

**遺物の概要** 土師器が主体で器種別にみると、壺形土器、高台付壺形土器、皿型土器などが



第一〇図 第二号住居址炉址実測図

みられる。环形土器は、体部をやや内湾させながら立ち上がり、口縁部をわずかに外反させる。  
ロクロ使用により製作し、内面に黒色処理を施す例もある。  
須恵器の器種には壺形土器、高台付环形土器が認められる。  
時 期 遺物は9世紀後半代のものと考えられるが、炉址が存在することで時期を特定す



第一一図 第二号住居址出土土器実測図

することは困難である。竪穴の形状と規模、その床面から出た炉址の型式などから思考すると、本址が構築されたのは、古墳時代前記の五領式期ころまで遡るかも知れない。

### 3 第三号住居址（第一二・一三・四五図、図版第八・一七）

遺存状態 本址はA地区調査区の北東隅に検出された。Zコーナーから竪穴中央部にかけて床面下に溝状の擾乱があり、保存状態は良くない。

規模 東壁(X-Z) 3.5m、西壁(W-Y) 3.5m、南壁(Y-Z) 3.4m、北壁のW-X間は3.5mを測り、隅丸方形の竪穴住居址で、面積は約12m<sup>2</sup>である。

周壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁面の剥落はみられず堅固である。

壁高は、東壁28cm、西壁40cm、南壁30cm、北壁33cmを計測する。周溝は存在しない。

床面 全体に細かい凹凸がある。カマド前面の空間は堅固な床面で硬度3に近い。これ以外の床面は硬度2に相当する。Zコーナーから竪穴の中央部にかけて、床面下35cmに達する溝状の擾乱があり、その底面は鹿沼層に及んでいる。

ピット Wコーナーで径30×30cm、深さ38cm、Xコーナーに径31×27cm、深さ37cm、南西のYコーナーに径35×33cm、深さ40cmの柱穴と思われるピットを検出したが、Zコーナーからは確認できなかった。深さ35cmの擾乱によって破壊されたものと考えられる。

カマド 北壁の西寄りに位置する。燃焼部と煙道部を壁外に、両袖部と焚口が壁内となる構築法である。ロームの上面と外側に青灰色砂質粘土を練り固めた両袖部はよく残り、赤褐色土(天井部内壁面)・天井部の粘土が両袖部側から燃焼部内に落ち込んでいる。

奥壁～焚口間約90cm、燃焼部幅約40cm、燃焼部を浅く掘りくぼめ、そこから20°の傾斜をもって煙道部がのびている。

埋没土 A-B・C-Dセクションとも2層に区分される。その性状は両者とも共通しており、Iは黒色土でごく微量のローム粒子・焼土粒子を混入する。IIは褐色土で壁側に堆積しており、ローム粒子とローム小ブロックが多量に混在する。土砂の性状と区分線のあり方は、人為的に埋め戻したものと考えられる。

遺物の出土状態 平面分布は、中央部より東壁側に多く、西壁方向に移行するにしたがい少なくなる。この状態をA-Bセクションに投影すると、垂直分布図に示すようなあり方となる。

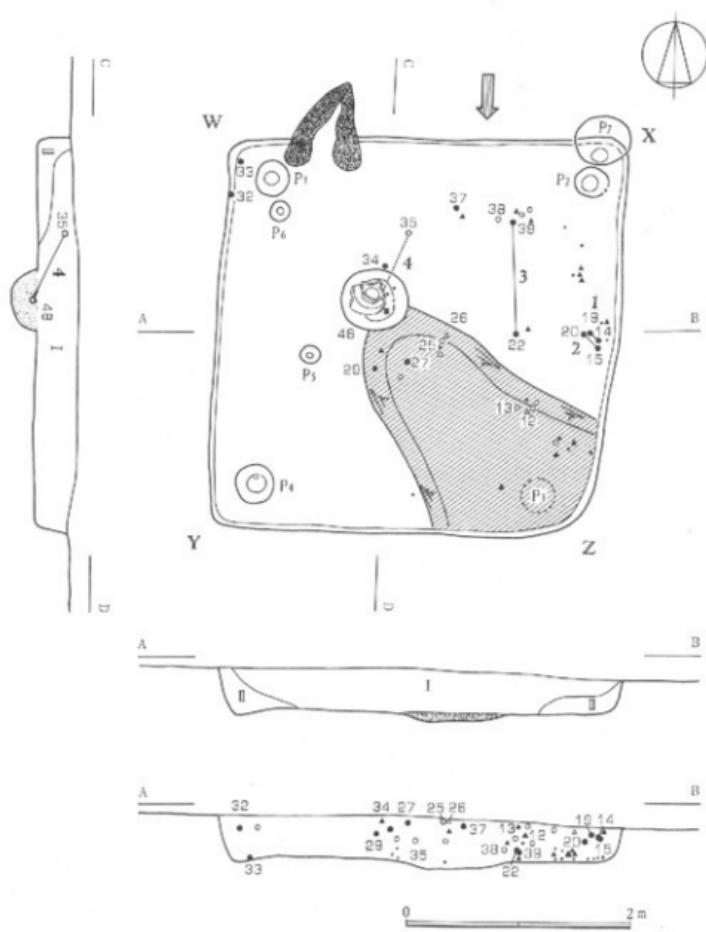
一方、抽出できた接合資料4例は、すべて北壁から南壁方向の接合線となって連結する。

このような接合線の指向性は、土器破片の投棄実験例と符合し、本址の遺物の大部分が、北壁側から棄てられたことを意味するものである、といつても過言ではないだろう。

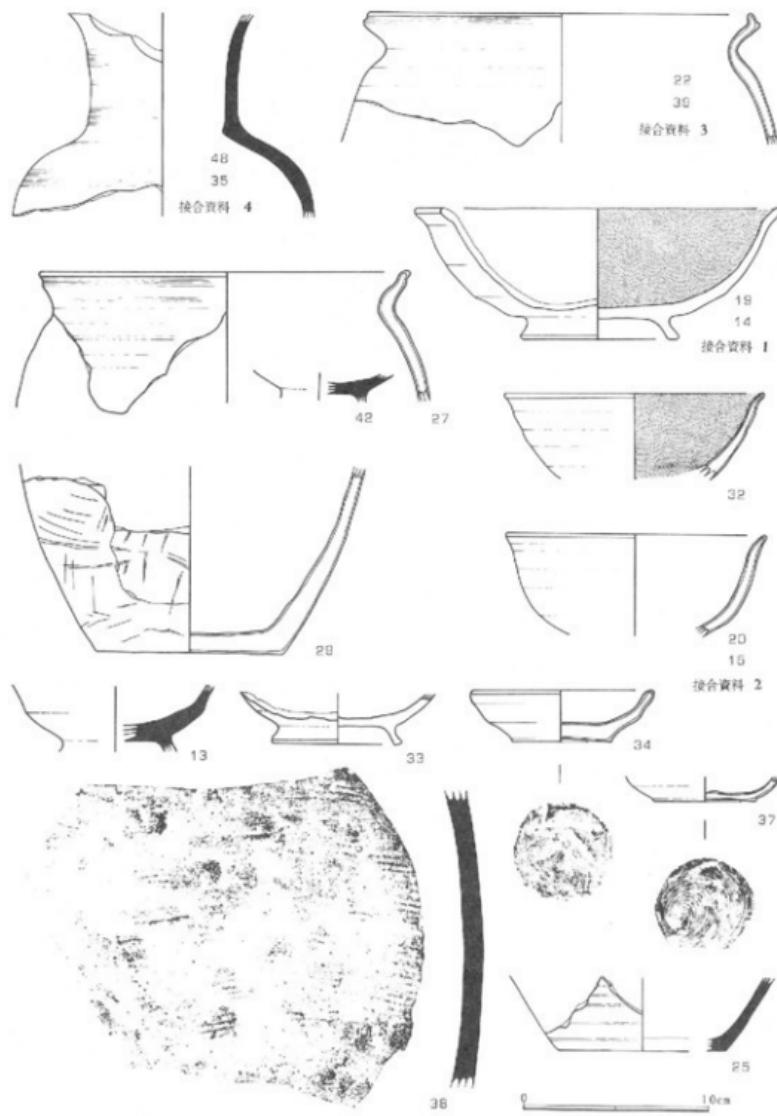
接合資料は、土師器に3例、須恵器に1例の合計4例が抽出できた。

接合資料 1 〈高台付環形土器〉 19▽24・14▽22

接合資料 2 〈環形土器〉 20△18・15▽20



第一二圖 第三号住居址実測図・遺物出土状態図・接合関係図



第一三図 第三号住居址出土土器実測図・拓影図

接合資料 3 〈壺形土器〉 22▽10・39△8

接合資料 4 〈長頸壺形土器〉 48△-5・35▽22

遺物の概要 総数は 55 個である。内訳は土師器 26 個、須恵器 14 個、石器 2 個、自然石 12 個、鉄滓 1 個に分かれる。土師器と須恵器が本址に直接関係し、他は混入遺物である。

土師器の器種は、長胴の壺形が多くみられる。壺形土器、高台付壺形土器、皿形土器に分類される。27 と接合資料 3 の壺形土器は長胴で、最大径はおそらく胴部上半部にあるものと思われる。

口縁部を観察するとどちらもくの字に外反しているが、口唇部の形態には微妙な相違がある。

壺形・高台付壺形土器は須恵器と同様のロクロ成形で、内面に黒色処理を施している仲間もある。皿形土器の底部は回転糸切りの切り離し手法を用いている。

接合資料 4 は須恵器の長頸壺形土器の頸部と肩部で、暗緑色の自然釉がみられる。

38 は壺形土器の胴部で平行叩き口文が残る。

第四五図 12・26 は自然石を利用した小形の石斧である。

時 期 土師器と須恵器の内容は、9世紀の第2四半期から第4四半期の年代であろう。

#### 4 第四号住居址（第一四・一五・四五図、図版第九・一七）

遺存状態 本址は B 列第 7 グリット、調査区中央両端部より検出された。

平面プラン確認の時点では、確認面の埋没土色相に全く差異がみられず、X・X' コーナーの欠落状態に疑問を抱きつつ調査を進めたが、完掘の時点で二軒の竪穴が重複していることを確認した。北側の小形竪穴を A とし、A を破壊して構築している南側の竪穴を B とした。したがって、新旧関係は A が古く B が新しい。B の西壁中央部に 95×95 cm の範囲で焼上層が存在し、さらに A・B の北壁と A の W コーナーに 3 個の搅乱があり、保存状態は良いとはいえない。

規 模 A は推定面積 5.5 m<sup>2</sup> ほどの小形竪穴、B は東壁 (X-Z) 2.8 m、西壁 (W-Y) 3.0 m、南壁 (Y-Z) 2.6 m、北壁 (W-X') 3.3 m の辺長を測り、面積約 8.5 m<sup>2</sup> ほどの隅丸方形の小形竪穴である。

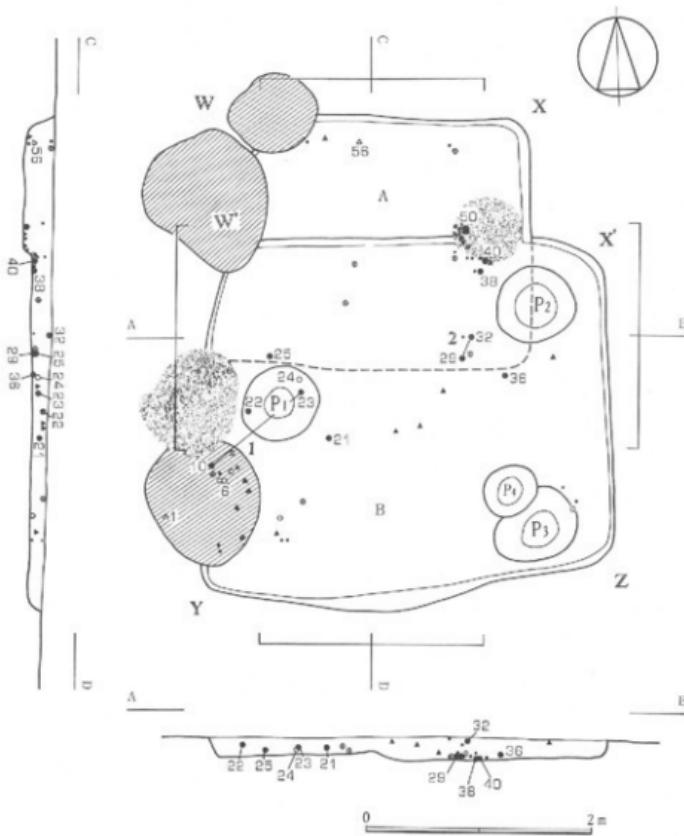
周壁はわずかに斜めに掘り込まれており、壁面は比較的堅固である。壁高は A が B よりやや高く平均 25 cm である。B は東壁 15 cm、西壁 17 cm、南壁 12 cm、北壁推定 15 cm で、残存周壁は浅い。

床 面 かなりの凹凸が認められるが、A の床面硬度は 2、B はかたく踏み固められていて硬度 3 に相当する。A の東壁中央の床面上に 60×55 cm、厚さ 8~10 cm の焼土層が存在する。

ビ ッ ト 床面精査の結果、A には確認できなかったが、B の床面から 4 個のビットを発見することができた。このうち P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub> の 3 個が主柱穴と考えられる。

P<sub>1</sub> は径 67×65 cm、深さ 37 cm、P<sub>2</sub> は径 70×68 cm、深さ 37 cm、P<sub>3</sub> は径 73×60 cm、深さ 39 cm と規模においてほぼ共通している。

さて、これらの柱穴の配置状態を実測図（第一四図）で観察すると、東壁下の X' コーナーに

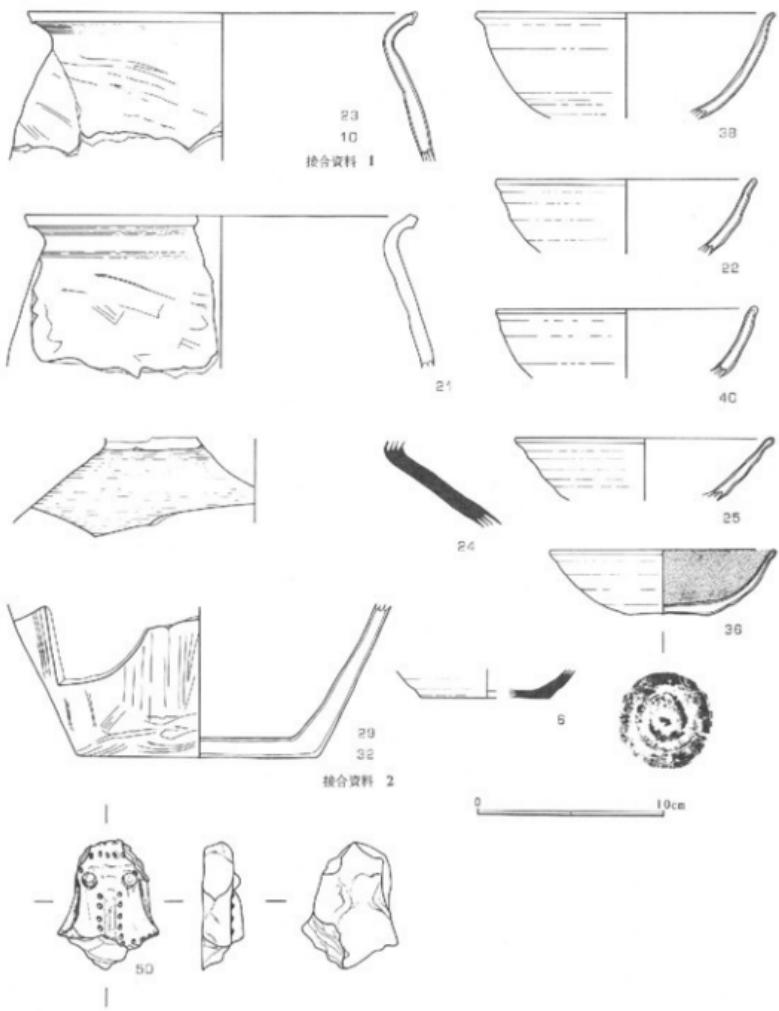


第一四図 第四号住居址実測図・遺物出土状態図・接合関係図

P<sub>b</sub>, Z コーナーに P<sub>3</sub>, 西壁中央下に P<sub>1</sub> が配されている。ピットの間隔はそれぞれ 1.3 ~ 1.6 m を測り、P<sub>2</sub> と P<sub>3</sub> を結ぶ線を底辺とし、P<sub>1</sub> を頂点とするほぼ正三角形を形成している。

各ピットの規模、位置関係などから判断すれば、大洗町吹上遺跡（昭和 44 年第二次発掘）の第一号住居址（古墳時代中期）や、水戸市薬王院東遺跡（平成元年発掘）の第三七号住居址（9世紀後半）に類似の 3 本柱竪穴住居と見做すことができよう。

**埋没土** 遺構プラン確認時の確認面の色相に全く変化が認められなかったのを裏付けるよ



第一五図 第四号住居址出土土器、土製品実測図

うに、A-B・C-D 各セクションでも層相の変化は識別できなかった。

埋没土は、僅かにローム粒子が混入した黒褐色土である。

遺物の出土状態 ドットで記録した遺物の分布は、空白部分が目立つが二つの傾向を指摘できる。A 北壁の X コーナーから対角線上（南西方向）の B-Y コーナーに帯状の流れを示してまとまる破片群と、まばらに散在する破片とに分けられる。前者の遺物は 2 例の接合線の方向からみても、A-X コーナー付近に投棄の場所が求められよう。後者は定かではないがほぼ同時に廃棄されたものであろう。

縄文土器破片が混入しているが、これは埋め戻しの土砂に含まれていた疑いが強い。

接合資料は土師器に 2 例が抽出できた。

接合資料 1 < 豊形土器 > 23 ▽ 32 • 10 △ 8

接合資料 2 < " > 29 △ 2 • 32 ▽ 16

遺物の概要 出土遺物の総数は 58 個で、内訳は縄文土器 9 個、土師器 29 個、須恵器 6 個、自然石 11 個、石器 2 個、土製品 1 個に分類される。

本址の主体となる遺物は土師器と須恵器で、他は混入遺物であろう。

土師器 土師器の器種では豊形土器、壺形土器などが認められる。21 と接合資料 1 の豊形土器は、口縁部をくの字に外反させ、おそらく最大径を胴部上部にもつ長胴の器形であろう。

接合資料 2 は豊形土器の底部である。壺形土器は、ロクロ成形後、体部が内湾あるいは外傾して開くもののほか、完形品の 36 のように内面を鏡面仕上げた後に黒色処理を施し、底部の切り離しは、回転箇切りを行っているものもある。

須恵器 器種としては豊形土器と壺形土器がみられる。24 は豊形土器の肩部、6 は壺形土器の底部である。

石 器 第四五図 4 H-1・56 は扁平な自然石を利用した打製石斧である。1 は撲乱層からの出土である。

土製品 P<sub>2</sub> の北側の焼土層下の床面上より出土した女性土偶の破損品である。（第一五図 50）頭部、顔面、腕部、脚部などを欠失しているので全体の形状は不明であるが、乳房を表わす突起をもち女性であることに間違いはないだろう。

土偶下部がぶ厚く末広がりになっていることや、体部に連続刺突文の技法で文様がつけられている特徴は、縄文時代中期の阿玉台式土器盛行の文化圏から出土する板状土偶に類似する。

現存最大長 7 cm、最大幅 5.4 cm、側面幅 1.6 ~ 2.2 cm である。

時 期 廃絶期はおそらく 9 世紀の第 3 ~ 4 四半期の年代を想定してよいだろう。

## 5 第五号住居址（第一六・一七図、図版第九・一八）

遺存状態 本址は調査区の南東隅より検出され、東壁側は区域外に埋没している。

検出部分については搅乱も破壊も受けおらず、保存状態は良好である。

規模 東壁は区域外に埋没しているが、境界線の許容される限界まで発掘を行った。さらにボーリングステッキを境界壁面に横から挿入した結果、10～20 cmで竪穴の壁面が存在することを確認した。したがって、平面形状はおおむね次のように想定できる。

東壁（X-Z）推定4.5 m、西壁（W-Y）4.6 m、南壁（Y-Z）推定8.5 m、（W-X）の北壁は推定8.5 mで、推定面積約38 m<sup>2</sup>の東西に長い隅丸反方形の竪穴住居址である。

周壁は若干傾斜して掘り込まれているが、西壁はゆるやかな斜度で立ち上がっている。

壁高は、東壁は不明、西壁30～40 cm、南壁20～45 cm、北壁40 cmで東側が浅く西側が深い傾向がみられる。壁面は堅固で崩落は認められない。

床面 細かい凹凸は認められるがおおむね平坦である。各コーナー付近は軟らかく、踏み固めた痕跡が全くない部分と、わずかに踏み固めたと思われる床面で、硬度は1～2に相当する。各コーナー付近を除く内区床面は固く踏みかためられているが、亀裂は生じていないので硬度3に比定できる。

ビット 床面調査の結果11個のビットを確認した。位置的に多少のずれはあるもののほぼ対角線上に位置するP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が主柱穴と考えられる。これらのビットは直径がすべて80 cm前後、深さは62～70 cmを計測する。竪穴の規模からみて、4個の主柱穴以外にも補助的な役割を果したビットがあるかもしれない。

埋没土 竪穴の中心部はローム小ブロックが点在する黒色土が大部分を占め、その黒色土の外周に黒褐色土と褐色土が堆積する。これらの埋没土は竪穴周囲からの自然流入によるものではなく、人為的に埋め戻した土砂であることは言を俟たない。

遺物の出土状態 出土遺物は、繩文土器2個、土師器32個、須恵器15個、自然石9個、石器1個、鉄滓1個の総数60個である。土器破片49個の表裏関係は表23個（47%）、裏23個（47%）、立ち3個（6%）という比率である。その平面分布は非常にまばらで、特に竪穴中央部からZコーナーにかけては持無の状態である。A-Bセクションに投影した垂直分布を観察すると、床直は殆んどみられず、中間層から上層にかけて散在する。

本址の主体となる遺物は土師器と須恵器であるが、38 m<sup>2</sup>の面積に比して出土遺物が非常に少なくすべて破片であること、垂直分布のあり方などを総合判断して考察すると、本址廃絶の際に徹底した土器の搬出、つまり完全引越しが行われたのではないだろうか。

49個の土器破片は本址の「保有量」ではなくあくまでも「出土量」である。とすれば、出土遺物の大部分は、住居廃絶時の埋め戻しの土砂に混入して投棄されたものと思われる。

**遺物の概要** 本址出土の遺物はすべて破片であるが、土師器の器種には壺形土器、高台付壺形土器が認められ、須恵器には壺形土器、甕形土器などがみられる。

**土師器** 壺形土器、高台付壺形土器をみると、すべてロクロ成形で、体部を内湾させながら立ち上がる、口縁部をわずかに外反させている。

6 は内面を鏡磨きした後に黒色処理を施したものである。22 も同様の仲間である。

23 はおそらく高台付壺形土器になるだろう。

12 の壺形土器の底部切り離しは、回転鏡切り手法を用いている。

**須恵器** 14・18・37 は大形の短頸壺形土器あるいは甕形土器の口縁部である。

2 は甕形土器の胴部で平行叩き目文がみられ、58 は甕形土器の肩部で波状沈線文が認められる。

**石 器** (第四五図 A-5 H-26、図版第四〇)

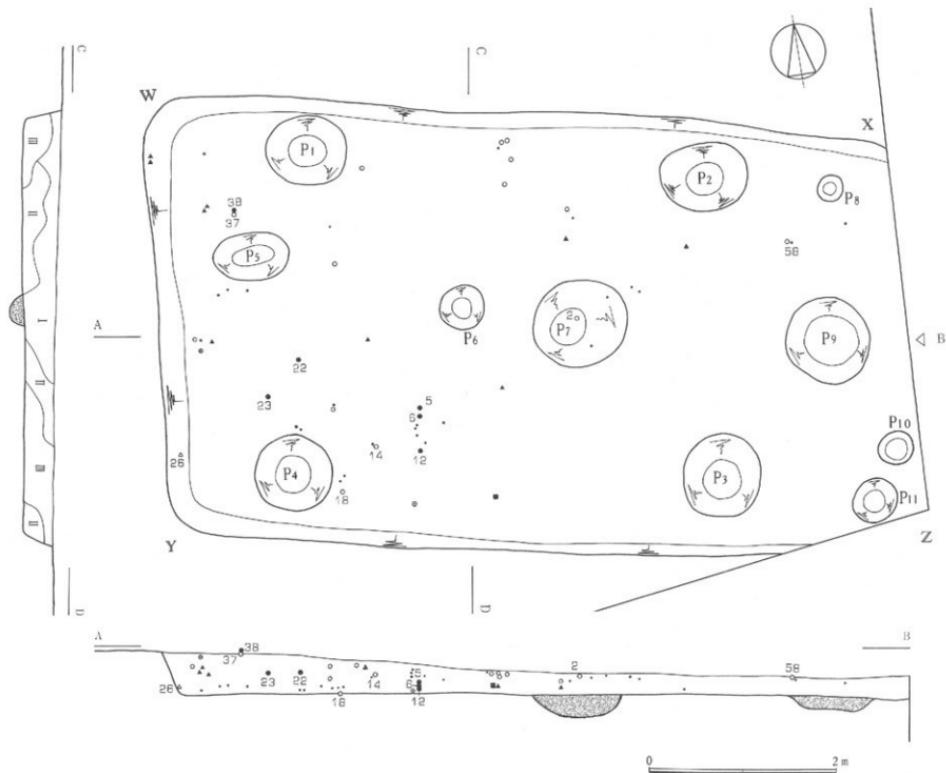
現存長 8.5 cm の磨製石斧で、両面、側面の各面が平滑に研磨されている。

刃部が一部欠失しており、上端が細く下端がひろがる形状である。

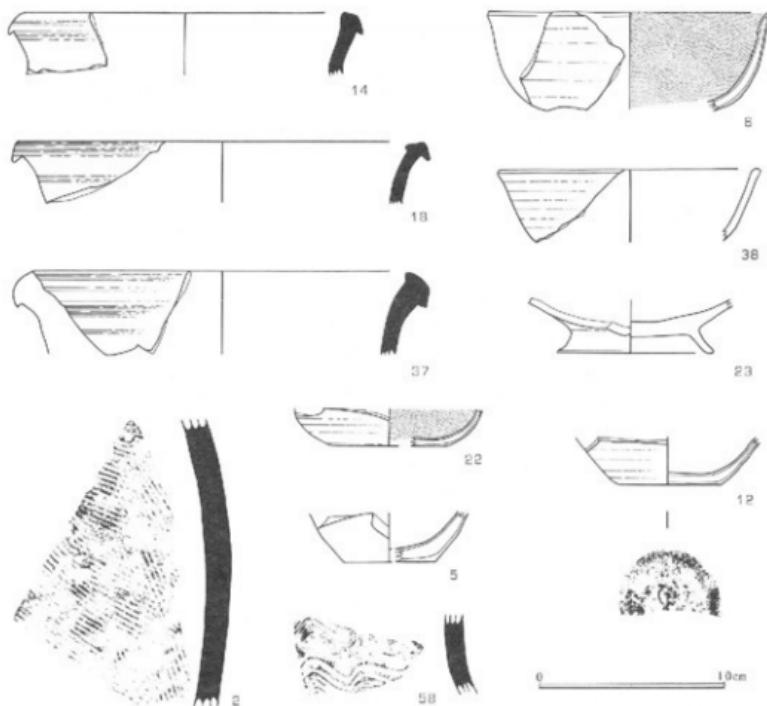
**時 期** 以上の土器群から、9世紀の第2四半期を中心とした年代が考えられる。

表 2 床面硬度分類基準表 (井上義安氏による)

	床面の状態と分類の基準	硬度の分類
A	踏み固めた痕跡が全然なく軟らかい床面	硬度 1
B	僅かに踏み固めたと思われる程度の床面	硬度 2
C	硬く踏み固まっているが亀裂のない床面	硬度 3
D	非常に硬く踏み固め亀裂の生じている床面	硬度 4



第一六四圖 第五号住居址実測図・遺物出土状態図



第一七図 第五号住居址出土土器実測図・拓影図

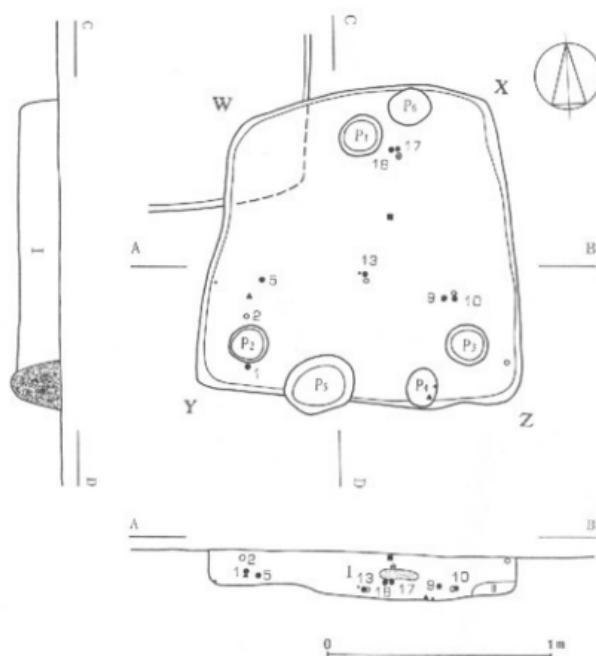
### 6 第六号住居址（第一八・一九図、図版第一〇・一八）

**遺存状態** 本址は調査区中央部のやや東寄りの位置に検出され、北側の第七号住居址の南東部Zコネーナーを破壊して構築されている。南壁中央部に確認面から掘り込まれたピットが1個存在するが、全体的には保存の良好な堅穴といえるだろう。

**規 模** 東壁(X-Z) 2.7 m, 西壁(W-Y) 2.3 m, 南壁(Y-Z) 2.8 m, 北壁のW-X間は2.3 mを測り、北壁がやや膨らむものの隅丸方形を呈し、面積約7 m<sup>2</sup>の比較的小形の堅穴である。

周壁はほぼ垂直に近い状態で掘り込まれており、壁面は非常に堅固で崩落や剥落は全く認められない。壁高は、東壁32 cm, 西壁30 cm, 南壁37 cm, 北壁35 cmを計測する。

**床 面** 細かい凹凸が全面に認められ平坦であるとは言い難い。



第一八図 第六号住居址実測図・遺物出土状況図

特にかたく踏み固めたような痕跡は認められず、第七号住居址を破壊した部分にも貼床は施されていない。床面全体の硬度は2に相当する。

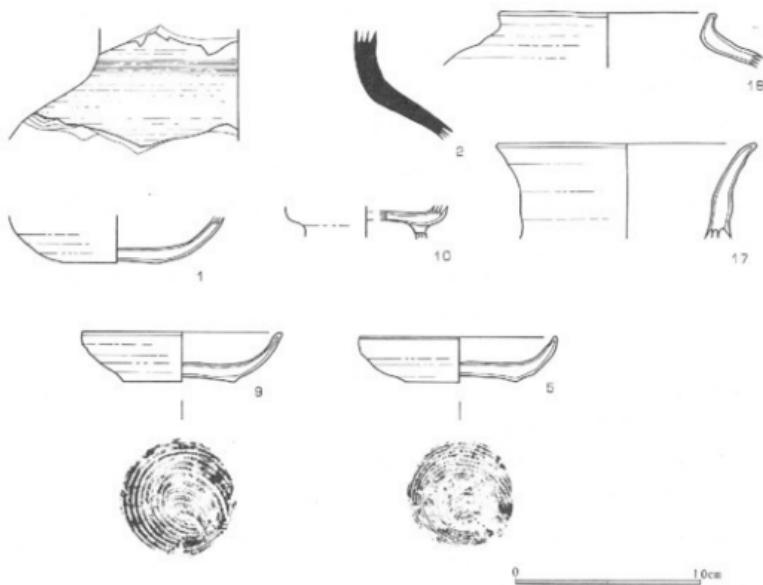
**ピット** 床面を精査して6個のピットを検出することができた。このうち主柱穴と見做すことができる的是P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>の3個である。

P<sub>1</sub>は径35×35cm、深さ40cm、P<sub>2</sub>は径33×35cm、深さ39cm、P<sub>3</sub>は径37×36cm、深さ37cmを測り、3個のピットは直径も深さもほぼ一致する。

この3個のピットの位置関係を実測図(第一八図)で観察すると、北壁の中央下にP<sub>1</sub>、Yコーナー付近にP<sub>2</sub>、ZコーナーにP<sub>3</sub>が配されている。ピットの間隔はP<sub>1</sub>～P<sub>2</sub> 1.7m、P<sub>2</sub>～P<sub>3</sub> 1.6m、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub> 1.7mを計測し、おおむね等間隔である。この配置はP<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>を結ぶ線を底辺とし、P<sub>1</sub>を頂点とするほぼ正三角形を形成している。

第四号住居址と同様の三本柱住居址と考えても大過あるまい。

**埋没土** ローム粒子と焼土粒子を微量に含む黒褐色土が充満しており、A-Bセクション



第一九図 第六号住居址出土土器実測図

の中間層に厚さ6～8cmの小範囲の焼土層が介在する。また、東壁際の床面上には少量の黒色土が堆積している。

この埋没土の層相は、豊穴の壁外の土砂の自然流入ではなく、明らかに人為的層序である。

**遺物の出土状態** 遺物総数は18個にすぎない。内訳は縄文土器1個、土師器10個、須恵器4個、自然石2個、鉄滓1個である。ドット・マップを観察すると、平面分布のあり方は極めて散発的で空白部分が目立ち、特別な傾向を指摘することはできない。

A-Bセクションに投影した垂直分布の状態は、床直には少なく中間層に集中する。

**遺物の概要** 出土遺物の器種は、土師器では甕形土器、壺形土器、高台付环形土器、皿形土器などがみられ、須恵器では大形の壺形土器が認められる。

いずれもロクロ成形が施されており、皿形土器の底部切り離しは、回転糸切りの手法が用いられている。

**時期** 9世紀の第4四半期ころの年代が考えられる。

## 7 第7号住居址（第二〇・二一・二二図、図版第一〇・一八）

**遺存状態** 本址は第六号住居址の北側に検出され、南東部のZコーナー付近は第六号住居址構築の際に破壊されている。北壁の中央部からWコーナーにかけての部分と、西壁のWコーナー寄りの部分に搅乱が存在し、保存状態は良好とはいえない。

**規模** 東壁(X-Z)推定4.5m、西壁(W-Y)4.7m、南壁(Y-Z)推定3.2m、北壁(W-X)3.2mの辺長を測り、南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈する面積約15m<sup>2</sup>の竪穴住居址である。

残存周壁は非常に浅く、ほぼ垂直に掘り込まれてはいるが、同一の確認面の南側に隣接する第六号住居址と比較して本址が著しく深いのは、黒色土を周壁に利用していたかもしれない。

残存周壁の高さは7~20cmである。

**床面** 一般的な床面のあり方に相違して、全面に小形の凹みが散在し、床面硬度はソフトロームよりやや硬い2に相当する。

**ピット** 床面の精査が進むにつれて11個のピットを検出した。計測値は次のとおりである。

P<sub>1</sub>は径80×55cm、深さ23cm、P<sub>2</sub>は径120×100cm、深さ56cm、P<sub>3</sub>は径60×55cm、深さ49cm、P<sub>4</sub>は径90×80cm、深さ21cm、P<sub>5</sub>は径97×82cm、深さ20cm、P<sub>6</sub>は径17×17cm、深さ43cm、P<sub>7</sub>は径43×38cm、深さ37cm、P<sub>8</sub>は径90×72cm、深さ26cm、P<sub>9</sub>は径18×16cm、深さ39cm、P<sub>10</sub>は径27×25cm、深さ41cm、P<sub>11</sub>は径45×40cm、深さ31cmを計測する。

しかし、位置関係は実測図（第二〇図）でみるとおり、極めて不規則で、この中から主柱穴を特定するのは困難である。

**埋没土** ローム粒子・ローム小ブロック・鹿沼ブロックを混入する暗褐色土が堆積する。

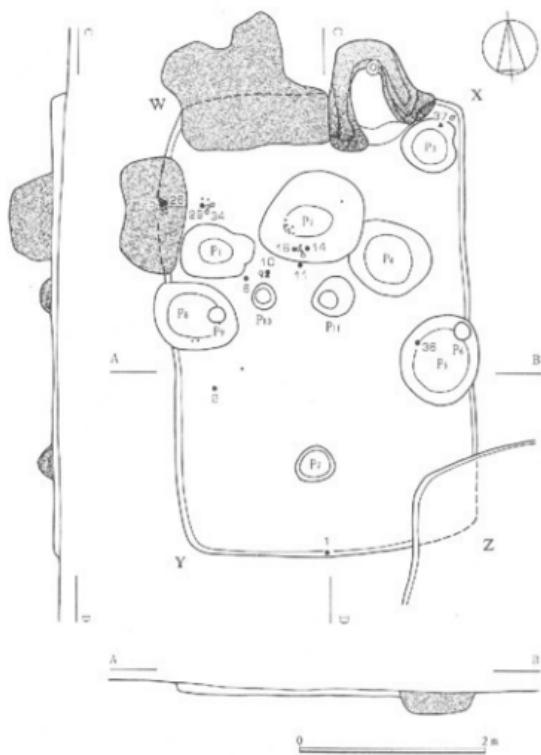
**カマド** 北壁のXコーナー寄りに位置し、燃焼部を壁内に、煙道部を壁外に掘り込んだ構築である。奥壁～焚口間約120cm、焚口の幅40cm、燃焼部幅35cmである。青灰色砂質粘土を練り固めて堅固に積み上げた両袖の残存状態は良好である。断面図のIの黒褐色土は天井部の崩落と思われる。床面を掘りくぼめた燃焼部の床面上に厚さ8cmの焼土層が残っていた。

煙道部は内湾しながら舳先のように立ち上がる。

燃焼部から煙道部に移行する付近の右側袖部上に、高台付环形土器が被さった状態で出土した。

**遺物の出土状態** 出土遺物の総数は41個である。内訳は縄文土器2個、土師器29個、須恵器8個、自然石2個である。この中には土師器の环形土器完形品が1個存在する。

平面分布の状態をドット・マップで観察すると、竪穴の中央部より西壁にかけての部分にまとまりがある程度で、全体的には非常にまばらな出土状態である。特に東西中心線の北側と南側は



第二〇図 第七号住居址実測図・遺物出土状態図

殆んど空白といって過言ではない。遺物台帳に記録されている遺物の出土レベルをみると、床直は皆無で、中層から確認面まで満遍なく分布している状態を取れる。

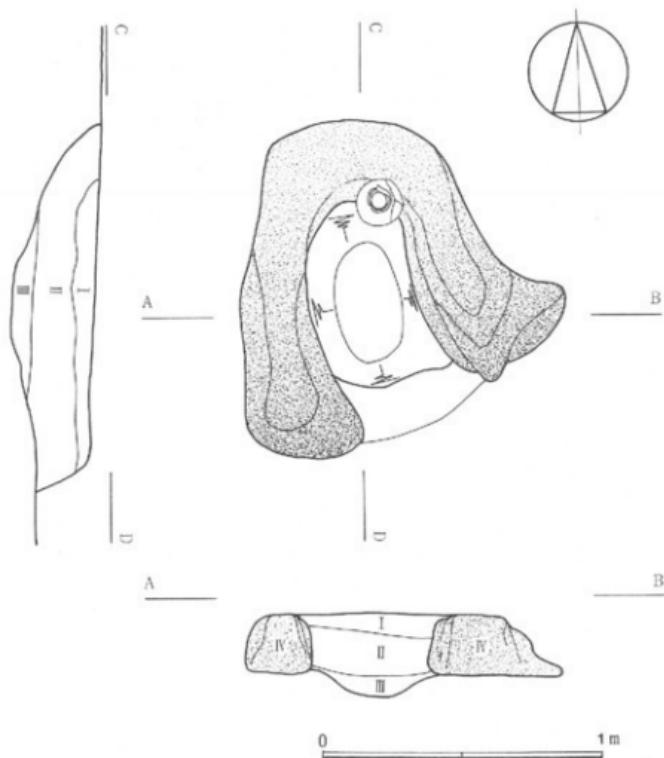
**遺物の概要** 本址の主体となる遺物は土師器と須恵器で、土師器は土器全体の 74% を占める。

土師器の器種には甕形土器、壺形土器、高台付壺形土器、皿形土器などがみられる。

壺形土器は体部を内湾させながら外反することなく口縁部にいたるもの、体部を外傾させながら開くもの、体部を内湾させながら立ち上がり口縁部で外反するものなどの器形がある。

2・16 は高台付壺形土器の底部と高台部で、ハの字状の高台を付している。

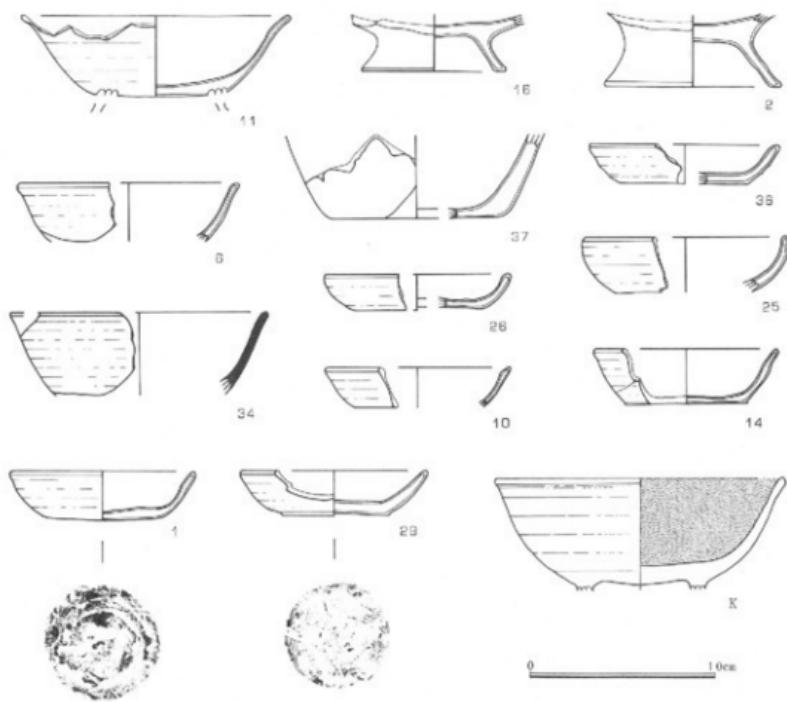
1 の底部切り離しは回転鎔切り、29 は回転糸切りの手法が行われている。



第二一図 第七号住居址カマド実測図

A-B・C-D セクション共通。

- I 黒褐色土 若干の焼土粒子と粘土小ブロックを混入する。天井の崩落であろう。
- II 赤褐色土 多量の焼土粒子を混入する。
- III 焼上層 かたく焼けている。
- IV 粘土 袖部の構築材で残存状態良好。燃焼部面は被熱によって赤変している。



第二二図 第七号住居址出土土器実測図

Kはカマド部より出土した土師器で、おそらく高台付環形土器であろう。体部を内湾させながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反している。内面を鏡磨きした後に黒色処理を施している。

土師器、須恵器とともにロクロ成形が行われている。

須恵器は環形土器が存在する。体部はわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で若干外反する器形である。

縄文土器は小破片で摩耗が著しく拓影は不可能であった。おそらく本址廃絶の際に埋め戻しの土砂に紛れ込んだものであろう。

時 期 9世紀初頭を中心とした年代が考えられる。

## 第八章 土壌群の調査

A 地区より検出された土壌は 9 基であるが、出土遺物が極めて少なく資料として収録する価値の低いもの、遺物が皆無の土壌、風倒木痕らしい土壌（一・七・八・九）は紙面の冗費になるので省略することにした。

### 1 第二号土壌（第二三～二六図、図版第一・一二・一九・二〇）

本土壌は、第二号土壌と重複して G 列第 8 グリットより検出された。平面形状は不整円形で、開口部の大きさは東一西 155 cm、南一北 180 cm、中心部の深さは 85 cm を測る。

底径は東一西 135 cm、南一北 160 cm で、底面は楕円形に近い。第三号土壌の北壁を切断して構築されているが、保存状態は良好である。

掘り方は円筒状を呈し、鹿沼層を掘り抜いて底面は粘性褐色ローム層に達している。

底面は固く踏み固められており、住居址の床面硬度 3 に近く、ほぼ平坦である。

埋没土は、黒褐色の單一層で、比較的やわらかくさらさらしている。黒色土がベースでローム粒子・ローム小ブロック・鹿沼粒子を若干混入する。

この埋没土の性状と堆積状態は、土砂が周囲から自然に流れ込んだものではなく、明らかに短時日に埋め戻されたものである。

土壌内における遺物の出土状態は、一つの特徴を指摘することができる。それは、遺物番号 18・19 を基点として扇形状に展開していることである。これは、北西から南東に向かって同時に投棄した方向性を端的に物語っているものであるといえよう。

垂直分布のあり方を A-B セクションに投影して観察すると、層位的には中心部の底面付近にややまとまりをみせているが、確認面まで平均に分布している。北壁側の出土は皆無である。

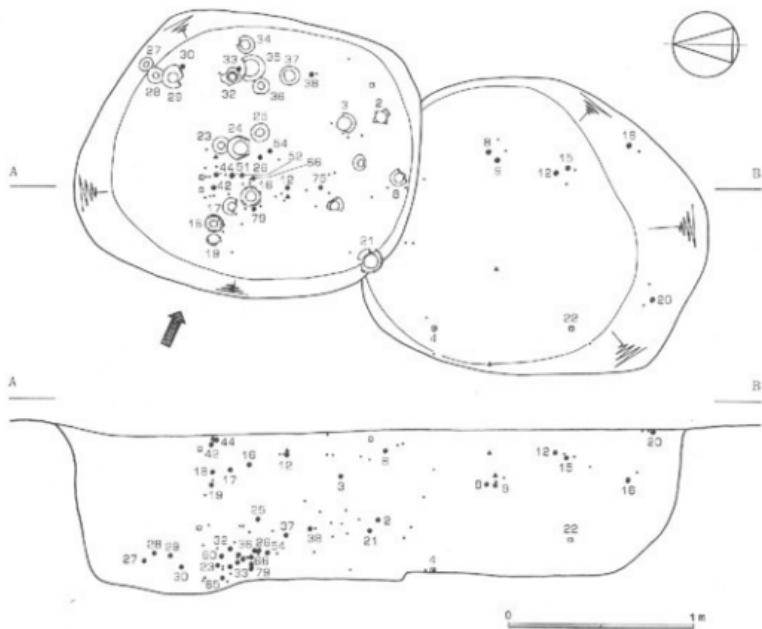
出土遺物の総数は 80 個で、内訳は土師器 75 個、自然石 2 個、鉄滓 3 個である。

本土壌の主体となる遺物は土師器であるが、その器種をみると环形土器、高台付环形土器、皿形土器などが大部分を占める。环形土器や高台付环形土器には完形品はないが、皿形土器にはかなりの数の完形品が存在し、その中には明らかに灯明皿として使用されたことを示す煤の付着が認められるものがある。（3・23・25・27・34）

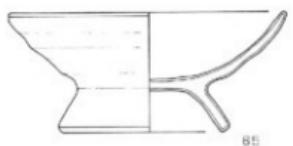
すべての器種はロクロで成形されているが、环形土器、高台付环形土器は体部が内湾して開く例が多く、中には外傾して開く例（57）もある。また、内面に鏡磨きを行った後に黑色処理を施す例（21・79・32・37・25）などもみられる。

底部の切り離しは回転鎔切りのもの（28・25・34）、回転糸切りのもの（75・16・37・36・18・2・23・66・27・3・17）が認められる。

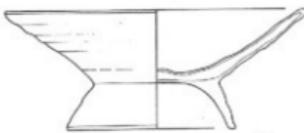
本土壌の時期は、土器群の特徴から 10 世紀以降の年代が考えられる。



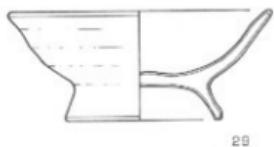
第二三図 第二号（左）、第三号（右）土壤実測図



65



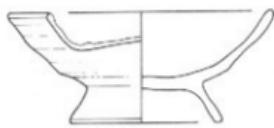
24



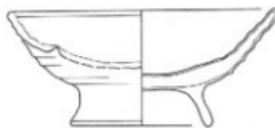
29



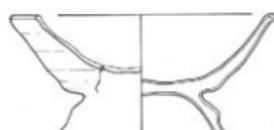
35



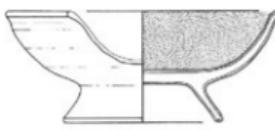
51



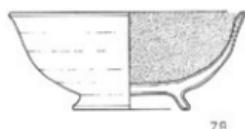
33



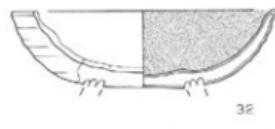
52



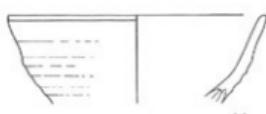
21



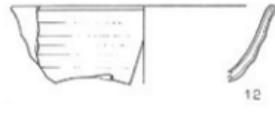
78



32



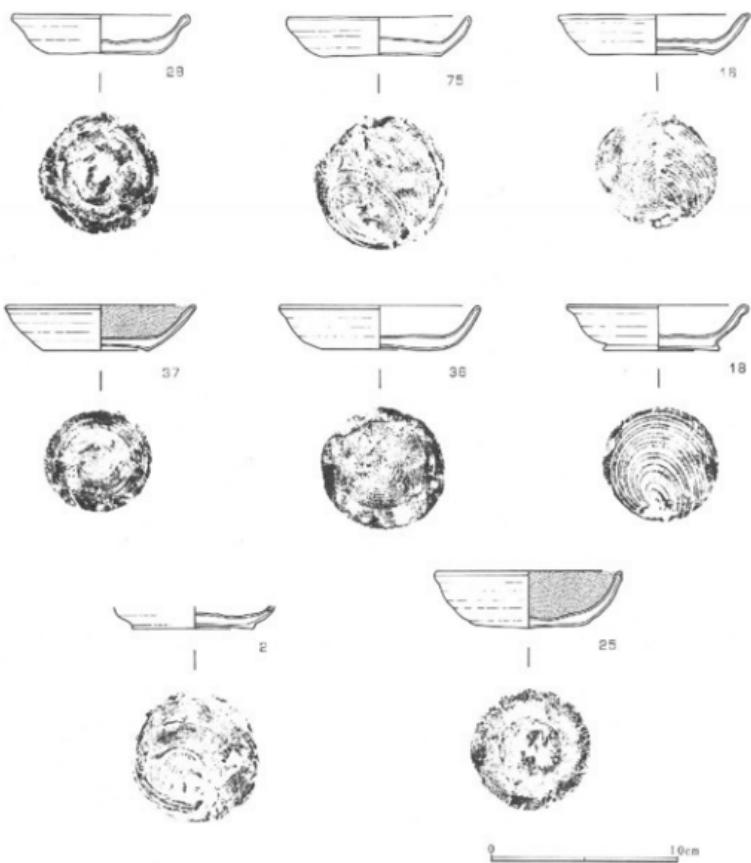
44



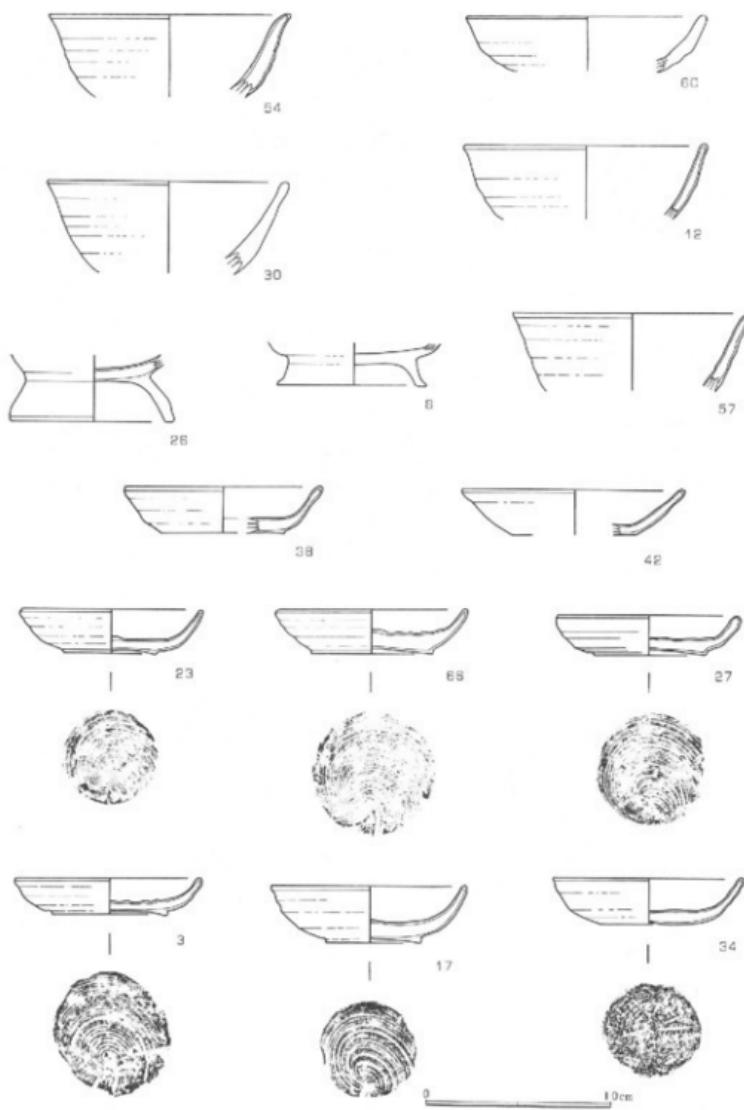
12

0 10cm

第二四圖 第二號土壤出土土器實測圖（一）



第二五图 第二号土壤出土上器测图(二)



第二六圖 第二號土壤出土土器實測圖（三）

## 2 第三号土壙（第二三・二七・四六図、図版第一二・一三・二〇）

本土壙は、第二号土壙の南側に重複して検出された。北側は第二号土壙に切断されている。

平面形状は楕円形を呈し、開口部の大きさは東一西 160 cm、南一北推定 190 cm、中心部の深さは 80 cm を測る。底径は東一西 150 cm、南一北推定 150 cm で、底面は不整円形である。

第二号土壙と重複しているが、攪乱による破壊は受けていない。

掘り方は第二号土壙と同様に、鹿沼層を掘り抜いて底面は粘性褐色ローム層に達しているが、断面形は円筒状と見做すことができよう。壁面の崩落は認められず堅固である。

底面は、特に踏み固めたと思われるような痕跡はみられず、硬度は 2 程度である。

埋没土は第二号土壙と同様の性状で、黒褐色土が土壙内に充満している。第二号土壙とほぼ同時期に埋め戻されたものと考えられる。

遺物の出土状態を平面記録したドットから観察すると、特に変った傾向はなく全体にまばらに散在する。垂直分布では中層部にまとまりを示している。

出土遺物の総数は 23 個で、内訳は土師器 16 個、須恵器 3 個、縄文土器 1 個、自然石 2 個、鉄製品 1 個となる。主体となる遺物は土師器と須恵器で、縄文土器は埋め戻しの際に混入したものであろう。土師器の器種には壺形土器、高台付壺形土器、皿形土器などが認められ、壺形土器には内面に黒色処理を施した仲間がある。（8・12・20）

第四六図 3 D-22 の鉄製品は刀剣の破損品と思われる。現存長 16.5 cm を測る。

壺形土器の体部が直線的あるいは内湾気味に開き、口縁部がわずかに外反し、内面黒色処理を施す特徴から、10 世紀第 2 四半期を中心とした年代が考えられる。

## 3 第四号土壙（第二七・二八図、図版第一三・二一）

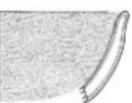
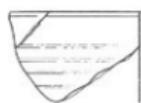
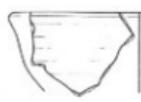
本土壙は G 列第 8 グリットより検出され、南側の第五号土壙と重複している。新旧関係は第四号土壙の方が新しい。平面形状は東側に膨らむ隅丸方形に近い。開口部の大きさは東一西 170 cm、南一北 165 cm、中心部の深さは 60 cm である。底径は東一西 145 cm、南一北 155 cm で底面は不整円形である。断面図でみると掘り方は、西壁は垂直に、東壁は斜めに掘り込まれており、壁面は堅固で底面は平坦である。底面硬度は 2 に相当する。

土壙内の埋没土は 3 層に区分することができる。この識別は明瞭である。I は褐色上で鹿沼ブロック（1～4 cm）・ロームブロックを多量に混入し、木炭片・焼土粒子がわずかに混在する。

II は暗褐色土で、I 層より木炭細片の混入量が多い。III は褐色土で鹿沼ブロック（1～3 cm）・ロームブロック（1～3 cm）の混入がやや多い。

出土遺物はわずかに 5 個で、すべて皿形土器である。

時期としては、10 世紀初頭を中心とする年代が考えられる。



12



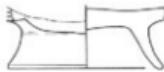
20



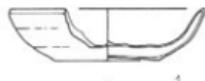
15



4



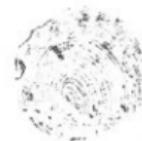
46



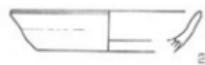
1



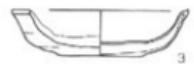
4



5



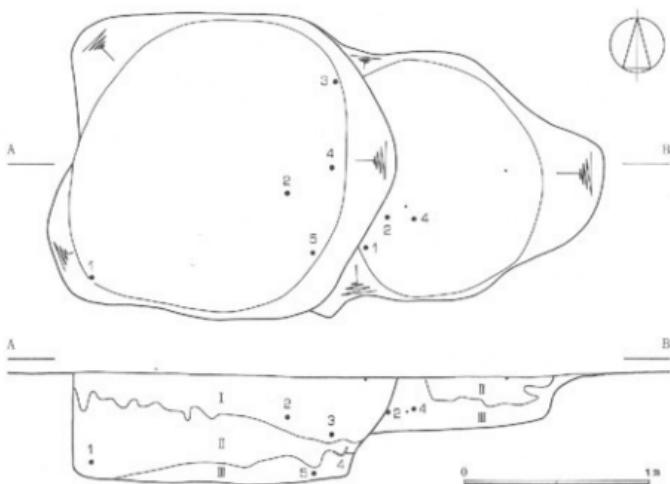
2



3



第二七圖 第三號（上段），第四號（下段）土壤出土土器實測圖・拓影圖



第二八図 第四号（左）、第五号（右）土壤実測図・遺物出土状態図

#### 4 第五号土壤（第二八・三〇図、図版第一三）

本土壤は、第四号土壤の東側に重複して検出された。西壁側は第四号土壤に切断されている。平面形状は、東側に膨らむ楕円形であろう。開口部の大きさは推定で東一西 160 cm, 南一北は 135 cm, 中心部の深さは 29 cm である。底径は東一西推定 120 cm, 南一北 125 cm で、底面はほぼ円形である。

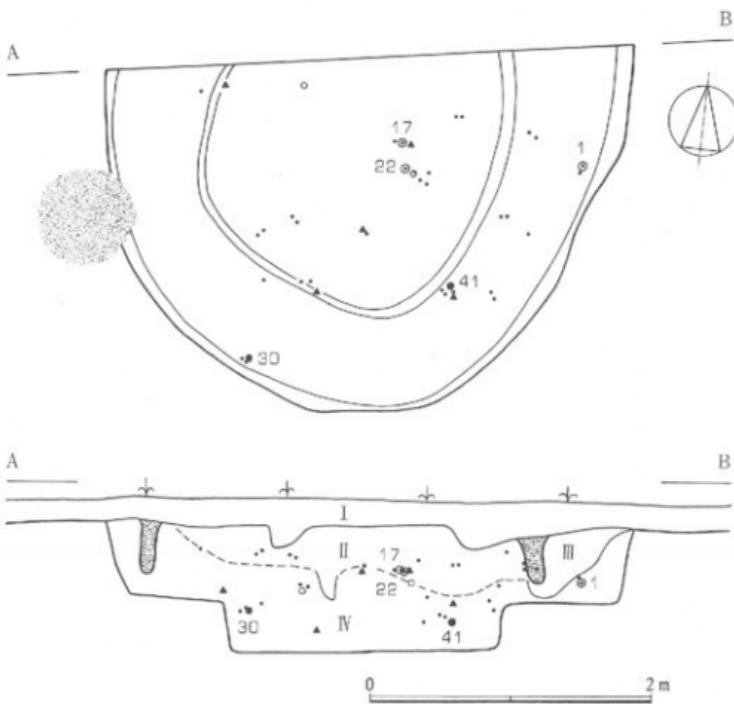
掘り方をみると、西壁は切断されているので不明であるが、東壁はかなり斜めに掘り込まれており ( $40^{\circ}$ )、残存部の断面形は舟底状に近い。壁面の崩れはなく、底面は平坦である。

埋没土は第四号土壤と近似の性状で、2 層に区分することができる。

断面図の II は、第四号土壤の II と同様であり、III も褐色土で、鹿沼ブロック・ロームブロックの混入が多い。

出土遺物も第四号土壤と全く同数の 5 個である。すべて土師器の破片であるが、辛うじて器種を窺えるのは高台付環形土器である。

出土遺物が少なく、時期を特定することは極めて困難であるが、9 世紀第 4 四半期ころであろうか。



第二九図 第六号土壤実測図・遺物出土状態図

### 5 第六号土壤 (第二九・三〇図、図版第一四)

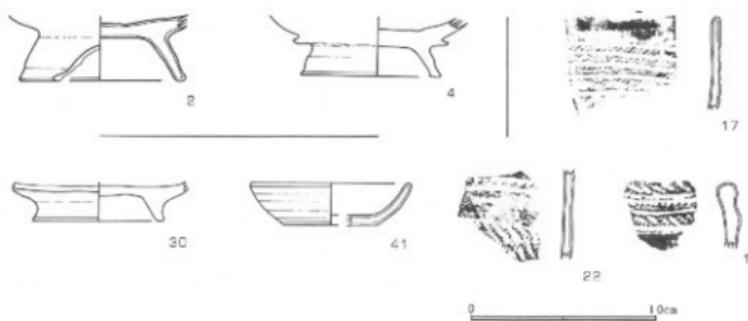
本土壤は、A 地区調査区の北東隅、H 列第 10 グリットから検出された。東—西中心線より北側の約 50% は K 域外に埋没しているので光掘は不可能であった。現存東—西径は 3.8 m を測る。

プランの詳細は不明であるが、平面形状はおそらく円形乃至椭円形を呈するものと思われる。

掘り形の断面形は第二九図に示すとおり、2段掘り込み式の凹字状土壤である。

底面は円形と思われるが、平坦で踏み固められた痕跡はない。確認面と底面の中間には鹿沼層が存在する。底面硬度は軟らかく 1~2 度である。

埋没上の層相を観察すると、I は耕作土、II は暗褐色土でロームブロックや鹿沼ブロックを多量に混入する。中央部付近はやや黒色味が強くなる。III は黒褐色土で、この部分は黒色土がベースでわずかにローム粒子を含んでいる。



第三〇図 第五号（左上）、第六号土壤出土土器実測図・拓影図

IVは褐色土でII層との相違は漸移的で明確な区分線は引き難いが、ロームブロックと鹿沼の小ブロックの混入が非常に多くなる。

この状態は図版第一四（上段）から容易に看取できよう。

出土遺物の総数は41個である。内訳は縄文土器6個、土師器27個、須恵器2個、自然石6個である。完掘したとしても遺物総数はそう多くはないだろう。

平面分布の状態をドット・マップで観察すると、特に変わった傾向は指摘できず、ほぼ平均して散在している。

垂直分布のあり方をA-Bセクションに投影すると、床直は皆無で中間層にまとまりを示している。

本土壤の主要な遺物は土師器であるが、いずれも細小破片で、辛うじて器種を特定できるのは壺形土器と高台付壺形土器である。

本土壤は、出土土器がすべて細小破片であることや、平面および垂直分布の状態から考察すると、規模は大きいけれども多分にゴミ捨場的性格の強い遺構のように思われる。

## 第九章 その他の遺構の調査

### 1 粘土坑 (第三一図、図版第一四・一五)

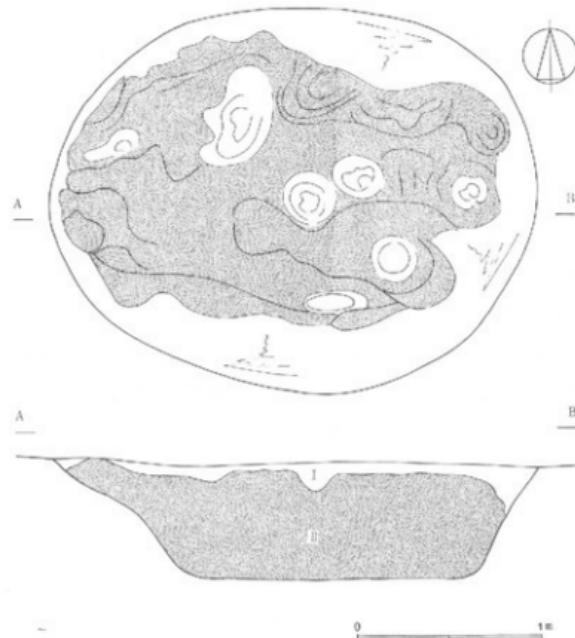
F列第8グリットより検出された、第七号住居址の北東に位置する。

本坑の平面形は橢円形で東-西 2.6 m、南-北 2.1 m、深さは 65 cm を測る。

掘り方は舟底状を呈し、坑内全体に青灰色砂質粘土が充満している。この粘土は第三号住居址や第七号住居址のカマド袖部の構築材に使用している粘土と同一の性状である。

残存する粘土は非常に固くなっているが、撒水すると青灰色になり若干軟らかくなって採取しやすくなる。

粘土坑の中に須恵器の壺形土器の胴部破片が数個存在する。おそらく粘土を採取するための道具として利用していたのではないだろうか。本粘土坑は、本集落のカマド構築用として貯蔵されたものと思われるが、今後の課題として粘土採掘の場所をどこに求めるかであろう。



第三一図 粘土坑実測図

## 2 井戸状遺構（第三二・三三図、図版第一五・二三）

本遺構は円形周溝状遺構の南側、第二号住居址の北側、D列第6～7グリットに跨がって検出された。発掘開始当初は土壌かと思ったが、調査が進むにつれて井戸状遺構であることが判明した。

確認面の平面プランはほぼ円形を呈し、東-西2.2m、南-北2.2mを測る。

時間の制約と危険防止を優先させ、1.9mまで掘り下げた時点で、この面よりさらに1.8m以上掘り下げられていることを確認して完掘を断念せざるを得なかった。

掘り方は確認面から90cm掘り込んだところから東-西1.1m、南-北1.1mの円形になり、そのまま垂直に掘り下げて、発掘部の底部径も東-西1.1m、南-北1.1mの円形であった。

埋没土は5層に区分できる。この識別は極めて明瞭である。80cmの深さまでのIは青灰色粘土の小ブロックと礫を多量に混入した固い褐色土である。この性状は下層に礫層が存在することを示唆するものであろう。西壁側にはIIの黒色土が固くしまった状態で小範囲に堆積する。

I層の下のIII層は1.2mの深さまで微量の焼土粒子を混入する暗黒色土。I、II、III層の周囲にIVの暗褐色土が堆積する。この層にはロームと焼土粒子の混在がみられ、さらさらとしていて軟らかい。80cmから1.4mまでの深さの西壁際にはVの黒褐色土が存在する。

下層は鹿沼粒子混じりの褐色粘性ロームである。

壁面には工具痕があり、堅固で崩落の形跡は全く認められない。

壁面に現れた自然層序は、下から粘性ローム層、鹿沼層、ローム層の順に堆積している。

遺構内より出土した遺物総数は48個で、内訳は繩文土器3個、土師器7個、須恵器4個、自然石32個、石器2個である。これらの遺物はIII層より確認面まで満遍なく出土している。

出土遺物総数48個のうち土器破片はわずかに14個である。このうち器種が窺えるのは土師器の环形土器（内黒）と須恵器の大形長頸壺形土器だけである。

石器の2個は自然石を利用した打製石斧で、第四五図井戸-20は分銅型、第三三図45は最大長21cm、最大幅14cmの大型で、ともに木造構掘削の道具と考えられる。

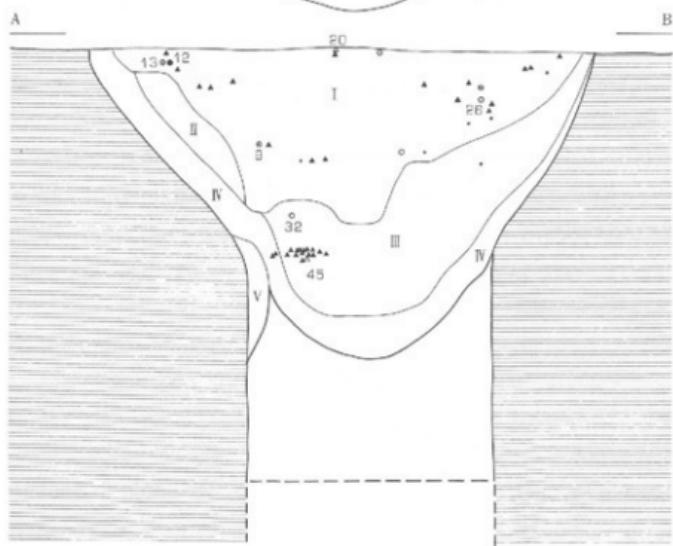
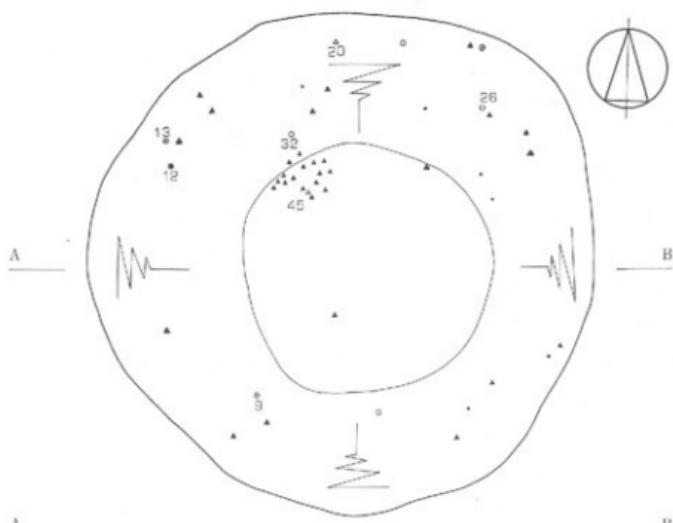
繩文土器破片は本遺構と直接関係するものではない。

時期の特定は困難であるが、本遺構至近の確認面から内耳土器破片が出土していることを考え合わせると中世（13・14世紀）まで時代が降るかもしれない。

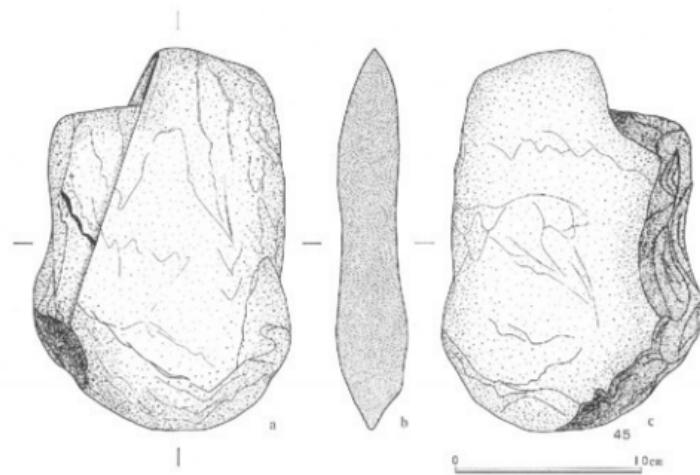
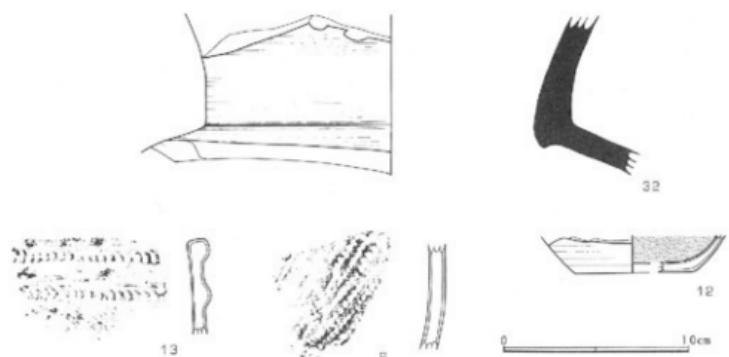
## 3 その他

調査区の南西隅付近にピット群を検出し、掘立柱建物跡の存在を思わせたが、調査日数の延伸を避けるため詳細な調査を断念し、遺構分布図（第三図）の記録にとどめた。

また、ピット群の東側に北から南に向かって伸びる一条の溝状遺構が存在する。長さ10.5m、幅60～90cm、深さ30cm、遺物の出土はなかった。



第三二圖 井戸状構実測図



第三三圖 井戸伏道構出土上器，石器実測図

## B 地区の遺構と遺物

# 第一〇章 確認調査（試掘）の概要

第四章「発掘調査区と調査方法」で述べたB地区の調査方針にしたがい、東西方向に3本のトレンチを設定した。各トレンチ間は6mとし、長さ50m、幅2mである。

西側から10mを1区画とし、1本のトレンチをそれぞれ5区画とした。

各トレンチの土層々相および遺構の確認状況は次のとおりである。

## 1 第1トレンチの確認調査

B地区の北端にあたり、A地区にもっとも近く、長さ50m（5区画）のトレンチである。

第1～2区画A-Bセクション（20m）の断面図から窺われるよう、トレンチの土層々相は20～30cmの耕作土（表土）が堆積し、耕作土の下はローム層に移行する。

第1区に2条、第3区に1条、第4区に1条、合計4本の溝状遺構を検出した。もっとも西側の1号溝はA地区より延びてきた溝である。

第2区の北壁側に方形の住居址を思わせるプランが現れたので、トレンチを北側へ拡張し、主軸を北にもつ隅丸方形の堅穴住居址の平面プラン全容を把握した。

遺構としては住居址1軒と溝状遺構4条で、これ以外は第5区から深さ25cmの擾乱を1個確認しただけである。

## 2 第2トレンチの確認調査

第1トレンチの南側に並行する長さ50mのトレンチである。本トレンチの東側は12°の傾斜をみせている。

第3～4区画C-Dセクション（20m）の断面図を観察すると、第1トレンチとほぼ同様に、15～20cmの耕作土の下はローム層に移行している。

第1区に3条、第2～3区に1条、第4区に1条、合計5条の溝状遺構が確認された。

このうちの4条は第1トレンチから延びてきたものである。

第2区の北壁側に不整形のプランが現れたが、確認面に縄文土器破片の存在を認めたので、遺構の可能性を考え部分拡張することにした。その結果、平面形状が不整梢円形を呈した縄文時代後期の堅穴住居址の全容を捉えることができた。

本トレンチで発掘調査の対象となるのは、住居址1軒と溝状遺構で、他は第3区と第5区に各1個の擾乱を確認しただけである。前者の深さは30cm、後者は20cmである。

## 3 第3トレンチの確認調査

B地区的もっとも南側に位置し、第2トレンチと並行する長さ50mのトレンチである。

本トレンチの東側も13°の傾斜角で東側へ落ち込む地形を呈している。

第4～5区E-Fセクション（20m）の断面図で土層を観察すると、耕作土は15～25cmの厚

さで堆積し、その下はローム層に移行する。

トレンチ内の土層々相は、各トレンチともほぼ共通しているといえるだろう。

第2区から第3区にかけて、トレンチ内に住居址のカマドが現れ、明確な周壁の一部も確認できたのでトレンチ両側の表土を排土し、A・B両地区を通じて最大規模の竪穴住居址を検出した。

溝状遺構は、第1トレンチの第3・4区から延びてきていた3・4号溝は、第2トレンチと第3トレンチの中間で消滅したのか、あるいはU字形かV字形で連結したのか、または連結して東西いずれかの方へ横走したのか判然としないが、いずれにしても本トレンチ内には現れなかった。

溝状遺構としては、第1区の1・2号溝だけである。

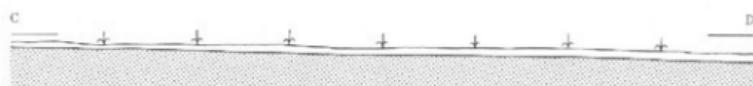
溝状遺構の規模は下表のとおりである。

表 3 B 地区溝状遺構実測値 (計測単位cm)

第1号溝	最大幅110	最小幅80	最深部30	最浅部12	遺物なし
第2号溝	" 350	" 170	" 41	" 35	" "
第3号溝	" 190	" 140	" 23	" 19	" "
第4号溝	" 260	" 200	" 30	" 25	" "
第5号溝	" 80	" 50	" 15	" 10	" "



第1トレンチA-Bセクション土層断面



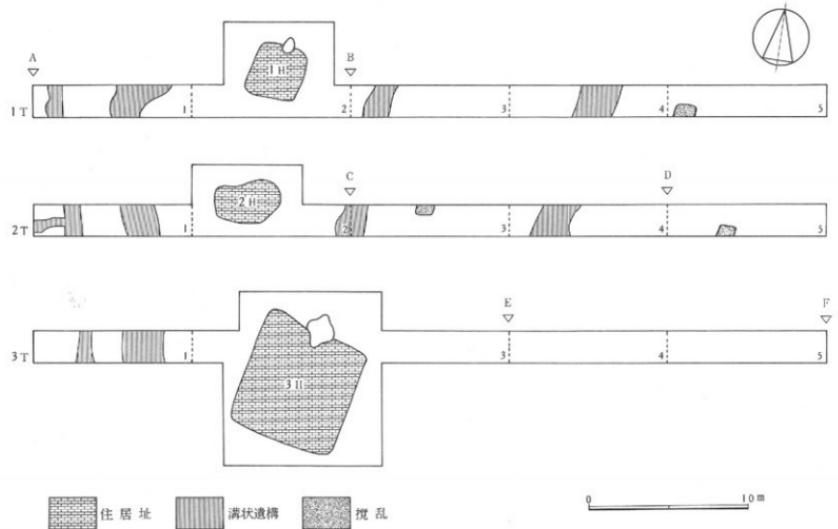
第2トレンチC-Dセクション土層断面



第3トレンチE-Fセクション土層断面

0 5m

第三四図 B 地区トレンチ土層断面図



第三五図 B地区トレンチ配置図・遺構分布図

## 第一章 繩文時代住居址の調査

### 1 第二号住居址（第三六・三七図、図版第三〇・三一・三二・三七・三八）

遺存状態 本址は第2トレンチ第2区より検出された。トレンチ外の埋没部を拡張してプランの全容を把握した。B地区のいずれの遺構にも言えることであるが、表土下約30cm前後の確認面から、破壊も損傷もない遺構が検出されたことは僥倖といってよいだろう。

規模 東-西4.0m、南-北3.0mの楕円形というより不倒翁形の竪穴住居址である。

面積は約9m<sup>2</sup>で、周壁は非常に浅く南壁が3cm、北壁は20cmである。

南側が極端に浅く、中央部より北側がやや深くなる傾向を示している。

A地区の第七号住居址と同様に黒色土を周壁に利用していた可能性も考えられる。

残存周壁の壁面にかたさは認められないが、崩落の痕跡はみられない。

床面 樹根が深い竪穴内を縦横に這っており、その処理のために窪みや凹凸を残す結果となったが、本来は平坦だったろう。踏み固めたような形跡はなく硬度は2程度である。

南側の一部分を除いて床面全体を焼土が覆っている。特に実測図（第三六図）に示す点線の範囲は5～8cmの層となって堆積している。しかし、炉址は存在しない。

ビット 床面精査の結果4個のビットを検出した。しかしながら、これを柱穴とするには無理があるようである。

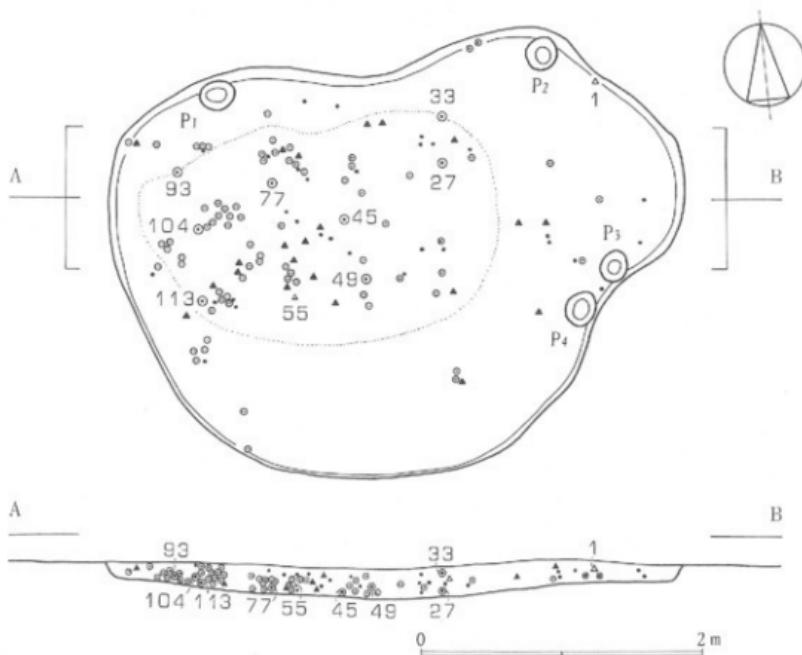
4個のビットの計測値はP<sub>1</sub>の径25×20cm、深さ7cm、P<sub>2</sub>は径22×20cm、深さ9cm、P<sub>3</sub>は径20×17cm、深さ9cm、P<sub>4</sub>は径25×20cm、深さ11cmである。このほかにも小規模のビットが多数検出された。しかし、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>以外に柱穴らしいビットは検出されなかったので、竪穴の規模から敢えて推考すれば、主柱穴の機能を持っていたかもしれない。この場合には、上屋の崩壊を防止するための特別な工夫が必要不可欠となろう。

壁外も検索したが柱穴と思われるようなビットは検出できなかった。

埋没土 焼土粒子を多量に混入した褐色土の單一層であるが、中心部に比して南側は焼土粒子の混入が少なくなる。この焼土混じりの埋没土と焼土層の存在は、本址の廃絶処理に関係があるかもしれない。

遺物の出土状態 ドットに記録した平面分布のあり方は、中央部より北西側へ集中する傾向がみられる。大形破片が数個出土したが、悉く小さく破碎している。出土状態を観察すると、投棄の時点で割れたというよりむしろ、竪穴埋没後何らかの圧力が加わって割れたのではないかと思われる。東側と南側は空白の部分が多い。

A-Bセクションに投影した垂直分布の状態は、中央部から西壁側に集中し、床直から確認面まで満遍なく出土している。



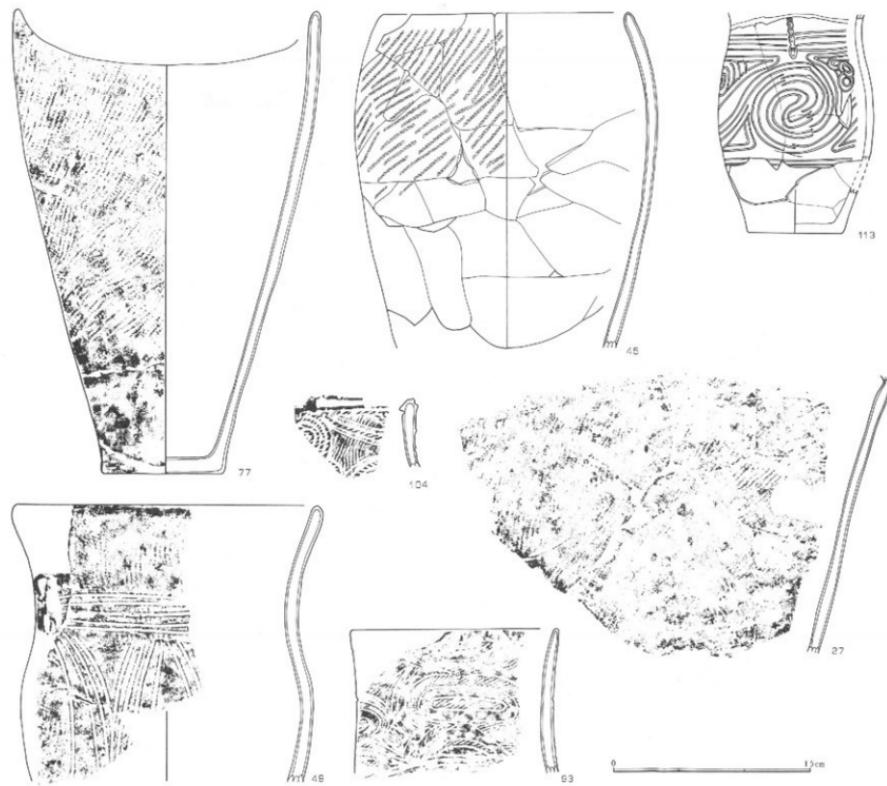
第三六図 第二号住居址実測図・遺物出土状況図

**遺物の概要** 出土遺物の総数は 137 個である。内訳は縄文土器 85 個、土師器 28 個、自然石 24 個となり、完形品は存在しない。

土器破片 113 の表裏関係をみると、表 71 個 (63%)、裏 31 個 (27%)、立ち 11 個 (10%) という比率になる。

本址の主体となる遺物は縄文土器であるが、器種は深鉢形と壺形に分けられる。口縁部をみると平縁と波状口縁があり、深鉢の器形も胴部がわずかに内湾しながら口縁部にいたるもの、口縁部でやや強く内湾するもの、口縁部が外反するものなどがみられる。キャリバー状は存在しない。

これらは後期中葉の堀之内式土器で、沈線文と磨消縄文の組み合わせによる文様に特徴づけられる。斜行縄文を押捺したもの、縄文地の上に直線・曲線・渦巻文などを描いたもの、紐線文を貼付したものなどは I 式に、無文の口縁部に隆起帯を付したものの、紐線文と磨消縄文帶に特徴づけられるもの、幾何学的な磨消縄文の仲間は II 式に比定されると思う。東北南部縄取式に対比されるとと思われるものもあり、本址の土器群は縄文時代後期中葉になるだろう。



第三七圖 第二号住居址出土土器實測圖・拓影圖

## 第一二章 歴史時代住居址の調査

### 1 第一号住居址（第三八・三九・四六図、図版第二八・二九・三六）

遺存状態 本址は第1トレンチ第2区より部分検出され、トレンチ外埋没部の表土を除去して拡張し全容を出現させた。破壊も搅乱もなく保存状態は良好である。

規模 東壁 X-Z辺長3.3m、西壁 W-Y辺長3.3m、南壁 Y-Z辺長3.0m、北壁のW-X辺長3.5mを測る。平面形状は隅丸方形を呈し、面積約11m<sup>2</sup>の堅穴住居址である。

主軸方向はほぼ磁北を指す。

周壁はやや傾斜して掘り込まれており、壁高はWコーナー22cm、Xコーナー22cm、Yコーナー28cm、Zコーナー22cm、東壁中央部20cm、西壁中央部26cm、南壁中央部23cm、北壁中央部25cmを計測する。壁面は堅固で剥落・崩落は全く認められない。

床面 内区中央部は硬度3、周囲の外区は硬度2に相当する。断面図にはあらわれないが細かい凹凸があり平坦とはいえない難い。周溝は存在しない。

ビット 床面精査の結果8個のビットを検出した。このうちP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が主柱穴の機能を果したものと考えられる。ただし、実測図（第三八図）をみると、一般的な柱穴のプランに比較して開口部と底面の大きさが違ひすぎる。そこで一つの仮説を立ててみることにした。

P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>各ビットの深さはP<sub>1</sub>=27cm、P<sub>2</sub>=26cm、P<sub>3</sub>=23cm、P<sub>4</sub>=26cmで面積11m<sup>2</sup>程度の上屋を支える柱穴の深さとしては充分とはいえないまでも事足りるであろう。過去において私たちが行ってきた半截発掘の事例に従って、柱の埋設工程を考えると、(1)あらかじめ柱を埋設する位置にやや人形のビットを掘り、(2)柱の埋設深度を統一するためにロームを埋め戻して突き固め、(3)柱を埋設して周囲に掘削したロームを多少突き固めながら床面付近まで埋め戻し、(4)最後に土砂の埋没が完了すると、その周囲を踏み固めて床面として使用する、という工程が看取できる。

そして、撤去の工程は、(1)最初の段階として、柱の周囲の土砂を掘りとる。(2)この工程で各柱穴の床面は斜めまたは垂直に切断される。(3)柱を撤去する。(4)柱を撤去した窪みに土砂を埋める。この溝みがいわゆる確認時のプランとなるわけである。

本址以外の柱穴の底面形をみると、大部分は円形またはほぼ円形を呈しているが、本址の場合の底面形はP<sub>2</sub>を代表されるように、梢円形をさらに細長くした形状を呈している。

これはおそらく、柱を抜き取る際にまっすぐ引き抜かず、斜めに倒しながら撤去したためではないだろうか。深度26～27cm程度の柱なら、縱に引き抜くより斜めに倒した方がはるかに能率的であろう。とすれば、床面の土砂も大きく押し上げることになるので、本址のような特異な形状になっても不思議ではないと思われる所以である。

P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>以外のビットの中にも補助的な役割を果たしたものがあるかもしれない。

**カマド** 北壁のほぼ中央に位置する。袖部を被覆する青灰色砂質粘土の範囲は、東西90cm、南北100cmの規模を有する。奥壁～焚口間は80cm、焚口幅40cm、燃焼部60cmを測る。

燃焼部の掘り込みはみられず、煙道部は壁外へ50cmほど突出している。

壁面には焼土化した部分が存在する。袖部は砂質粘土のみを構築材としており、芯の用材に特殊なものを使用した形跡はない。

**埋没土** 黒褐色土の單一層であるが、全体にローム粒子・ローム小ブロックが混在する。

**遺物の出土状態** 出土遺物の総数は70個である。内訳は縄文土器2個、土師器52個、須恵器9個、自然石6個、鉄製品1個である。

土器片63個の表裏関係は表19個(30%)、裏34個(54%)、立ち10個(16%)という比率になる。

ドット・マップでみた平面分布のあり方は、全体にまばらに散在し、特に変った傾向は指摘できない。

このドットをA-Bセクションに投影すると、床直から確認面付近まで平均に分布している。

カマド内からの出土遺物は須恵器2個である。

**遺物の概要** 本址の主体となる遺物は土師器と須恵器である。器種には环形土器、浅鉢形土器がみられる。須恵器には环形土器、長頸壺形土器、蓋形土器などが認められる。

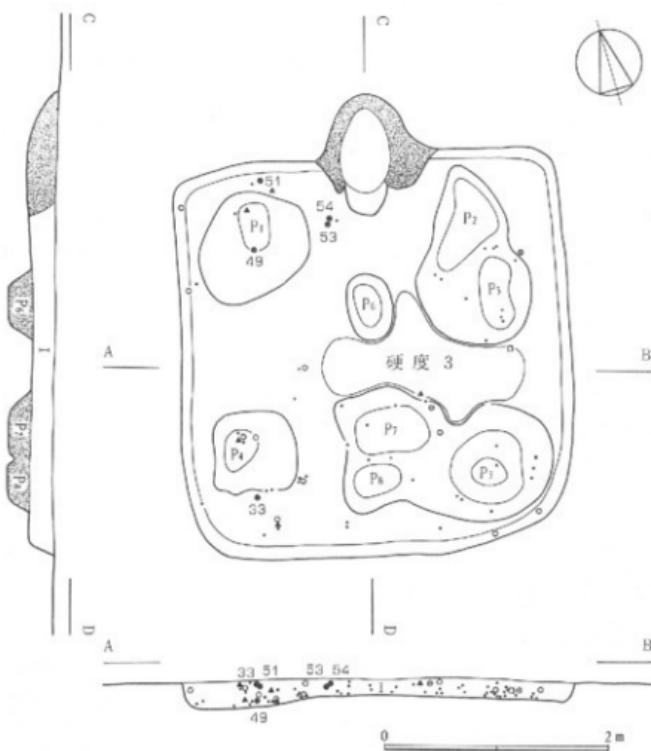
**土師器** 环形土器は、口縁部が内湾するものと外反するもの、黒色処理を施すものがあり、すべてロクロ成形である。浅鉢形土器も同様の手法が認められる。

51の墨書き土器は「卒」(本の旧字)と大書した明瞭な墨痕が残っている。

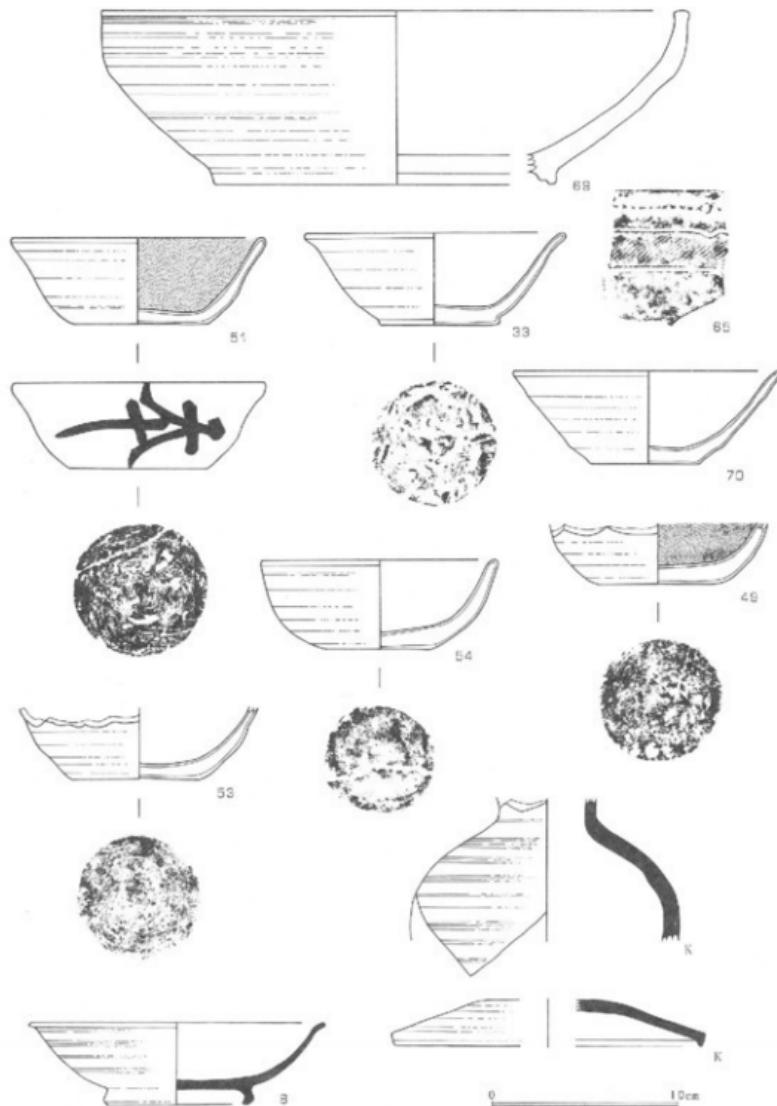
**須恵器** 8の环形土器は堅穴内出土、Kの長頸壺形土器と蓋形土器はカマド内出土である。

**鉄製品** 第四六図B-1H-60の鉄製品は釘で、現存長8cm、断面は方形(0.6×0.8cm)で先端は尖っている。

**時期** 本址の土器群は、9世紀第4四半期から10世紀の第1四半期のころであろう。



第三八圖 第一號住居址實測圖・遺物出土狀態圖



第三九圖 第一號住居址出土土器實測圖・拓影圖

## 2 第三号住居址（第四〇～四三・四六図、図版第三三・三四・三五・三九）

**遺存状態** 本址は第3トレント第2～3区より部分検出された。カマドと周壁の一部が確認された時点で、かなり大型の竪穴であることが予想できた。トレントを両側へ拡張して全容を捉えた結果、果せるかなA・B両地区を通じて最大規模の住居址となった。

西壁の壁外に2個の攢乱穴が存在するが、幸いにして両者とも深度が7～12cmと浅いため、壁面を破壊するまでには至らず、全体として保存の良好な竪穴である。

**規模** 東壁X-Z辺長6.6m、西壁W-Y辺長7.3m、南壁Y-Z辺長6.7m、北壁のW-X辺長6.7mを計測し、平面形状はWコーナーがやや張り出す隅丸方形を呈し、面積約46m<sup>2</sup>の大型竪穴住居址である。主軸方向はほぼ磁北を指している。

周壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁高はWコーナー60cm、Xコーナー60cm、Yコーナー31cm、Zコーナー20cm、東壁中央部33cm、西壁中央部46cm、南壁中央部27cm、北壁カマド付近64cmを測る。南壁が低いのは20°の斜面に構築されているためである。

壁面は非常に堅固で崩落は全く認められない。

**床面** 細かい凹凸はあるもののおおむね平坦である。全面硬く踏み固められており、硬度は3に相当する。

北壁のカマド付近を除く周壁下には幅15～20cm、深さ5～15cmの周溝がめぐっている。

竪穴のほぼ中央の床面上には80×70cmの範囲で厚さ12cmの焼土層が存在する。

**ピット** 床面の精査が進むにつれて7個のピットを検出した。7個のピットのうちP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が主柱穴としての機能を果したものと思われる。

P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は各コーナーのほぼ対角線上に位置し、P<sub>1</sub>の口径67×65cm、深さ58cm、P<sub>2</sub>の口径70×43cm、深さ65cm、P<sub>3</sub>の口径68×60cm、深さ60cm、P<sub>4</sub>の口径65×50cm、深さ54cmを測る。補助柱穴の役割を果したと思われるピットも存在する。

**カマド** 北壁の中央に位置する。住居内を充填する埋没土の除去が進行するにしたがい、総体的に崩落の程度が軽微で、往時の輪郭をよくとどめていることが確認された。

袖部を被覆する砂質粘土は青灰色で、A地区粘土坑のものと同質である。その範囲は東西200cm、南北190cmの規模を保つ。深さ床面下12cmの深い皿状の掘り込みを穿ち燃焼空間を形成している。特に掘り込みの南側部分に焼土の広がりが認められ、焚口部分を示していることがわかる。

煙道部は壁外へ100cmほど突出させた部分で、壁面には焼土化した部分が認められる。

袖部は砂質粘土を練り固めて築かれ、特に芯の用材に特殊なものを使用した形跡はない。

右側袖部の基部に水成岩が據えられているのは袖部の補強材であろう。

天井部の陥没は、本址の廃絶期に際し、人為的に天井部を破壊する行為が行われたことも考えられる。カマド内に何も残さず、しかも支脚まで抜いて破壊する類例は数多く存在する。

**埋没土** 床面から確認面までの土層断面は、ローム粒子・焼上粒子を微量に含んだ黒褐色土の單一層が堆積する。

**遺物の出土状態** 総数は623個である。内訳は土師器404個、須恵器89個、繩文土器74個、自然石51個、石器2個、鉄製品1個、鉄滓2個である。

土器は大部分が破片であるが、土師器壺形土器に完形品2個、一部欠損品3個が認められる。完形品を含めた土器破片567個の表裏関係は表274個(48%)、裏257個(46%)、立ち36個で6%という比率になる。

ドット・マップによる平面分布の状態は、46畝の豈穴内にはば平均して散在しているが、東西中心線の北側カマド寄りの方向に多く集中する傾向がみられる。

C-Dセクションを中心とした両側1mの範囲のドットを断面図に投影すると、床直には概して少なく、中層から確認面にかけて分布する。

また、平面分布の在り方を裏付けるように中央よりカマドへかけて密集する状態も看取できる。接合資料は須恵器に1例が抽出できた。

接合資料 1 〈壺形土器〉 474△6・234△41

**遺物の概要** 本址の主体となる遺物は土師器と須恵器である。土師器の器種には壺形土器、壺形土器、高台付壺形土器がみられる。須恵器には長頸壺形土器、壺形土器、壺形土器が認められる。

**土師器** 壺形土器は、口縁部が外反し、胴部は長胴となる器形である。胴部の最大径は肩部付近の上位になるだろう、口縁部付近は刷毛目を施す。

壺形土器と高台付壺形土器はロクロ整形後に黒色処理を施すものもある。

**須恵器** 32・513は壺形土器、473は長頸壺形土器の口縁部、41はその底部であろう。

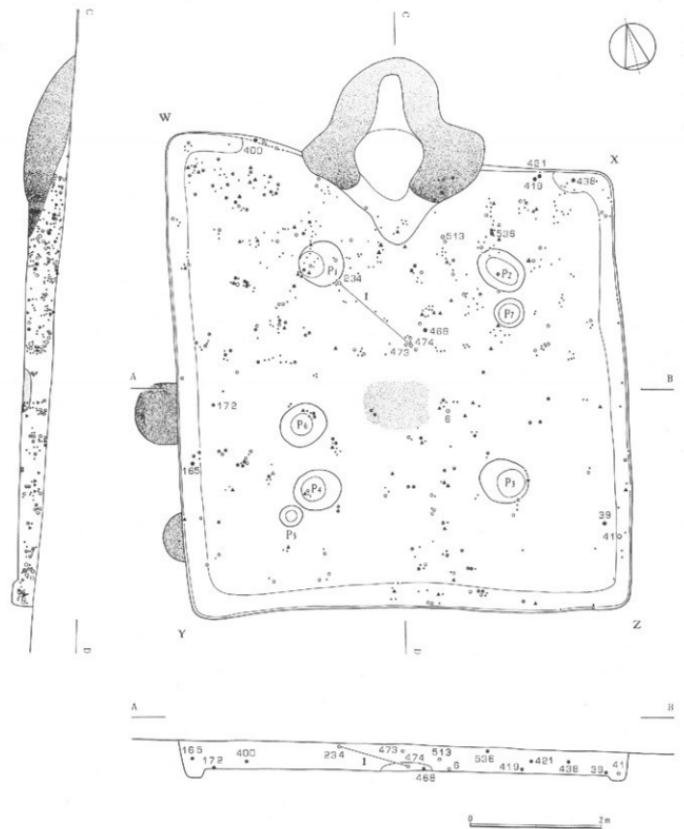
473と41には緑色の自然釉が付着している。

接合資料1は壺形土器の口縁部である。

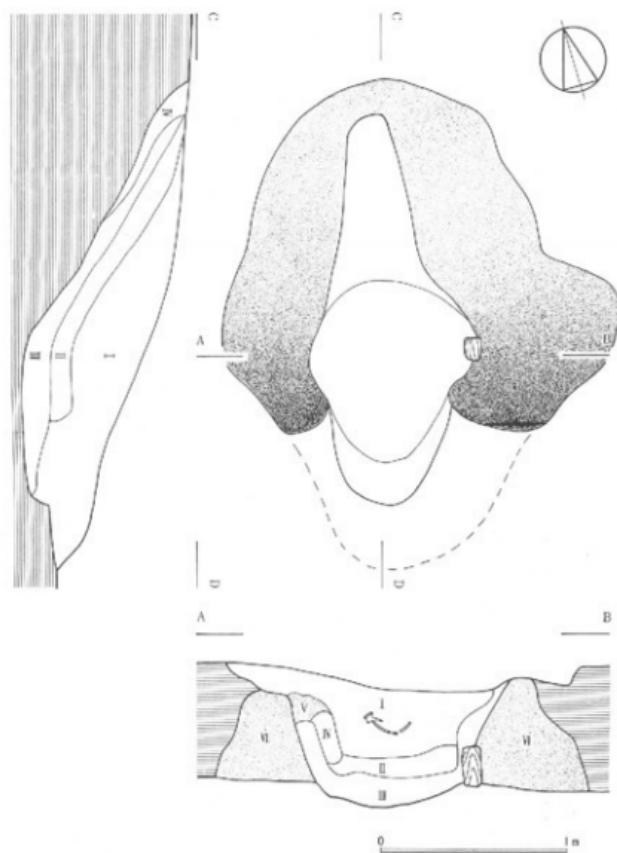
**石器** 第四五図B-3H-142・534は共に小形の石斧で、142は局部磨製石斧である。

鉄製品 第四六図B-3H-529は刀子の破損品で、現存長6.5cmである。

**時期** 9世紀の第4四半期を中心とした土器群であろう。

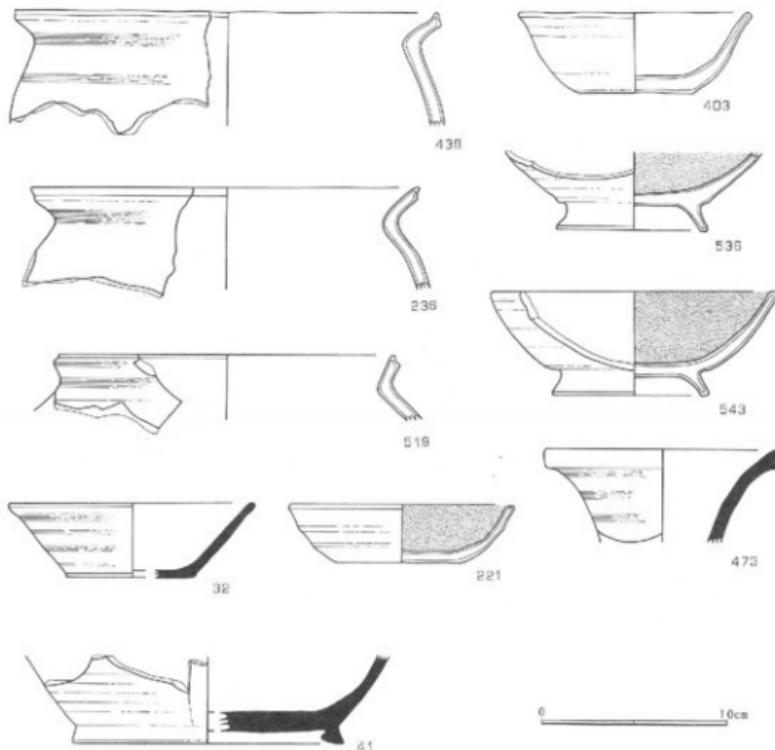


第四〇圖 第三號住居址尖測圖・遺物出土狀態圖

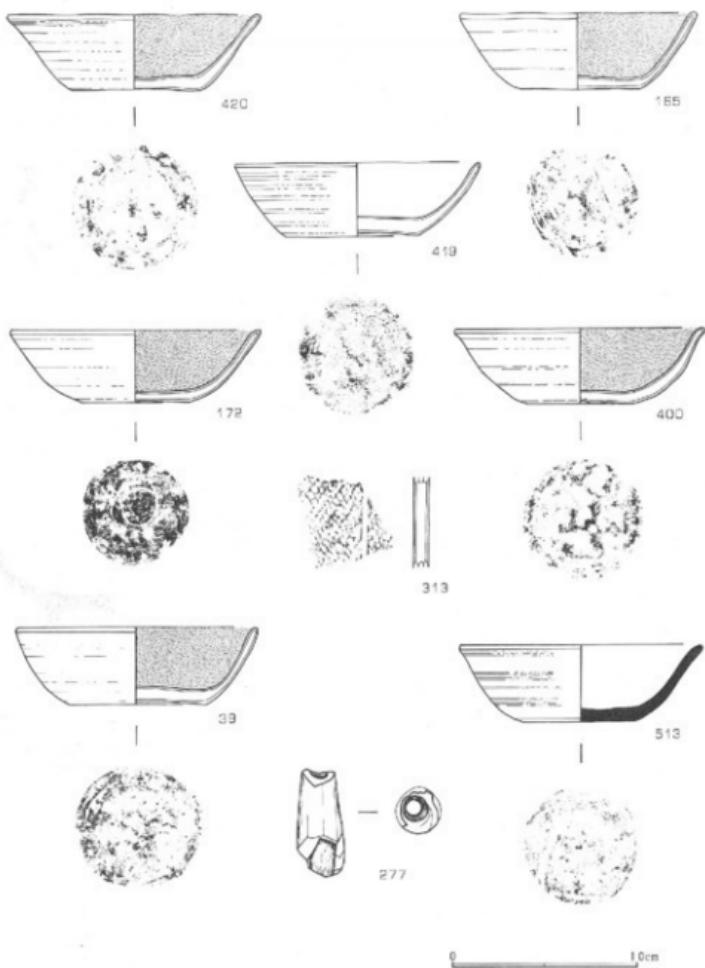


第四一図 第三号住居址カマド実測図

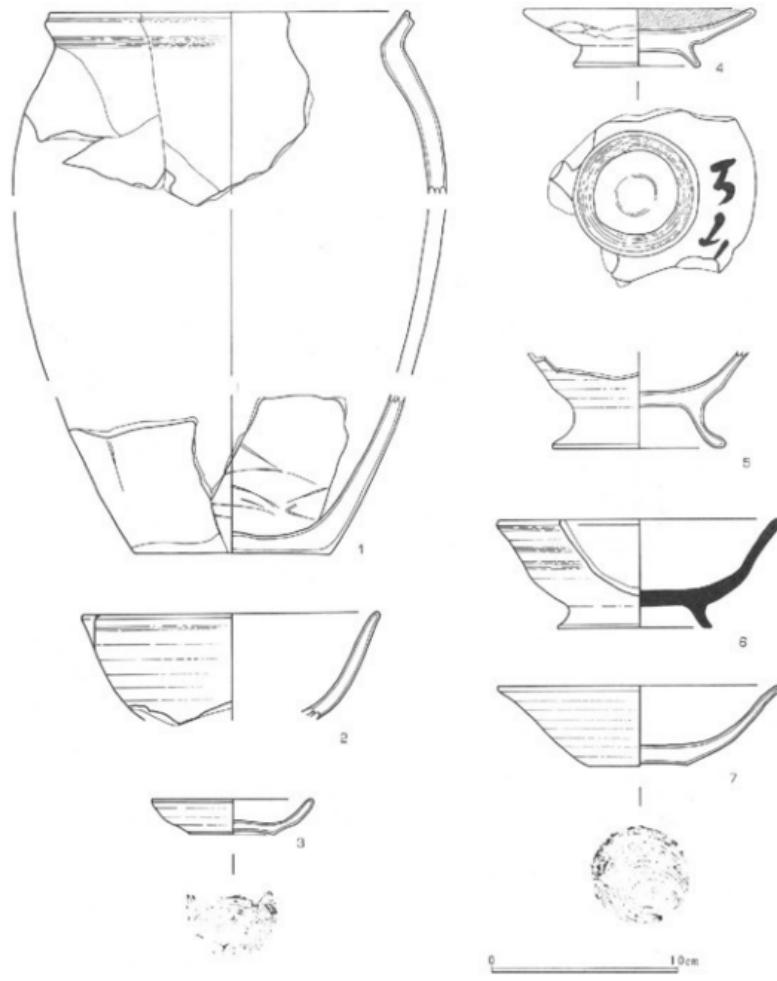
- |          |                        |
|----------|------------------------|
| I 黒褐色土   | 焼土多量、粘土小ブロック・ロームブロック混入 |
| II 赤褐色土  | 焼土・粘土ブロック混入            |
| III 焼 土  | レンガ状、非常にかたい            |
| IV 焼 土   | さらさらしている               |
| V 赤変粘土   | 天井の崩落か                 |
| VI 青灰色粘土 | 袖部構築材                  |



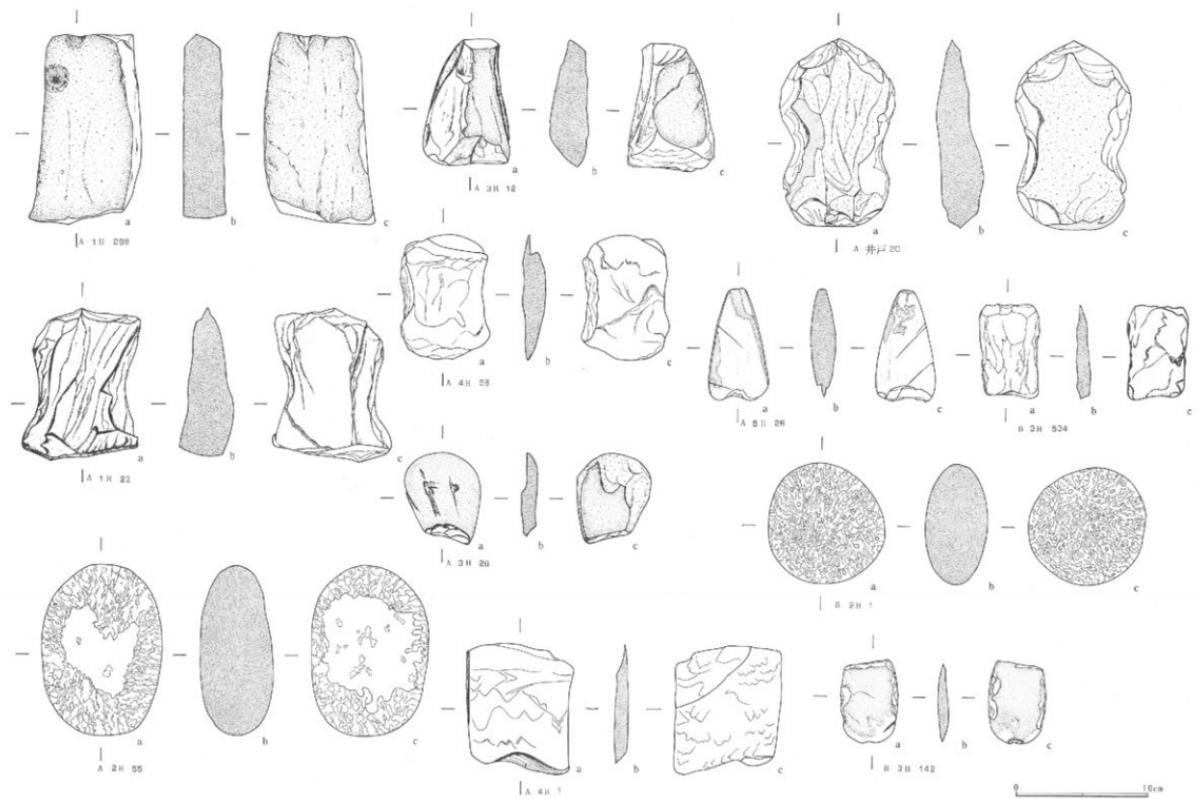
第四二圖 第三号住居址出土上器実測図（一）



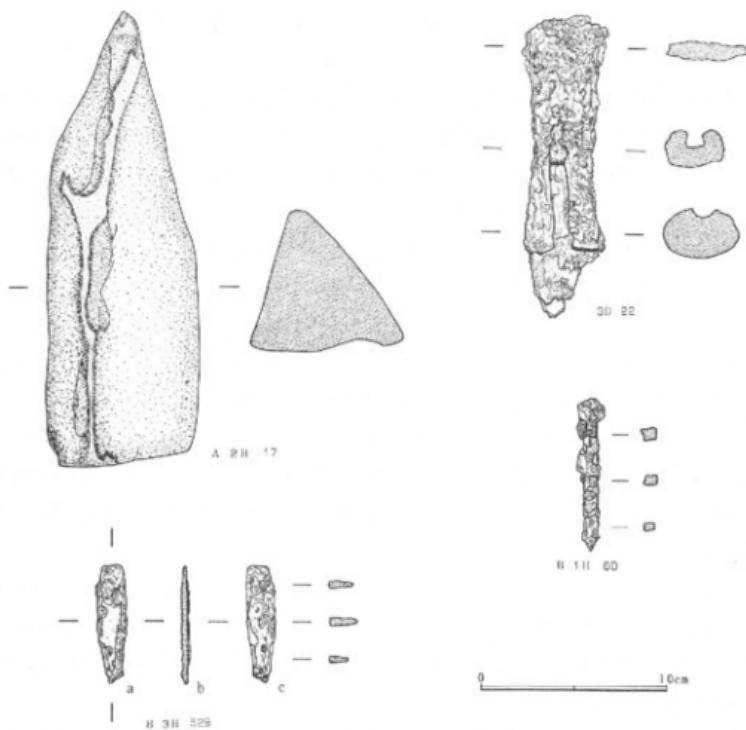
第四三圖 第二號住居址出土土器實測圖(二)



第四四図 A 地区確認面出土土器実測図



第四五圖 A 地區, B 地區出土石器剖面圖



第四六図 A 地区, B 地区出土石器, 鉄製品実測図

## 第一三章 ま と め

寺崎台地遺跡の発掘調査の概要は、以上に記述してきたとおりであって、A地区においては縄文時代後期中葉の円形周溝状遺構、歴史時代の住居址、土壙、粘土坑、井戸状遺構などを、B地区においては縄文時代後期中葉の住居址、歴史時代の住居址などを発見して、当初に予想した以上の考古学的情報を獲得することができた。

歴史時代の住居址は、A地区に7軒、B地区に2軒の合計9軒である。形状は方形を基本としてはいるが、若干ゆがんだ不整形が多く、長方形のものもある。大型住居址も3軒ある反面、小型の住居址もあった。カマドが構築されている住居址は4軒すべて北壁に付設されている。

柱穴についても、通常4本存在すべきものが3本の住居があり、さらには全く検出できない事例もあった。A地区の円形周溝状遺構とB地区の第二号住居址は縄文時代後期中葉の遺構である。

出土土器は、各遺構ごとに図示した内容が大部分である。土師器と須恵器を合わせた器種は、壺形土器、壺形土器、壺形土器、高台付壺形土器などがある。それぞれに時期を画する製作上の特徴が窺われる。こうした土器は、大略8世紀の後半から10世紀の前半に及ぶ年代を想定し得ると思う。

一方、A地区的住居址や第二号土壤などから多量に出土した土師質土器、いわゆるカワラケ状の皿形土器は市内の石井台遺跡からも出土している。この使用目的は本遺跡の場合、灯明皿として使用されたことを示す煤の付着が認められるように、信仰対象あるいは追善供養での灯明、供獻用具などが考えられる。

円形遺構の周辺からの出土量が多いことから考察すると、あるいは円形遺構がその対象であったかもしれない。

皿形土器の出土例は意外に少なく、本県内でも数例を数えるに過ぎない。2点出土した墨書き土器とともに、本遺跡と石井台遺跡との関連を究明する上で貴重な資料になり得るであろう。

粘土坑に貯蔵されていた青灰色砂質粘土は住居址のカマド構築材と同質のものであった。採取した粘土を貯えて、8世紀の後半以降、長期間にわたってカマド構築用その他に供給していたものと考えられる。採取地がどこであったか、この探索も今後の課題といえよう。

末筆ながら寺崎台地遺跡の発掘調査報告書を上梓するにあたり、笠間市教育委員会社会教育課をはじめ、太平洋観光開発株式会社、菅谷緑建株式会社の発掘作業員各位の御協力に対し、深甚なる謝意を表するものである。また、御来詣いただいた水戸教育事務所生涯学習課長平松俊男氏、同文化財担当社教主事曾根秀嗣氏、同学校教育課指導主事村上修身氏、同飯島勇氏、元文化財担当社教主事門井洲雄氏、元県埋蔵文化財指導員萩原義照氏、日本考古学協会会員井上義安氏、大芦あさ氏各位の御指導、御助言に対してもららため感謝の意を捧げる次第である。

## 笠間市寺崎台地遺跡発掘調査会役員名簿

会長 原田敏夫 笠間市教育委員会教育長  
副会長 河村正夫 笠間市教育委員会教育次長  
理事 鈴木重世 太平洋観光開発(株)代表取締役  
同 千種重樹 主任調査員(団長)  
同 船橋優 笠間市教育委員会社会教育課長  
幹事 西野鉢一 派遣社会教育主事  
同 松江和男 笠間市教育委員会社会教育係長  
同 富田福二 笠間市市史編さん室長  
監事 雨海弘之 笠間市中央公民館館長(A地区)  
同 藤岡靖之 笠間市中央公民館館長(B地区)  
同 豊田修司 笠間市教育委員会社会教育主事

### 発掘作業従事者

調査員 千種重樹(団長)  
補佐員 水谷正 小堤静江 高橋陽子(A地区)  
飯島栄子(B地区)  
作業員 菅谷緑建株式会社従業員(栃木県真岡市根本205番地)  
菅谷清一(社長)  
関口勇 船橋昭吾 小沢政治 賀川栄憲  
久保真希子 上野タケ 古沢たつ 高橋恵美子  
高松静子 渡辺みつ江 大山ヨテ 古沢ナミ  
富田君代 高松トキ 高野キク 薄井ハル  
榎戸ヨシコ

### 整理報告書作成従事者

千種重樹 飯島栄子 田村みどり

図 版

A 地 区



A地区確認面出土墨書土器



遺跡の現状と東南方向に佐白山を望む



遺跡より眺めた南西の景観



遺構検出作業風景（第一号住居址、円形遺構付近）



遺構プラン検出後の状況（西側より）



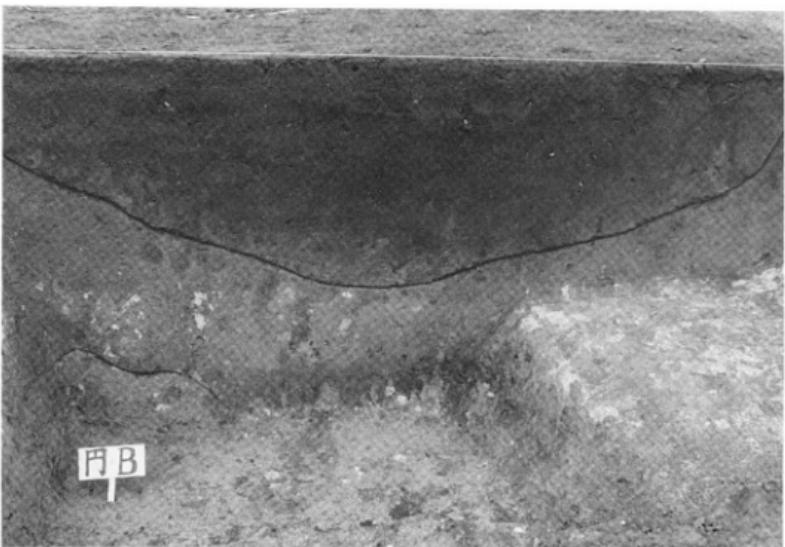
円形造構プラン確認の状況〈西側より〉



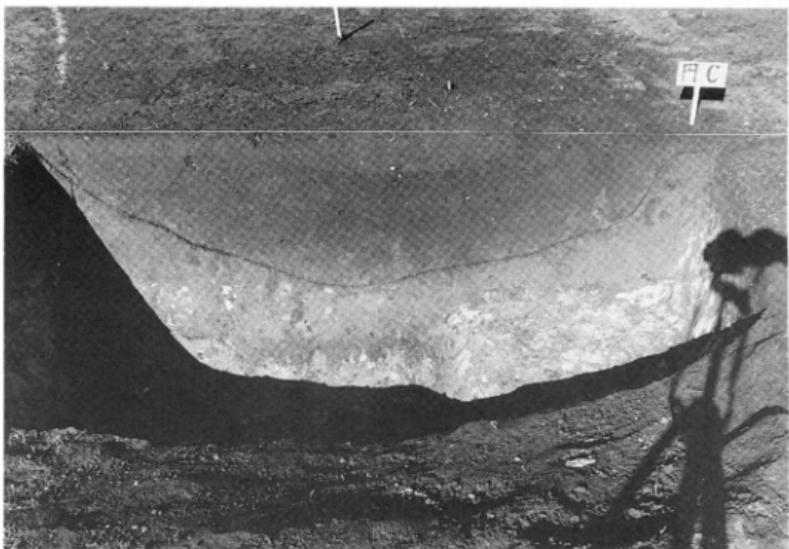
円形造構発掘後の状況〈西側より〉



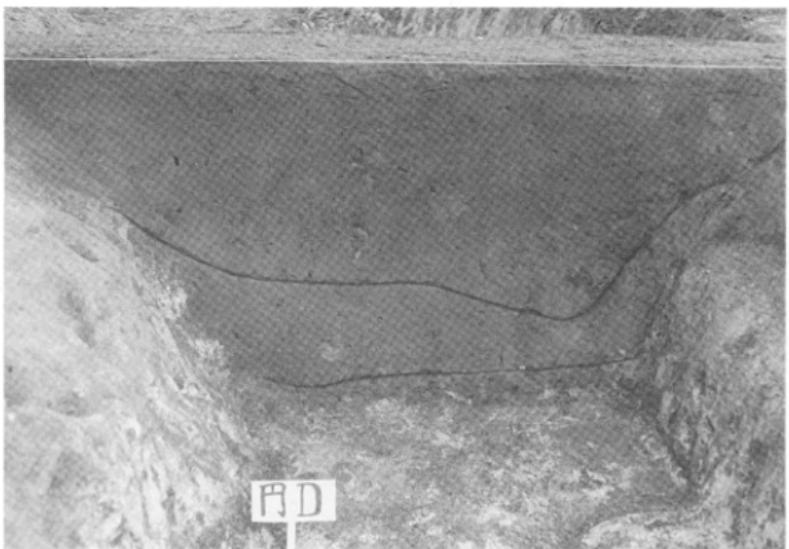
円形造構側溝A—Bセクション土層断面〈南側より〉



円形造構周溝C—Dセクション土層断面〈南側より〉



円形造構周溝E-Hセクション土層断面〈西側より〉



円形造構周溝G-Hセクション土層断面〈西側より〉



発掘調査風景〈第五号住居址〉



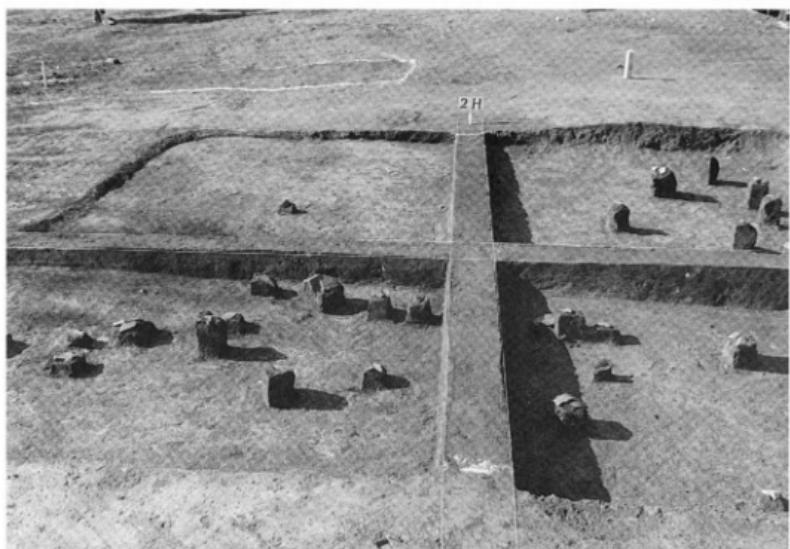
発掘調査後の遺跡の全景〈西側より〉



発掘調査風景（第一号住居址付近）



第一号住居址遺物出土状態（西側より）



第二号住居址遺物出土状態（東側より）



第三号住居址遺物出土状態（東側より）



第四号住居址遺物出土状態（南側より）



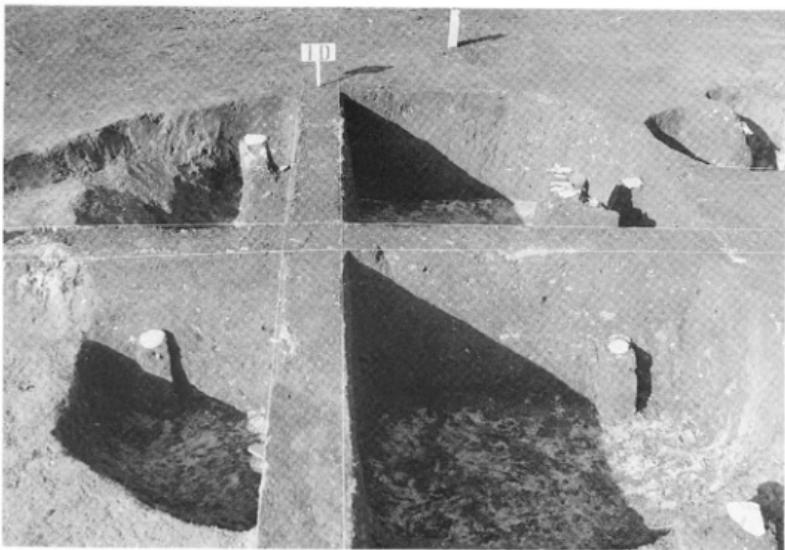
第五号住居址遺物出土状態（西側より）



第六号住居址遺物出土状態（西側より）



第七号住居址遺物出土状態（東側より）



第一号土壤遺物出土状態（東側より）



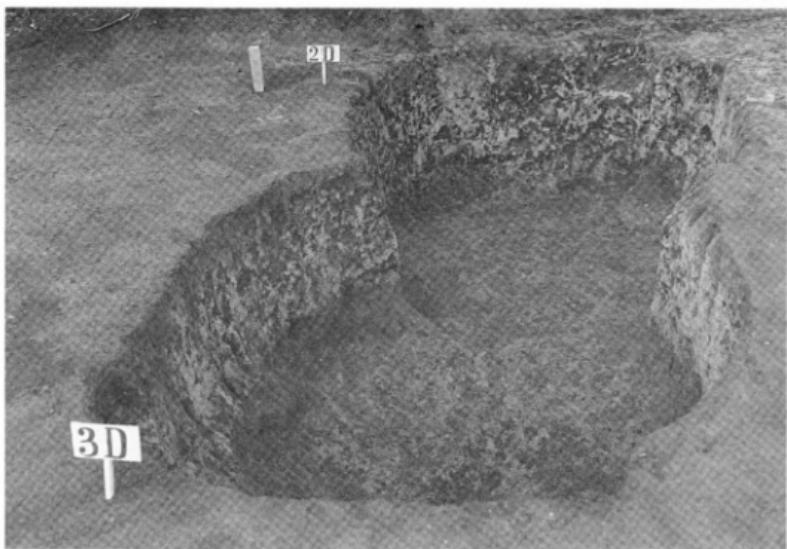
第二号土壤遺物出土状態（北側より）



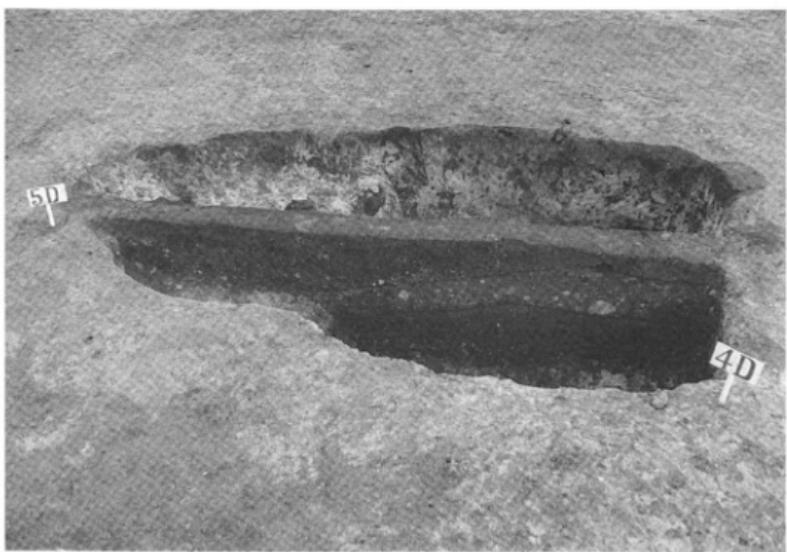
第二号土壤遺物出土状態〈南側より〉



第三号土壤遺物出土状態〈西側より〉



第二号（上），第三号（下）土壤全景〈南側より〉



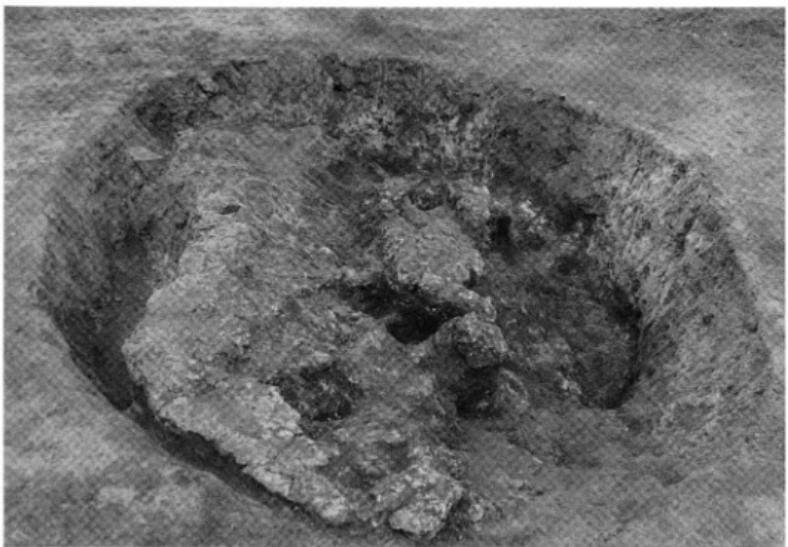
第四号（右），第五号（左）土壤全景〈北側より〉



第六号土壤遺物出土状態（南側より）



粘土坑全景（南側より）



粘土坑全景〈東側より〉



井戸状遺構全景〈南側より〉

圖版第一六



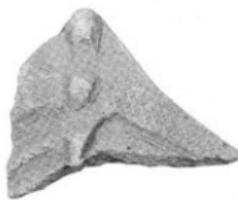
136



288



130



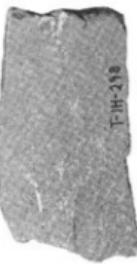
23



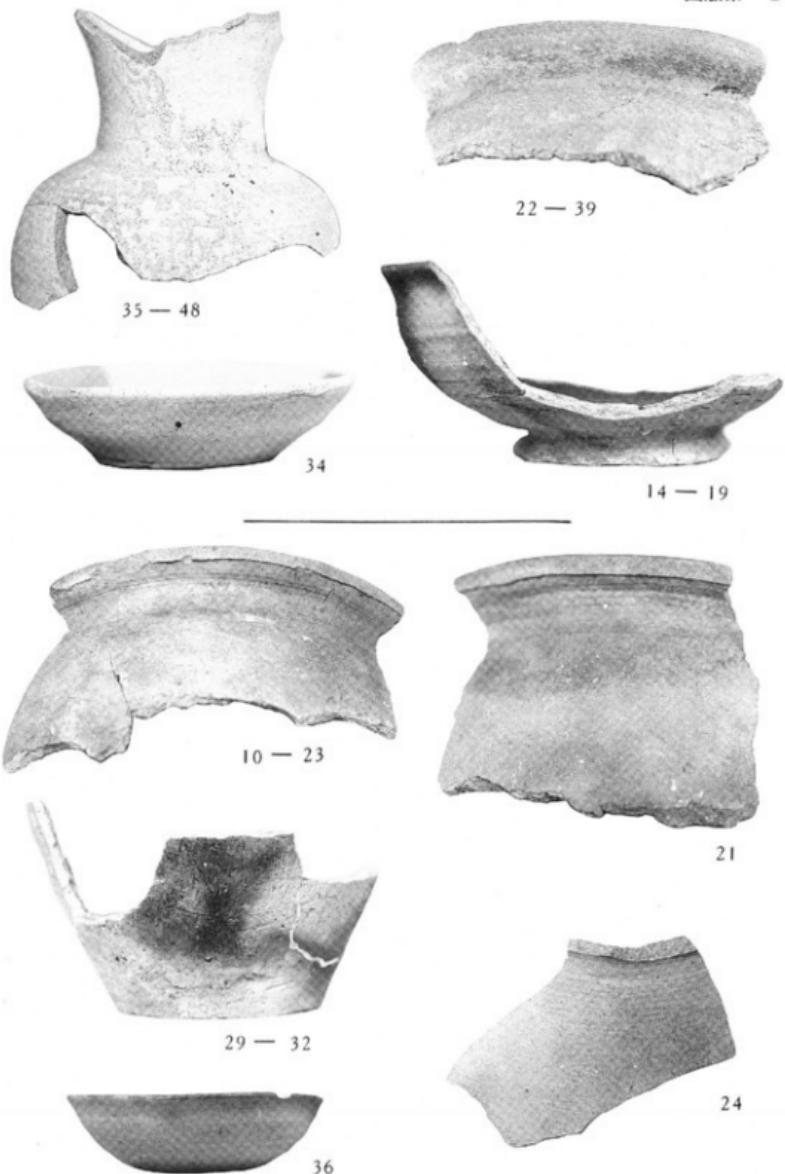
—



298

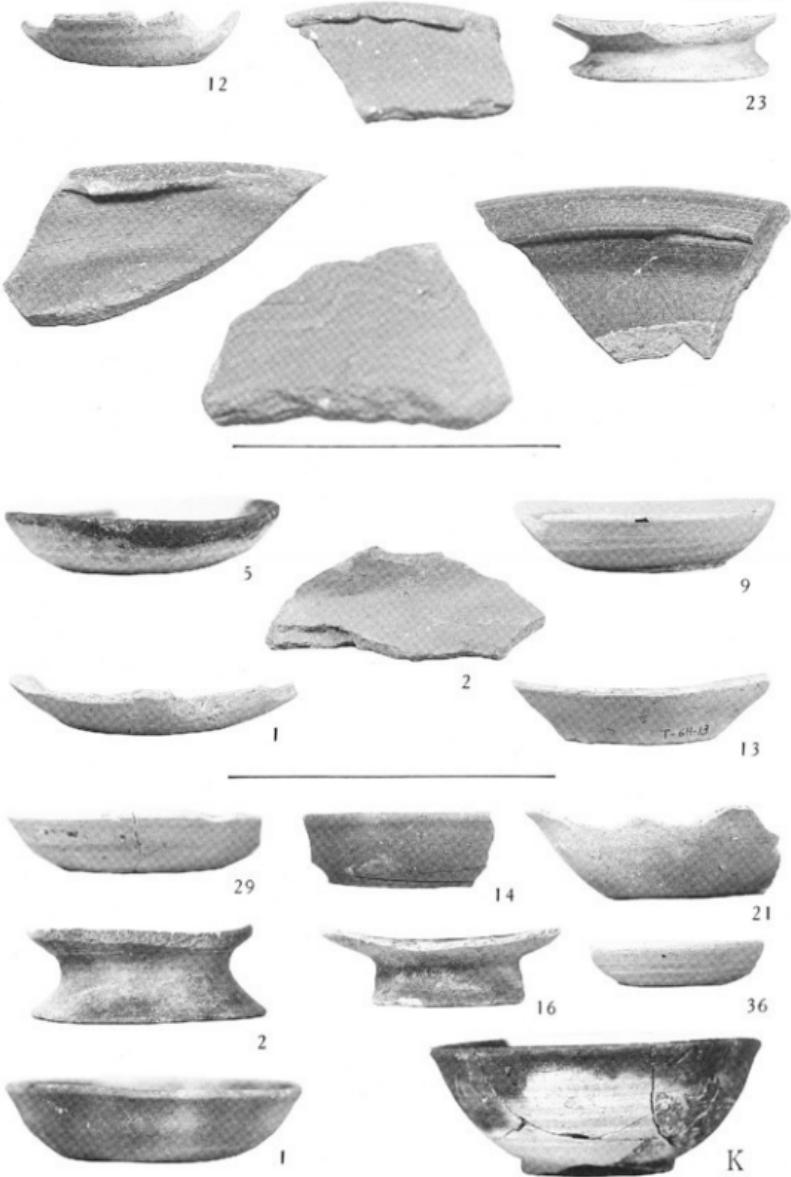


—



第三号 (上)，第四号 (下) 住居址出土土器

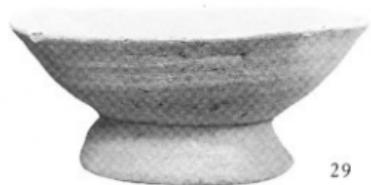
図版第一八



第五号（上），第六号（中），第七号（下）住居址出土土器



第二号土坡出土土器



29



16



37



23



34



27



66



36

—



16

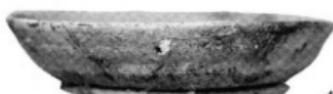


4

第二号（上），第三号（下）土壤出土土器



1



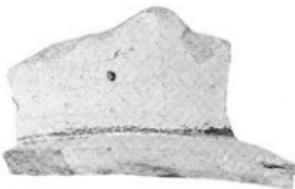
4



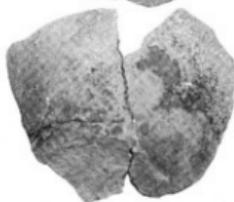
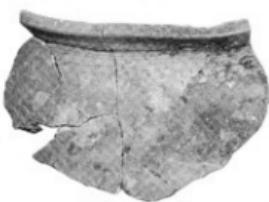
5



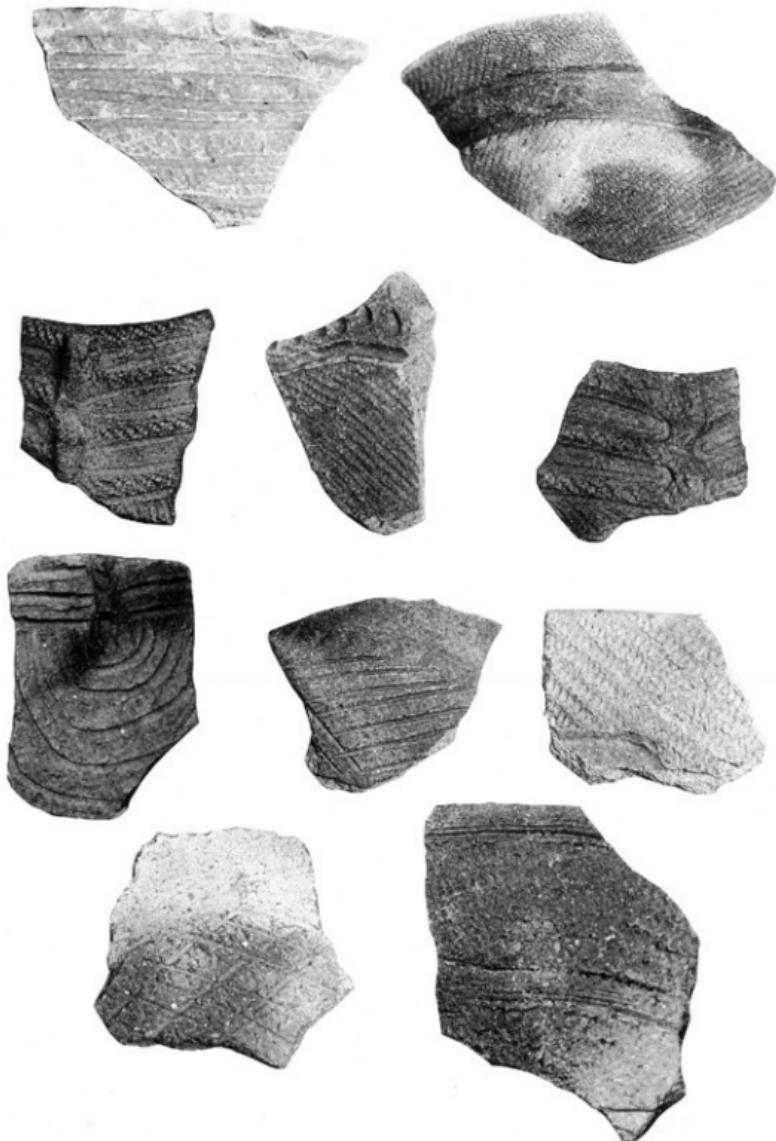
13



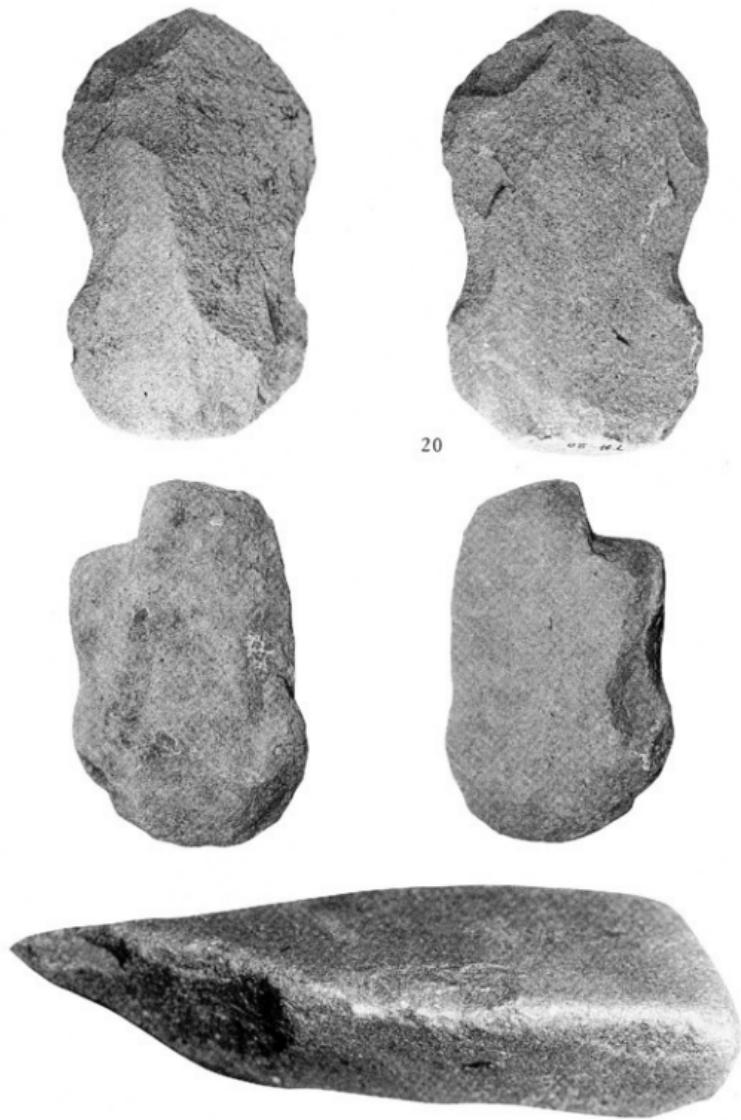
32



第四号土壤（上），井戸状造構（中），埴認面（下）出土土器



円形周溝状遺構出土土器



井戸状遺構（上二段），第二号住居址（下）出土石器，炉石



鉄製品（上段），土偶（下）

## B 地 区



B地区第二号住居址遺物出土状態



寺崎台遺跡B地区の現状〈南東側より〉



第1トレンチの試掘状況〈西側より〉



第2 トレンチの試掘状況〈東側より〉



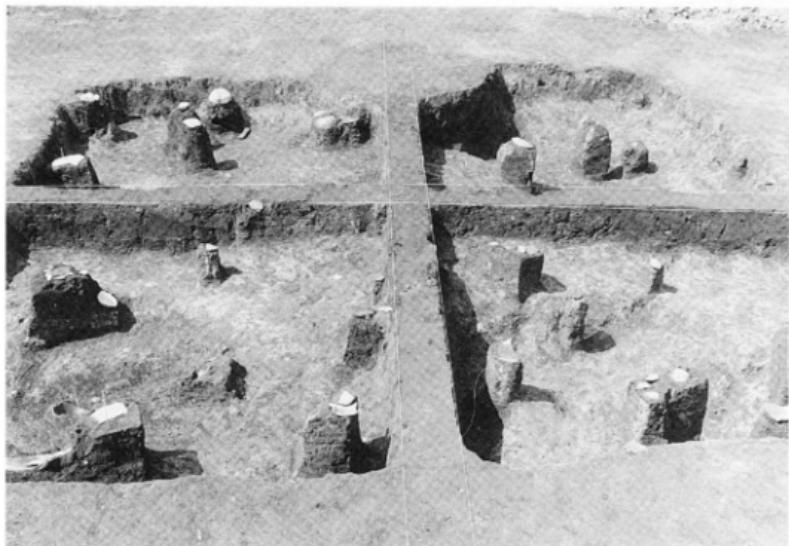
第2 トレンチの全景〈西側より〉



第3 トレンチの試掘状況〈西側より〉



第3 トレンチの全景〈西側より〉



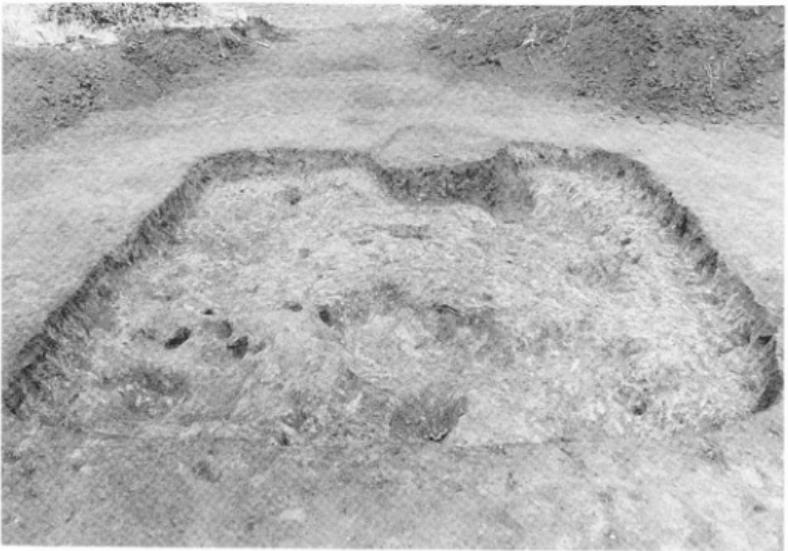
第一号住居址遺物出土状態〈南側より〉



第一号住居址遺物出土状態〈南側より〉



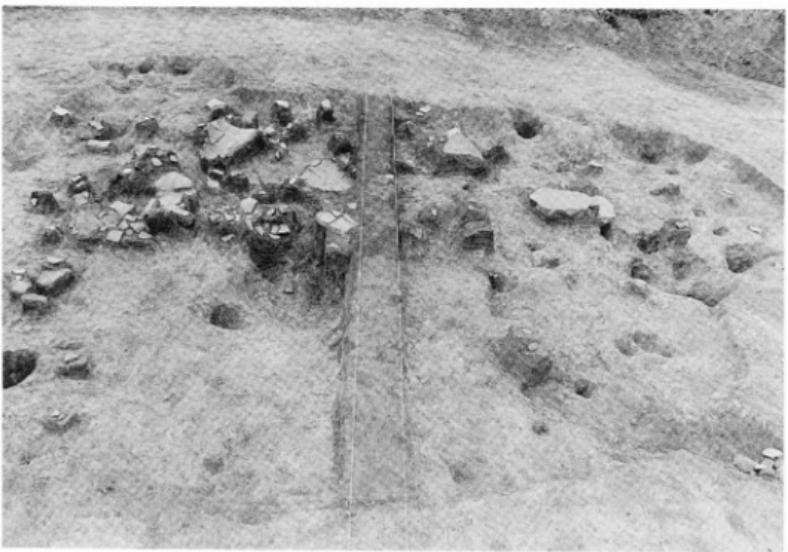
第一号住居址遺物（墨書き土器）出土状態〈南側より〉



第一号住居址全景〈南側より〉



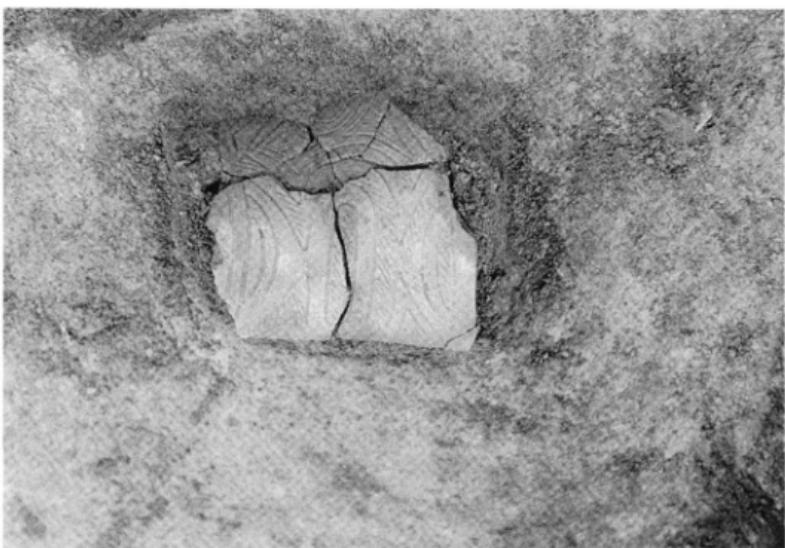
第二号住居址発掘調査風景（西側より）



第二号住居址遺物出土状態（南側より）



第二号住居址遺物出土状態〈南側より〉



第二号住居址遺物出土状態〈北側より〉



第二号住居址遺物出土状態〈南側より〉



第二号住居址遺物出土状態〈南側より〉



第三号住居址発掘風景（西側より）



第三号住居址遺物出土状態（南側より）



第三号住居址遺物出土状態〈東側より〉



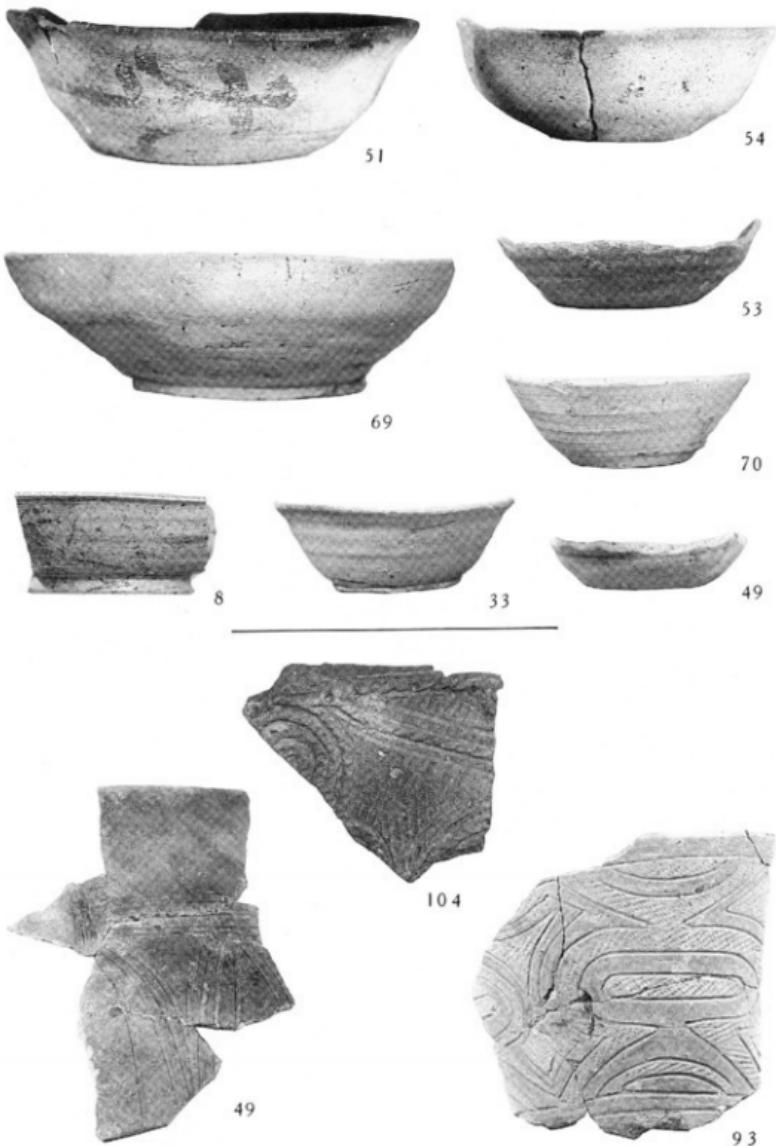
第三号住居址遺物出土状態〈西側より〉



第三号住居址カマド断面〈南側より〉



第三号住居址全景〈南側より〉



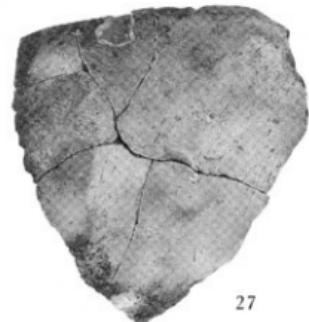
第一号（上），第二号（下）住居址出土土器



77



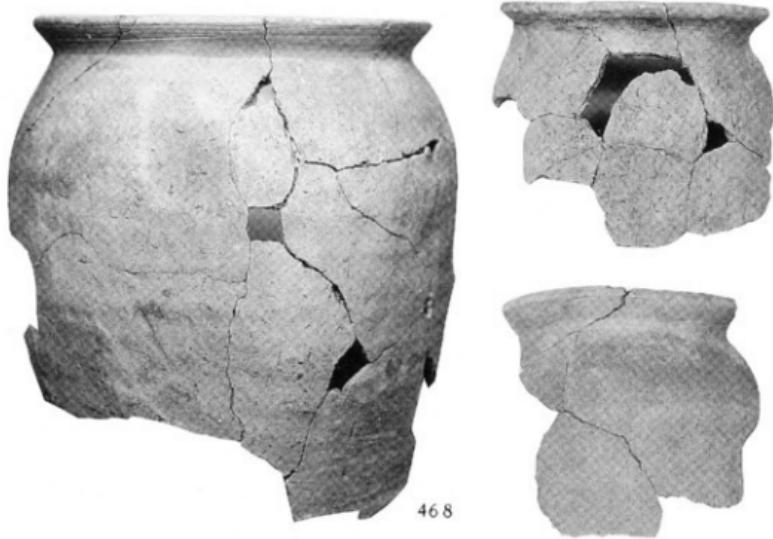
113



27



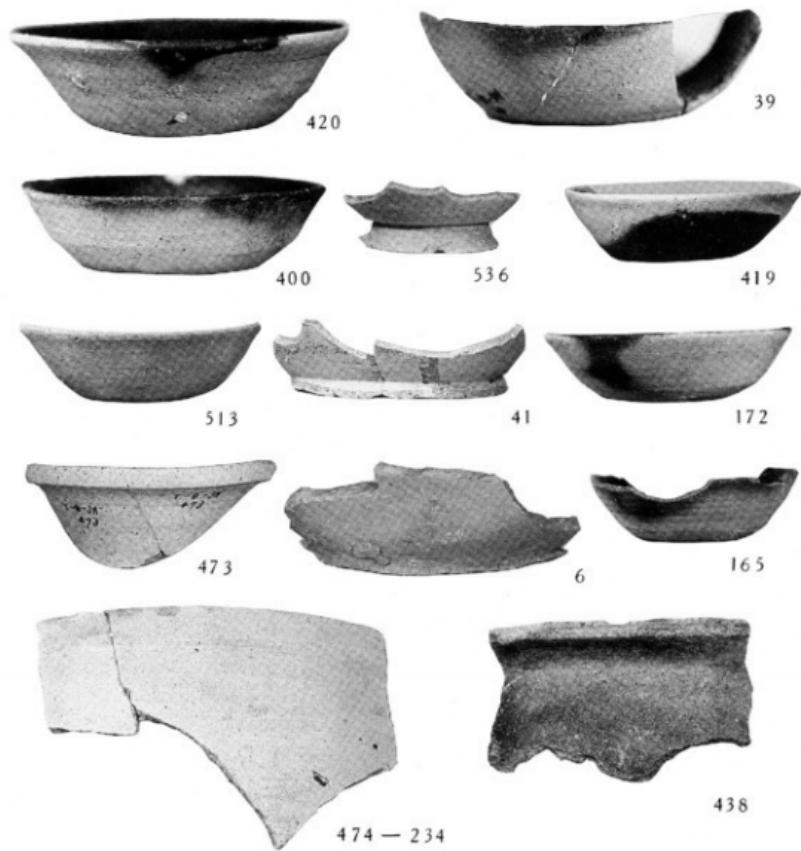
45



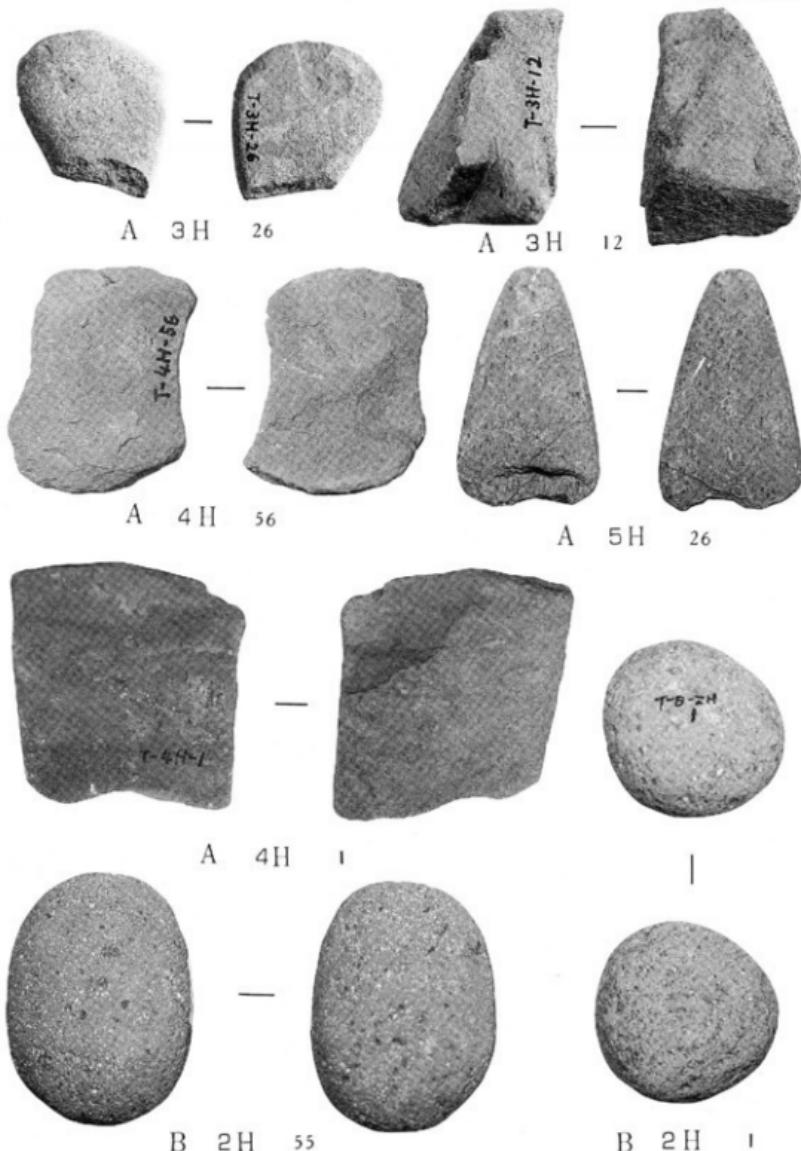
46 8

第二号（上），第三号（下）住居址出土土器

図版第三九



第三号住居址出土土器



A・B両地区出土石器

## 寺崎台地遺跡

---

平成4年3月

編集 千種重樹

発行 寺崎台地遺跡発掘調査会

印刷 ワタヒキ印刷株式会社

---

